

資料編

第2部 資料編目次

A-1	Tohoku U. PFFP/NFP2016 フルコースプログラム内容	33
A-2	リフレクティブジャーナル・ガイド 2016	41
A-3	先輩の知恵	48
A-4	マイクロティーチング・ガイド 2016	55
A-5	大学教職員のための推薦図書（推薦図書リスト）	60
A-6	OB/OG 通信	69
A-7	先達教員ガイド 2016	74
A-8	先達教員説明会資料	86
A-9	Tohoku U. PFFP2016 広報ポスター	89
A-10	Tohoku U. NFP2016 広報ポスター	90
A-11	Tohoku U. PFFP2016 パンフレット	91
A-12	Tohoku U. NFP2016 パンフレット	93
A-13	大学教育支援センターウェブサイトにおけるプログラム進捗報告	95
A-14	Tohoku U. PFFP/NFP2016 事前説明会 プログラム概要説明資料	97
A-15	各活動と参加者の声	103
A-16	研修の評価指標開発のための先行研究調査	133
A-17	全国プログラムユーザ会議配布冊子	135
A-18	全国プログラムユーザ会議・プログラムのあゆみ	149
A-19	全国プログラムユーザ会議・話題提供者発表資料	151
A-20	全国プログラムユーザ会議・ディスカッション資料	158
A-21	全国プログラムユーザ会議・ウェブページ	160
A-22	パークレー研修前メールマガジン	164
A-23	Tohoku U. PFFP2016 成果報告会発表資料	168
A-24	Tohoku U. NFP2016 成果報告会発表資料	173
A-25	最終課題レポート集	176
A-26	先達教員アンケートの結果	190
A-27	2016年度 PFFP/NFP ショートコース参加者アンケートの結果	192
A-28	2016年度 PFFP/NFP フルコース参加者アンケートの結果	198
A-29	2016年度 PFFP/NFP 海外他大学訪問調査参加者アンケートの結果	204
A-30	プログラムのあゆみ（2010年度～2016年度）	206

※資料として PFFP/NFP/フルコース/ショートコース向けの複数のバージョンがあり、
内容が類似している場合には、PFFP フルコース向けを収録した

プログラム参加者のみなさまへ

Tohoku U. PFFP/NFP 2016 フルコースへようこそ！

Tohoku U. PFFP/NFP 2016 には専門も経歴も異なる 29 名（フルコース：6 名、ショートコース：23 名）が集います。プログラムで提供されるセミナーやワークショップにおいての学びだけでなく、参加者同士がお互いの視点を学び合い、より広い視野で大学教員という仕事、大学教育について考えることができるよう、プログラムを積極的に活用しましょう。なお、本プログラムは大学院生を対象とした東北大学 大学教員準備プログラム（Tohoku U. PFFP）の参加者と新任教員プログラム（Tohoku U. NFP）の参加者が一緒に取り組みます。

東北大学 新任教員プログラム 大学教員準備プログラム 2016

Tohoku University **New Faculty Program**
Tohoku University **Preparing Future Faculty Program**

参加者名簿

〔フルコース参加者〕

<PFFP 参加者>

1	イシハラ 石原 雅文	マカホミ マカホミ 雅文	男	日本	東北大学 原子分子材料科学高等研究機構	PD
2	ハヤシ 林 慎吾	シノグ シノグ 慎吾	男	日本	東北大学大学院 教育学研究科	D2
3	オウ 王 偉	イ イ 偉	男	中国	東北大学大学院 国際文化研究科	専門研究員

<NFP 参加者>

1	タナカ 田中 智洋生	カミヤ カミヤ 智洋生	男	日本	東北大学 サイクロロン・ラジオアイソトープセンター	助教
2	Roots Roots Maia	マイア マイア Maia	女	エストニア	東北大学大学院 法学研究科	助教
3	ヨシダ 吉田 サラン	サラ サラ 沙蘭	女	日本	東北大学大学院 教育学研究科	准教授



【ショートコース参加者】
 <PFFP参加者>

1	シロウ シン 周 焜	中国	東北大学大学院 国際文化研究科	GSICS フォロー
2	ワタナベ リョウタ 渡邊 竜太	日本	東北大学大学院 国際文化研究科	GSICS フォロー
3	ナリタ ヒロユキ 成田 裕幸	日本	東北大学大学院 理学研究科	D1
4	ナカノ ヒロユキ 中尾 教子	日本	株式会社内田洋行 教育総合研究所	研究員

<NFP参加者>

1	ニイ マキ 新居 麻樹	日本	東北大学歯学部 附属歯科技工士学校	講師
2	エン シュンゴウ 袁 春紅	日本	岩手大学 農学部	准教授
3	シユハマ コウジ 主演 佑二	日本	岩手大学 教育推進機構	准教授
4	オオノ ミチカ 大野 美紗	日本	岩手大学 農学部応用生物化学科	助教
5	トミノカ ヨウコ 富永 陽子	日本	岩手大学 教育推進機構	准教授
6	ハラタ サチコ 原田 奈穂子	日本	東北大学 医学系研究科 保健学専攻	講師
7	タナカ ヤスエ 田中 恭恵	日本	東北大学大学院 歯学研究科	助教
8	エンコウ コウキ 遠海 友紀	日本	東北学院大学 ラーニング・コモンズ	特任助教
9	シマダ 嶋田 みのり	日本	東北学院大学 ラーニング・コモンズ	特任助教
10	カマタ セイジ 鎌田 誠司	日本	東北大学 学際科学フロンティア研究所	助教
11	カヤマ マサヒロ 鹿山 雅裕	日本	東北大学 学際科学フロンティア研究所	助教

12	ウエカキ ケミ 上岡 紀美	日本	仙白白百合女子大学 人間学部人間発達学科	講師
13	シロク ユカリ 塩飽 由香利	日本	東北大学 歯学研究科	助教
14	オノカワ マリコ 及川 麻理子	日本	東北大学 歯学研究科	助教
15	ツボキ トモル 坪谷 透	日本	東北大学 歯学研究科	助教
16	ヤマノウチ マスナリ 山内 保典	日本	東北大学 高度教養教育・学生支援機構	准教授
17	スオハラ アキコ 菅原 明子	日本	東北大学病院看護部 東北大学大学院医学系研究科	助手
18	タマカケ ゲン 玉懸 元	日本	いわき明星大学 教養学部	准教授
19	ニシオカ タカシ 西岡 貴志	日本	東北大学大学院 歯学研究科	助教



プログラムの概要

<達成目標>

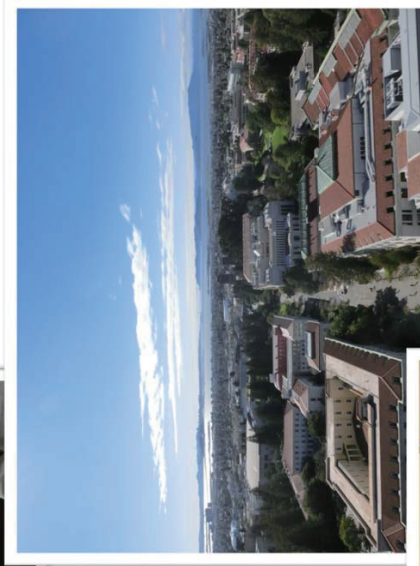
参加者はプログラムでの活動、経験を通して、次のことを目指します。

- 生涯にわたり専門性を高めるために、効果的な省察ができるようになること
- 大学教員の役割、仕事を理解し、展望を持ってキャリアを設計できること
- 教育活動に関する基礎的知識を身につけ、自分なりの言葉で教育観を語れるようになること
- 異分野の研究や教育文化を知ること

<活動内容>

目標を達成するために、参加者は次の活動に取り組めます。

- 仕事を理解する（高等教育や大学教員の仕事に関するセミナー）
- 基礎知識を得る（シラバス作成ワークショップ）
- 実践力を磨く（マイクロティーチング、模擬授業）
- 比較の目を育てる（セミナー、ワークショップ、国内／海外他大大学訪問調査）
- 同僚とつながる（他の参加者との交流、ディスカッション）
- 先輩から学ぶ（授業参観、コンサルテーション）
- 自己省察力を養う（リフレクティブ・ジャーナル）



活動内容とスケジュール

2016年7月						
月	火	水	木	金	土	日
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

2016年8月						
月	火	水	木	金	土	日
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

2016年9月						
月	火	水	木	金	土	日
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

2016年10月						
月	火	水	木	金	土	日
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

2016年11月						
月	火	水	木	金	土	日
1	2	3	4	5	6	
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

2016年12月						
月	火	水	木	金	土	日
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

2017年1月						
月	火	水	木	金	土	日
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29

2017年2月						
月	火	水	木	金	土	日
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

2017年3月						
月	火	水	木	金	土	日
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

セミナー等実施日

リアルクティブ・ジャーナル提出締切日

- 2016.7.16 (土) リアルクティブ・ジャーナル締切日
- 2015.7~2016.1 授業を見る聞く学ぶ
- 2016.8.25 (木) 授業デザインとシラバス作成
- 2016.9.14 (水) 授業づくり：準備と運営
- 2016.10.14 (金) 本当のかしことは何か
- 2016.10月中 オプション：国内他大訪問調査
- 2016.11月中 マイクロティーチング
- 2016.12.9 (金) コーチャング技法を活用した院生指導
- 2017.2月上旬 模擬授業
- 2017.2月~3月 オプション：海外他大訪問調査
- 2017.3月上旬 先達コンガレーション
- 2017.3月中~下旬 成果報告会
- 2016.7.21 (木) リアルクティブ・ジャーナル締切日
- 参観から3日後
- 2016.8.30 (火) リアルクティブ・ジャーナル締切日
- 2016.9.20 (火) リアルクティブ・ジャーナル締切日
- 2016.10.19 (水) リアルクティブ・ジャーナル締切日
- 実施から3日後
- 2016.12.14 (水) リアルクティブ・ジャーナル締切日
- 実施から3日後
- 2017.2月~3月 隔日日から3日後
- 2017.3.17 (金) 課題レポート締切日



1. オリエンテーション -PFPF/NFP へようこそ

2016年度プログラム参加者の顔合わせです。自己紹介、大学教員という職に関する講義、比較の目を育てるワークショップ、事務手続き等を行います。これらの活動を通して参加者は、お互いのことを知り、これからの活動における準備を始めます。

- PFPF/NFPの目的に関する説明
- 大学教員の役割と大学教育に関する講義
- ランチ懇親会
- 比較の目を育てる：ワークショップ
- 今後の日程に関する説明
- リフレクションの理論と実践方法（e-ラーニング）

日時 2016年7月16日（土）10:00～17:30
場所 東北大学 川内北キャンパス
教育・学生総合支援センター4階 大会議室

2. 授業を見る聞く学ぶ

学内外の経験豊かな先生の授業を参観し、自分の教育活動を考えるヒントを得ます。授業後の検討会では、授業内の教育活動や授業前の準備などについて授業実践者に直接質問・ディスカッションします。最低3つの授業を参観しましょう。

前期の授業分と後期の授業分を2回に分けて参観希望調査をとりまわす。メールにて希望調査票を配布しますので、指定された締切内に提出してください。

他分野の授業の参観から得られる気づきも多くあります。積極的に参観しましょう。

日時 2016年7月～2017年1月
場所 別途通知



3. 授業デザインとシラバス設計

大学の授業における目標、活動、評価について、シラバス作成を通して考えます。参加者は、事前課題として自分が将来担当する全学教育の授業科目を想定したシラバス作成に取り組みます。

- 学生の学習を理解する
- 授業の全体を構想する
- シラバスの要素を理解する
- 教育活動をシラバスに表現する

事前課題 参加にあたって、現在使用しているシラバス、あるいは大学の共通教育（東北大学の場合は「全学教育」）において将来自分が担当する授業を想定して作成したシラバスをメールで提出すること。書式は問わないが、各自大学が指定する項目や書式を調べたうえで作成すること。 **締切：8月19日（金）、送付先：tu-pfp@ihe.tohoku.ac.jp**

講師 申本剛
（東北大学 高度教育・学生支援機構 准教授）
日時 2016年8月25日（木）13:00～17:00
場所 東北大学 川内北キャンパス
教育・学生総合支援センター4階 大会議室

4. 授業づくり：準備と運営

学習者が集中し、十分に理解できるように授業をつくるためには何に留意し、どのような準備をして、いかに授業を展開すると良いのでしょうか。一回の講義形式の授業を念頭において学びます。

- 理解の認知プロセス
- 知識の活性化
- メンタルモデルの構築
- 気持のコントロール

講師 島本俊亮
（東北大学 災害科学国際研究所 教授）
日時 2016年9月14日（水）13:00～15:00
場所 東北大学 川内北キャンパス
教育・学生総合支援センター4階 大会議室

5. 本当のかしこさとは何か—感情知性と大学教育

大学教育では専門知識を身につけるために、「理論的」であることが重視され、「感情」は排除されてきましたが、豊かな感情を育てることは柔軟な思考力を育てるうえで重要な課題であることが明らかになってきました。感情知性と大学教育について学びます。

講師 箱田裕司（京都女子大学 教授）
日時 2016年10月14日（金）15:00～17:00
場所 東北大学 川内北キャンパス
教育・学生総合支援センター4階 大会議室

6. マイクロティーチング

「授業デザインとシラバス作成」で作成したシラバスから授業1回分を選んで90分の授業計画を立て、そのうちの10分程度を実際に行います（これをマイクロティーチングといいます）。他の参加者からコメントをもち、自分の授業計画をふり返ります。事前課題として、マイクロティーチング・プランの作成に取り組みます。

- 授業計画、設定の共有
- 7分間の実践
- フィードバック、ディスカッション
- 授業映像を利用したセルフリフレクションの実施

日時 2016年11月のいずれか一日の午後
場所 東北大学 川内北キャンパス（別途通知）

※事前課題があります。マイクロティーチングガイドを参照のこと

8. 模擬授業

マイクロティーチングでの経験をもとに、30分程度の模擬授業を実施し、他の参加者や先達教員からコメントをもらいます。マイクロティーチング同様、授業の様子はビデオで撮影し、後日、自分の授業を見直す際に利用します。

- 授業計画、設定の共有
- 模擬授業の実践
- フィードバック、ディスカッション
- 授業映像を利用したセルフリフレクションの実施

日時 2017年2月上旬のいずれか一日、午後
場所 東北大学 川内北キャンパス（別途通知）
※事前課題があります。マイクロティーチングガイドを参照のこと

9. 先達コンサルテーション

プログラムへの参加を通して生まれた疑問や、自らの課題について、先達教員との個人面談を実施します。また、グループディスカッションを通して、参加者全員と共有したいトピックなどについて議論する時間もあります。

日時 2017年3月1～中旬のいずれか一日、午後
場所 東北大学 川内北キャンパス 川北合同研究棟
CAHE ラウンジ 他

10. 自己省察力を養う—リフレクティブ・ジャーナルの執筆

プログラムで経験したことを通じて、大学教員という仕事や大学教育に関する考え方がどのように発展していったのかをリフレクティブ・ジャーナルに記録し、自分なりの教育観を構築します。各セミナー、ワークショップ受講後に執筆します。

日程 プログラム実施期間中随時
※リフレクティブ・ジャーナル作成ガイドを参照のこと



11. 課題レポートの執筆

本プログラムでは、課題レポートの提出により、プログラムの成果報告を求めます。下記の欄目について、研修で取り上げた内容や作成したプレゼンテーション資料を適宜参照しながら4,000字程度でまとめ、メールで提出して下さい。

[PFPF]

- 「自分の授業や学生指導を質のよいものにするために、何が課題だと思いますか。また、教員個人の立場から、自大学の教育はとあるべきだと思いますか。」

[NFP]

- 「自分の授業や学生指導を質のよいものにするために、何が課題だと思いますか。また、教員個人の立場から、自大学の教育はとあるべきだと思いますか。」

提出締切 2017年3月19日(金) 17:00 (厳守)

提出先 大学教育支援センター
tu-pfpf@he.tohoku.ac.jp

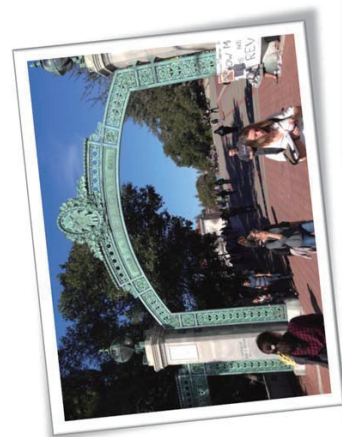
12. 成果報告会

先達教員やプログラムのOB/OGを招いて、2016年度Tohoku U. PFPF/NFPの成果報告を行います。特に、プログラムを通じて考えたことなどを共有し、大学教員職や教育に関する理解を更に深めることを目的としています。最後に、東北大学 高度教養教育・学生支援機構より修了証の授与を行います。

- プログラムでの経験に関する共有、ディスカッション
- 先達教員からのコメント

日時 2017年3月中～下旬のいずれか一日、午後

場所 東北大学 川内北キャンパス (別途通知)



ISTU の利用

ISTU (東北大学インターネットスクール)とは、東北大学の全正規授業に標準対応したeラーニングシステムです。東北大学に在籍する全ての学生、教職員が利用できます。ISTUでは、次のことが実施できます。

- 講義資料の閲覧、ダウンロード
- レポートの受け取り、採点、返却
- 担当教員からのお知らせの通知
- TAによる更新アシスタント

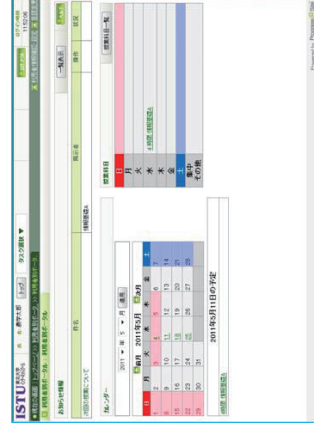
本プログラムでは、ISTUを活用して、各セミナーの動画配信や参考資料の配布等を実施します。これにより、セミナーの内容の復習が可能になるとともに、やむを得ず欠席したセミナーの自主学習が可能になります。

これまでも ISTU を利用したことがある方はもちろん、初めて利用するという方は、東北大学が提供している学習のための設備や仕組みについて知るためのよい機会になるでしょう。自分が教員として利用することも時には想定し、その使い勝手や機能についても考察してみるとよいかもしれません。

<ISTUにログインする>



ISTUのログイン画面



ISTUの利用者ポータル画面

利用者ポータル画面は全ての機能にアクセスできるページです。

画面右側上には、自身が担当する授業科目の一覧、右側下には受講授業科目の一覧が表示されています。NFP は右側下の受講授業科目の「集中・その他」に表示されます。科目名をクリックすると、各授業のページに遷移します。

※東北大学以外の方には別途IDを発行します

ISTUのURL: <https://xapp.istu.jp/>

ISTUのトップページからログインします。

ユーザIDは、

学生：学籍番号 (小文字)

教職員：東北大 ID

【オプション】国内他大学訪問調査

自身の置かれている環境や、その特徴を理解するためには、多様な具体例を知り、それと対比しながら理解を深めることが重要です。オプションとして設定している国内他大学訪問調査では、立命館大学等(予定)を訪問し、授業参観や、教員・学生とのディスカッションにより、多様な大学の在り方などについて理解を深めます。参加者は希望調査のうえ、選抜により決定します。

- 訪問先大学の歴史・運営・文化・課題
- 訪問先大学の授業参観
- eラーニング・LMS等の見学
- 訪問先大学のPFPF参加者からの討議・懇談

日時 2016年10月下旬(2泊3日)

【オプション】海外他大学訪問調査

カリフォルニア大学バークレー校にて、キャンパスや授業を参観し、学生の学びを促進するために大学がどのような教育環境を整えているのかをフィールドワークします。GSI 教育研究センターの講師陣と共にバークレーの教育制度やTA制度などについて議論を通して学びます。また、自身の研究分野に応じてバークレーの研究者訪問やフィールドワークを実施します。

- 教授学習、倫理に関するセミナー
- 授業参観
- フィールドワーク (自身の分野の研究者訪問、授業参観)
- プレゼンテーションによる成果発表

日時 2017年2月下旬～3月上旬

場所 カリフォルニア大学バークレー校

※12月～フィールドワークで訪問したい現地研究書へのアクセスを開始します。各自で訪問したい研究書名・所属・連絡先(座席番号3～4名分)リストアップしておいてください。アクセスは、まず運動スクウェアメールでフィールドワークを取った後、各参加者に引き継ぎます。詳細は、別途連絡します。

やむをえず参加できない場合には、事前にプログラム担当者(連絡先は本プログラム最終ページを参照)に連絡して下さい。代替日の設定や、自習用教材について指示します。

各セミナー、ワークショップの様子については、ISTU(東北大学インターネットスクール)を利用して動画配信します。復習や、欠席時の受講手段として各自活用して下さい。

先達教員による支援

参加者のみなさんが「大学教員の役割、仕事を理解し、自分なりの考え方を説明できる」ようになるために、大学教員の先輩である先達教員がみなさんの活動を支援します。先達教員は、それぞれ異なる専門を持ち、東北大学以外での勤務経験も持っています。プログラム実施期間を通して、みなさんは様々な先達教員と対話します。普段、関わることのない学問分野の先生方の話を聞くことができる貴重なチャンスです。

<支援内容>

- 授業参観への授業提供とディスカッション
- 模擬授業におけるフィードバック

<先達教員>

澤谷 邦男 先生



東北大学名誉教授、イノベーション戦略推進本部、レジリエント社会構築イノベーションセンター副センター長・特任教授、工学博士。専門は電磁波理論、アンテナ工学、電波伝播工学、無線通信工学。

平澤 典保 先生



薬学研究科 医療薬学専攻・教授。博士（薬学）。専門は、生物系薬学、アレキサンダー・生体習性病の増悪化機構の解析と治療薬の開発。薬剤師教育プログラムの開発に従事。

邑本 俊亮 先生



災害科学国際研究所・教授。博士（行動科学）。専門は、認知心理学、教育心理学。言語理解に関する研究、テキストからの学習に関する研究、災害時の認知・判断・行動と効果的な防災教育に関する研究に従事。

関内 隆 先生



高度教養教育・学生支援機構 高等教育開発室・教授。専門は、ギリシア近世史、社会経済史。ジェントルマン資本主義論研究、チェンバレン・キーンバーン研究、リベラル・ユニオニスト研究に従事。

Todd Enslin 先生



高度教養教育・学生支援機構 言語・文化教育開発室・講師。専門は、応用言語学（Curricular Innovation, English for Specific Purposes, Business English）。

佐藤 智子 先生



高度教養教育・学生支援機構、准教授。学習支援センター副センター長。博士（教育学）。専門は社会教育、教育行政学。生涯学習のための連携・協働に関する研究に従事。

修了要件

プログラムのすべてを修了した参加者には、高度教養教育・学生支援機構より、修了証を授与します。修了証は、下記の修了要件を満たすと評価された場合のみ、発行します。



- 全ての活動に参加すること（欠席の場合の対処法については、担当者の指示にしたがうこと）
- 全ての課題を提出すること（リフレクティブ・ジャーナルの記述、シラバスの提出、課題レポートの提出）

お願い

<写真・動画の撮影とその使用>

ウェブポスターなどの広報や報告書の作成において、プログラム期間中に撮影した写真や動画を利用します。参加者のみなさんに不利益が生じないよう細心の注意を払って使用します。

<提出物の共有と公開>

リフレクティブジャーナルやアンケートの結果は、運営側および先達教員らと共有させていただきます。加えて、課題レポートは報告書に収録するとともに、成果報告会において、全参加者と共有いたします。

<アンケート、インタビューへの協力>

Tohoku U. PFFP/NFP はみなさんの意見や提案を取り入れながら日本の大学におけるモデルとなるようなプログラムの開発に取り組んでいます。プログラム実施期間中、実施終了後に各種アンケートや聞き取り調査を行うとともに、プログラム終了後も交流会のご案内の配信や、各種セミナー運営へのご協力をお願いをすることがあります。プログラム開発に対するみなさんの積極的な貢献を期待しています。

<提出物・アンケート結果等の研究利用>

リフレクティブジャーナルやアンケート、インタビューの結果等をデータとして利用し、各種報告や研究論文として発表する場合があります。もちろん参加者の個人名が特定されるかたちでの発表はしません。参加者のみなさんに不利益が生じないよう細心の注意を払って使用します。

上記のそれぞれの事項について、ご理解、ご承諾、ご協力いただけますようお願いいたします。

PDPonline のご紹介

PDPonline では、東北大学 高度教養教育・学生支援機構が開催している PD プログラム（専門性開発プログラム）におけるセミナーの様子を動画配信しています。インターネット環境があればどこからでもアクセス可能です。ぜひ視聴してみてください。

URL: <http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/PDPonline/>

最後に

本プログラムの運営担当は次の通りです。プログラムに関する質問や、提案、ISTU の利用に関するお問い合わせなどは以下にご連絡ください。

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター

Tohoku U. PFFP/NFP 担当

川内北キヤンパス 川北合同研究棟 201 高度教養教育・学生支援機構 事務室

〒980-8576 仙台市青葉区川内 41

Email: tu-pfpp@ihe.tohoku.ac.jp

Tel: 022-795-4471

Fax: 022-795-4749

リフレクティブ・ジャーナルガイド (フル)

東北大学 新任教員プログラム 大学教員準備プログラム 2016

Tohoku University **New Faculty Program**

Tohoku University **Preparing Future Faculty Program**



東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター
教育関係共同利用拠点「知識基盤社会を担う専門教育指導力育成拠点」

教育観を構築するーリフレクティブジャーナルの作成ー

プログラム期間中に学んだこと、感じたことなどを記録していきましょう

リフレクティブジャーナルとは

Tohoku U. PFFP/NFPでは、プログラムを通して、大学教員という仕事や大学教員に関する自身の考え方がどのように発展していったのかを記録し、自分なりの教育観を構築します。プログラムの実施期間を通して、「**大学教員の役割**、**仕事を理解し**、**自分なりの考え方を説明できる**」ようになることを目的とし、このためのツールのひとつとして、リフレクティブジャーナル (Reflective Journal) の執筆に取り組みましょう。

リフレクティブジャーナルとは、自分の経験・体験・思考をふり返り、意図的に吟味した内容について記していく日誌を意味します。

最終レポート課題を念頭に置きつつ、本ガイド4ページの「執筆のヒント」を参考にして、国内セミナーや授業参観、マイクロティーチング、合宿セミナーへの参加を通して考えたこと、感じたことなどを記述していきましょう。最終レポート課題は以下の通りです。

＜最終レポート課題＞

PFFP: 「学生にとって、大学でのよい学習経験とはどのようなものだと考えますか。また、そういった学習経験を実現するために、大学や大学教員は何をするべきだと考えますか。」

NFP: 「自分の授業や学生指導を質のよいものにするために、何が課題だと思いますか。また、教員個人の立場から、東北大学の教育はどうあるべきだと思いますか。」

eラーニング教材

リフレクティブジャーナルの執筆に取り組む前に、その意義を解説した eラーニング課題に取り組みましょう。各自 ISTU にアクセスし、「[必修]リフレクシオンについて」にアップロードされている動画を視聴してください。所要時間は 35 分程度です。

この eラーニング課題は必修です。ISTU に学習状況が記録されます。視聴を終えていないと、本プログラムの修了判定時に修了が認められませんので、各自必ず取り組むようしてください。

ISTU へのアクセスの方法については、オリエンテーション時に配布したファイルの中に入っているプログラムを参照してください。

受講に支障がある場合、動画が視聴できない場合などには、スタッフまでご連絡ください。

先輩たちの声

プログラムのOB/OGからは、リフレクティブジャーナルに関して次のような声が寄せられています。

このプログラムに参加する前は、リフレクティブジャーナルというものを知らなかったため、何かのセミナーを受講するとまじり書きのメモだけが残り、だんだんに学んだことを忘れていくのが常だった。しかし、頭の中にもややと残る記憶をしっかりと文字化すると、意外にも頭がすっきりすることがわかったのと、あの時知ったことは何だったのだろう？というときにすぐに見返せるジャーナルがあると便利なのを知ったので、プログラムの最初のころから自分のリフレクションを大事にしようと思えた。

リフレクティブジャーナルは学習の有効性を高める上で大変効果的であると思います。自身の教育観の言語化という観点からは、「書くこと」は必須であると思いますので、有意義な取り組みでした。

日々見るものについて「これは教育としてはどうだろう」と考えるようになり、また、これが一番の変化かなと思います。学習者にどの程度判断を委ね、どの程度導くなど、日常から学ぶことはとても多いように思います。記述を伴わないリフレクションの機会が増え、自身の思考や感情に関して昔より自覚的になったと思います。

先達教員との面談

Tohoku U. PFFP/NFP では、教育経験の豊かな先達教員らとの交流を通して、あなたの教育観についてさらに考えを深める機会を提供します。先達との面談では、あなたのリフレクティブジャーナルへの記述内容に対するコメント、アドバイスのフィードバックが受けられます。先達からの助言、問いかけをもとに、さらに自分の考えを深めていきます。面談の日程については別途通知します。



リフレクティブジャーナルの提出スケジュール

リフレクティブジャーナルは、次に示す各セミナー、イベント後に書きましょ。提出期限は、それぞれ**3日後**（基本的に土日を除く）に設定しています。また、これ以外にも、リフレクティブジャーナルにつづりたいことがあった場合には、自由に作成してかまいません。

開催日	行事名	提出期限
① 2016.7.16 (土)	PFFP/NFP オリエンテーション	2016.7.21 (木)
② 2016.7月 ~2017.1月	授業参観「授業を見る聞く学ぶ」	参観から3日後
③ 2016.8.25 (木)	セミナー「授業デザインとシラバス作成」	2016.8.30 (火)
④ 2016.9.14 (水)	セミナー「授業づくり：準備と運営」	2016.9.20 (火)
⑤ 2016.10.14 (金)	セミナー「本当のかしことは何かー感情知性と大学教育ー」	2016.10.19 (水)
⑥ 2016.10月	オプシオン：国内他大学訪問調査 (事前セミナー含む)	実施から3日後
⑦ 2016.11月	マイクロラーニング	実施から3日後
⑧ 2016.12.9 (金)	コーチング技術を活用した院生指導	2016.12.14 (水)
⑨ 2017.2月	模擬授業	実施から3日後
⑩ 2017.2月~3月	オプシオン：海外他大学訪問調査 (事前セミナー含む)	実施から3日後
⑪ 2016.3月	先達教員によるコンサルテーション	実施から3日後

何らかの理由により、各種セミナーに出席できない参加者のために、セミナーを収録した動画コンテンツを ISTU（東北大学インターネットスクール）を利用してオンラインで配信します。やむを得ず出席できなかった場合には、動画を見てリフレクティブジャーナルを執筆して下さい。ISTU の利用方法については、別紙プログラムの「ISTU の利用」を参照してください。

動画は、セミナー開催のおおよそ 3 日後までに配信できるように準備します。この場合、リフレクティブジャーナルの提出期限は、動画の配信開始日から 3 日後とします。該当者には、動画配信の開始について個別にご案内します。

学会等で長期出張がある場合などは、提出期限について相談に応じます。大学教育支援センターまでお問い合わせください。

リフレクティブジャーナル執筆のルール

以下のルールに従い、Word などを利用して作成してください。

- ルール① **タイトル (ファイル名) には、日付と氏名を入れる**
- ルール② **本文のはじめに、表題 (任意) 、日付、氏名を入れる**

リフレクティブジャーナルには、テキストの他、適宜写真や参考資料を入れてもかまいません。自分の学びの様子、過程を後にふり返ることができるよう、工夫しましょう。

リフレクティブジャーナルの提出方法

リフレクティブジャーナルは、下記のアドレスまでメールに添付して送信してください。

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター

PFFP/NFP 担当 宛

Email: tu-pffp@ihe.tohoku.ac.jp

提出したジャーナルにコメントが欲しい場合は、その旨をメールに明記のうえ提出してください。

リフレクティブジャーナル執筆のヒント

自分自身の経験をふり返り、学びの軌跡を記すためのヒントです

なぜリフレクションを重視するのか

教員養成 (教師教育) の文脈では、リフレクションの重要性について次のような説明がなされています。

今後のキャリアにおいて直面するであろうすべての種類の状況に適応できるように養成することは不可能である (Harrington, Quin-Leering & Hodson 1996)

学び方を学び、適応し変化し続ける方法を学び、安定した知識などないことを知り、知識を求め続けることだけが安定性の基盤となりうることを知った人間だけが教養ある人間であるとする (Rogers 1969)

このように、変動する社会において我々は、自身の経験から学ぶ意思の強い姿勢を発達させることが必要であると考えられています。教員がこの姿勢を身につけ、リフレクションを通して自分たちの経験から学ぶスキルを獲得したなら、いわゆる「成長し続ける力」を持つことになるといえます (Kortheagen 2001)。

大学教員が対応すべき状況、学生はそれぞれ多様です。リフレクションを通して、新たな課題に直面した時にも、その経験から学び、その結果を以降の実践にも活かすことのできる姿勢を養うことで、プログラム期間終了後にも、学び続けることのできる教員としての下地作りになると考えています。

なぜリフレクティブ・ジャーナルを書くのか

Tohoku U. PFFP/NFP では、あなたがプログラムを通して自分なりの教育観を構築していくための手立てとして、リフレクション (Reflection) を重視しています。

リフレクションは、日本語では「内省」「省察」「ふり返り」などと翻訳されますが、分野によってさまざまな定義がなされています。

自分自身の考えや行動に関して、意図的に吟味するプロセス

(認知科学辞典 2002)

自分の行動や思考を再検討し、それらを生み出した知識を再構成する活動 (平嶋ら 2004)

さまざまな経験を繰り返す過程で、その活動の論理を引き出す思考
(教育心理学辞典 1996)

つまり、リフレクションとは、自身の経験をもとにした学びの方法論であるといえます。

自身の経験をふり返り、何かに気付いたり、後悔したり、新しい策を思いついたりすることは、何も特別なことではなく、我々が日常的に実践している行為のひとつであるといえます。しかし、それらは無意識のうちに行われていたり、後からその内容を思い出そうとしても困難な場合が少なくありません。そこで、リフレクションの様子を外化してさらに深めるために、他者との対話やビデオ視聴、マインド・マップを利用した方法などがこれまでに開発されてきました。Tohoku U. PFFP/NFP では、あなたのリフレクションの様子を外化するためのツールとして、リフレクティブジャーナルを用います。

リフレクティブジャーナルの利点は、自分の思考過程の外化だけではなく、人は、「記述する」という行為によって、また新たな気づきや思考の深まりが得られるといわれています。

プログラム期間中のそれぞれの時点における、あなたの素直な思いや、発見、思考したことを記述し、後で読みかえした時に、自身の考え方の変遷がたどれるようにしましょう。

リフレクティブジャーナル執筆における留意点

リフレクティブジャーナルには、Tohoku U. PFFP/NFP における経験を通して

- 感じたこと
- 考えたこと
- 思い出したこと
- 驚いたこと、意外だと思ったこと
- 現時点での課題や疑問
- 今後のための新しいアイデア

などについて、どうしても受け止めたのを交えて記述しましょう。後で自分で読みかえした時に、その状況や思考の対象がわかるようになっているとよいでしょう。

特に字数の制限や、本ガイドの 4 ページに記載したルール以外の書式などは設けません。

以降のページは「付録」です。

リフレクティブジャーナルの執筆に迷ったときには…

Tohoku U. PFFP/NFP では、ジャーナルの書き方について、厳密なあり方を提示することはしません。そもそも、その在りようは自由であり、人それぞれであってよいと考えているからです。もし、どのように書いたらよいかわからない、書いたけれど、これで本当によいかどうか不安だ、というときには、以降のページを参考にしてみてください。

＜リフレクションのプロセス＞

リフレクションにおける思考のプロセスは、多くの研究者によって多数のモデルが提唱されています。その一例として、Gibbs (1998) のリフレティブ・サイクルを下記に示します。

リフレクションのプロセスは、何か起こったのかの描写→それに對する感情→評価→分析→結論付け→今後の対処法の創出→…であることが説明されています。自身のリフレクションのプロセスを見直すヒントになるかもしれません。(もちろん、ジャーナル内のすべての記述がこのプロセスを網羅している必要はありません。)

＜レポートとリフレティブ・ライティングの違い＞

みなさんは、普段、客観性に配慮してアカデミックな文章を書いていると思います。しかし、本プログラムで取り組むリフレティブ・ジャーナルでは、必ずしもそれにとらわれる必要はありません。

下記にレポートとリフレティブ・ライティングの違いをまとめます。

	レポート (学部レベル)	リフレティブ・ライティング
課題・テーマが…	明確に設定されている	拡散的で、不明瞭でありうる
課題・テーマは…	私的なことではない	私的なことでありうる
課題・テーマは…	他者から与えられる	自分自身によって設定される
記述の目的は…	事前に設定される	方向性があがるのみ
思考内容は…	課題やテーマによって規定される	自分自身が関連のあると思うものなら何を含めてもよい。自身のセクスによる
結論は…	ひとつ示される	字んなこと、さらなるリフレクションが必要な領域が結論として示される
終わりは…	ある。通常単発ものであり、終わりがあって提出される	長い期間にわたるプロセスの一部として取り組まれる
体裁は…	通常、導入・議論・結論といった構造化がなされている	必ずしも明確な構造化は必要としない。ただし、冒頭に多少の説明と過程についての記述は必要とされる
記述形式は…	客観的なものである。通常一人称は使わないで書く	比較的主観的で、一人称を使って書く
取組む意義は…	通常、字んことをアピールするために書く	学ぶために書く
思考過程は…	きちんと整理された思考過程を表現する	思考や学びの経過そのものであるため、必ずしもきちんと順序立てて記述する必要はない

Moon (2004) を一部改編

＜リフレティブ・ジャーナルの記述例＞

ジャーナルは、つれづれなるままに書いてもよいですし、章立てて、きちんとレポートや論文の体裁で提出してもかまいません。また、ボトム調であってもよいでしょう。

ただし、下記のような記述は、後で見返しても役に立たないので避けましょう。

今日のセミナーに参加して〇〇の知識が得られたことは、とてもよかったです。まだまだわからないことがたくさんあるので、これからも頑張って勉強しようと思った。このような機会を設けて下さって、ありがとうございます。

上記は、セミナー後の素直な感想と思われる。ここから効果的にリフレクションを進めるためには、

- 「〇〇の知識」を知る前には、自分はどのように考えていたか？
- 「〇〇の知識を得られてよかった」と思ったのはなぜか？
- 「まだまだわからないこと」とは、例えばどんなことか？

といった自問自答を行い、その答えを書き綴っていくとよいでしょう。

下記は、セミナーでの経験の描写に始まり、自身の気づきに触れながら、これまでの経験や考え方と、新しく字んだことを結びつけながら記述が行われている例です。

インストラクショナル・デザイン (ID) は、教育効果をあげる授業設計の方法で、ターゲットである学生を分析し、授業の目的を決め、教材を選び、構成、評価方法を決め、授業を実践することを目的としているらしい。はじめに専らだ方法論で、非常にわかりやすく授業を考えるときに利用できると感じた。

これまでに授業を担当したことがないので、授業というとなにかと「自分に教えられることは何か」から考え始め、活動としてやると面白と思うことを中心に授業を構成するイメージをもっていった。また、教育という「情熱をもって教える」「学生の関心を引くように話す」というパフォーマンスの部分は私が気づいていたが、今回のワークショップを受けて、教育もって理論的に考えることが出来るのだとわかった。例えば、講義の目標をきめ、それに適した評価方法を選び、目標を達成するように教材を選び、15回の授業の配分を決める、というようなことを通じて、あらかじめ設計することができることがわかったのは新鮮な発見だった。

ファシリテーターの〇〇先生が話した内容が心に残った。「授業は生き物です。こちらが設計した通りにのってくれる時もありますが、乗ってこないこともある。そういう体験をすると落ち込みます。私はいまでもうまく行かない授業があると落ち込みます。でも、それは仕方ありません。そのときに、それは自分の設計が悪かったのか、それとも、別の要因があるのかをきちんと見極めることが大切です。それから落ち込んだ時は、同僚などに話を聞いて弱音をはいてもいいのです。重要なのは、誰もがいきなりすばらしい教育者になれるわけではなく、色々な教育経験をして字んているのだということを感じておく事です。」この言葉を聞いて、出来る範囲内で準備をしなければ、現場の動きについていく事もできないと理解できた。

不明な点がある場合は気軽にファシリテーターに連絡してください。

＜リフレクティブジャーナルを執筆のヒントになる質問一覧＞

どうしてもジャーナルに書くことが思い浮かばない場合、自分が書いたジャーナルがこれだけのかわからない、といった状況になった場合には、下記の質問一覧を参照し、それに答えるかたちで執筆してみてください。

ただし、下記の質問を列挙し、それに就いてその回答のみを執筆するという形はお勧めしません。あくまでも、**自身のリフレクティブを深めるための、自分への問いかけの例**としてご利用ください。

※下記の質問は、あくまでジャーナル執筆のきっかけです。すべてのジャーナルがこれらの質問への回答を含んでいるべきであるという意味で提示するものではありません。

■ オリエンテーション後のリフレクティブジャーナルのための質問

- ▶ オリエンテーションに臨む前の自分の気持ちはどうなりましたか？
- ▶ 上記の気持ちは、オリエンテーション後に変化しましたか？どのように変化しましたか？
- ▶ 参加者顔合わせでは、どのようなことを感じましたか？また、そう感じた理由は何だと思えますか？
- ▶ 他の参加者との交流で気づいたこと、感じたことは何ですか？それらは自分にとってどんな意味がありますか？
- ▶ 先達教員との交流で気づいたこと、感じたことは何ですか？それらは自分にとってどんな意味がありますか？
- ▶ 講義の内容で驚いたこと、気づいたこと、思い出したことは何ですか？またその理由は何かですか？
- ▶ ワークショップでの経験で驚いたこと、気づいたこと、思い出したことは何ですか？またその理由は何かですか？
- ▶ 今後のプログラムに対してどのような期待をしていますか？どのような姿勢で臨む必要があると思いますか？
- ▶ オリエンテーションを終えて、プログラムに対する印象や姿勢は変化しましたか？どのように変化しましたか？

■ 授業デザインとシラバス設計セミナー後のリフレクティブジャーナルのための質問

- ▶ 事前課題としてシラバス作成に取り組む、どのような気づきがありましたか？
- ▶ セミナーの内容で驚いたこと、気づいたこと、思い出したことは何ですか？またその理由は何かですか？
- ▶ 他の参加者との意見交換やディスカッションで気づいたこと、感じたことは何ですか？
- ▶ これまでのシラバスに対する理解に変化がありましたか？どのように変化しましたか？
- ▶ 今後、他者が作成したシラバスを見る機会があったら、どのような視点で見ようと思いますか？その理由は何かですか？
- ▶ シラバス作成における自身の課題は何だと思えますか？またその解決のためには何が必要だと思いますか？
- ▶ シラバス作成において自身が最も重視したこと、大切にしたいことは何ですか？その理由は何かですか？
- ▶ 同僚や後輩がシラバスについて質問してきたら、どんなことをアドバイスしたいと思いますか？その理由は何かですか？

■ 他大学訪問調査後のリフレクティブジャーナルのための質問

- ▶ 他大学訪問調査に臨む前の自分の気持ちはどのようなものでしたか？
- ▶ 他大学訪問調査に行く前と比較して自身に何か変化はありましたか？そのように感じた理由は何ですか？
- ▶ 驚いたこと、気づいたこと、思い出したことは何ですか？またその理由は何かですか？
- ▶ 他大学訪問調査を終えて、どのようなことを知っておくべきだったと思いますか？そのために何ができますか？
- ▶ 友人や家族に合宿セミナーについて感想を伝えるなら、どんなことを話しますか？どう伝えますか？
- ▶ 他の参加者との交流、意見交換やディスカッションで気づいたこと、感じたことは何ですか？
- ▶ これまでの大学教員の仕事、教育に対する理解に変化はありましたか？どのように変化しましたか？

■ 授業を見る聞く学ぶ後のリフレクティブジャーナルのための質問

- ▶ 授業を見て驚いたこと、気づいたこと、思い出したことは何ですか？またその理由は何かですか？
- ▶ 教員／学習者の様子や活動で、印象的なことはどんなことでしたか？なぜ印象的でしたか？
- ▶ 授業を見て、自身の授業にも取り入れたいと思ったことは何ですか？またその理由は何かですか？
- ▶ 授業後のディスカッションで印象に残ったことは何ですか？またその理由は何かですか？

- ▶ 今後の授業参観で留意したい点、着目したい点はありますか？そう思った理由は何ですか？

■ マイクロティーチング後のリフレクティブジャーナルのための質問

- ▶ 事前課題としてプランの作成に取り組む、どのような気づきがありましたか？
- ▶ マイクロティーチングに臨む前の自分の気持ちはどのようなものでしたか？そのように感じた理由は何ですか？
- ▶ マイクロティーチングをやってみて驚いたこと、気づいたこと、思い出したことは何ですか？その理由は何かですか？
- ▶ フォシリターからのフィードバックで印象に残ったことは何ですか？それに対してどのような対応ができますか？
- ▶ 他の参加者の実践を見て驚いたこと、気づいたこと、思い出したことは何ですか？またその理由は何かですか？
- ▶ ビデオで自身の授業の様子を見て、どのような気づきがありましたか？
- ▶ 次回模擬授業に取り組む際に、どのようなことに気を付けたいですか？そのためにどういった対策が可能ですか？
- ▶ 次回の模擬授業では、どのような点に留意、着目して他の参加者の実践を観察しようと思えますか？

■ 院生指導法セミナーのリフレクティブジャーナルのための質問

- ▶ これまでに院生の指導に関して考えていたこと、感じていたことにはどのような気づきがありましたか？
- ▶ セミナーを受講して驚いたこと、気づいたこと、思い出したことは何ですか？その理由は何かですか？
- ▶ 講師や参加者の発言や行動で印象に残ったことは何ですか？その理由は何かですか？
- ▶ 院生指導における自身の課題は何だと思えますか？またその解決のためには何が必要だと思いますか？
- ▶ 院生指導において自身が最も重視したこと、大切にしたいことは何ですか？その理由は何かですか？
- ▶ 同僚や後輩が院生指導について質問してきたら、どんなことをアドバイスしたいと思いますか？その理由は何かですか？

■ 模擬授業後のリフレクティブジャーナルのための質問

- ▶ 前回のマイクロティーチングの実践の時と比較して何か変化はありましたか？そのように感じた理由は何ですか？
- ▶ 模擬授業をやってみて驚いたこと、気づいたこと、思い出したことは何ですか？その理由は何かですか？
- ▶ フォシリターや先達教員からのフィードバックで印象に残ったことは何ですか？その理由は何かですか？
- ▶ 他の参加者の実践を見て驚いたこと、気づいたこと、思い出したことは何ですか？またその理由は何かですか？
- ▶ ビデオで自身の授業の様子を見て、どのような気づきがありましたか？
- ▶ 前回のマイクロティーチングの実践をビデオで見た時と今回とを比較して、変化はありましたか？
- ▶ 今後、実際に授業実践に取り組む際の自身の課題は何ですか？またその理由は何かですか？

■ 先達コンサルテーション後のリフレクティブジャーナルのための質問

- ▶ 先達コンサルテーションに臨む前の自分の気持ちはどのようなものでしたか？
- ▶ 驚いたこと、気づいたこと、思い出したことは何ですか？またその理由は何かですか？
- ▶ 先達教員からのフィードバックで印象に残ったことは何ですか？その理由は何かですか？
- ▶ これまでの大学教員の仕事、教育に対する理解に変化はありましたか？どのように変化しましたか？

プログラム、リフレグティブジャーナル、ISTU等の利用に関するお問い合わせは下記までお寄せください。また、先達教員への質問がある場合にも、まず大学教育支援センターまでご連絡ください。

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター

〒980-8576 仙台市青葉区川内 41

(川内北キャンパス)川北合同研究棟 201

高度教養教育・学生支援機構 事務室)

Email: tu-pffp@ihe.tohoku.ac.jp

TEL: 022-795-4471 FAX: 022-795-4749

プログラム参加の姿勢

シヨートコースは7~11月まで、フルコースは7月~3月のほぼ一年を通じてプログラムが組まれているので、参加者側としては年間計画としてプログラムを俯瞰し、**一年後自分がどうなっているか、という意識で取り組むことが必要**だと感じました。これは最初のオリエンテーションの時から重々説明があり、今野先生からのメールでもその都度、今後のスケジュールについて説明がありました。しかしながら、あくまで自分の体験としては7月から11月あたりまで、「年間プログラム」という意識が欠け、単発の講習に参加するような気分であるときがありました。もし過去の自分にアドバイスできるなら、「**一つの繋がったプログラムに参加している**」という自覚を持って」と言いたいです。



まさにその通りです。特に最初のうちは、1カ月に一度開催される単発のセミナーをちょこちょこ受講している気分になるかもしれませんが、教育観の醸成、という大きな目標に取り組むためには、一見バラバラに見えるがちなセミナーのそれぞれを関連させながら、ミクロとマクロの両方の視点を往たり来たりしながら経験をふり返ることが大切です。



先達教員との交流

先の方とお話する機会は多く満足しています。欲を言えば、**もう少し面談の機会を頂きたかった**です。



プログラムの序盤ではあまりお話ができずにもっといたいことだと思います。**もっと交流をもつて、研究室の身近な問題や、授業の話など些細なことでも相談すれば良かった**です。

先達の先生方は、オリエンテーションのランチ懇親会、授業を見る聞く学ぶ、のそれぞれで交流の機会があります。フルコース参加者の場合には、これに加えて模擬授業、先達コンサルテーション、成果報告会のそれぞれでディスカッションの機会があります。

先達教員の先生方は、プログラムの趣旨に賛同し、参加者のみなさんの学びを支援しようという志を持ってくださった方々です。最初はなかなか話しかけづらいかもしれませんが、**ぜひ序盤から積極的に交流してみてください**。

また、先達コンサルテーションの際には、**予め先達の先生方に聞いてみたいことを整理したうえで臨むと、より有益な時間が過ごせる**でしょう。



参加者との交流



【PFFP 参加者から】

もっと新任教員の方々（NFP 参加者）と交流して、お話しすればよかったです。例えば、困っていることや行っている工夫を聞けたら良かったなと思っています。



本プログラムでは、大学院生と新任教員がともに学びあう場を提供するために、台所で2つのプログラムを実施しています。

ぜひ積極的に交流し、学びあいの場として活用してください。





メンバー同士の交流は、海外他大学訪問調査に行くまでの間には少なかつたと思います。毎回セミナー後、あるいはジャーナルを書いた後 30 分ぐらいの**交流会でもあればいいかもしれない**と思いました。

(これは個人的なわかままだが)メンバー同士で飲みに行くことをはじめの方で軽く提案してもらえると、声をかけやすいのにな、と思った。自分からみんなに声をかけると図々しいのではないかと悩んでいた。



オリエンテーション後の OB/OG との交流会や、成果報告会後の懇親会などは、プログラム運営側で企画をしていますが、参加者の負担にも配慮し、毎回のセミナー後といった頻度では実施していません。

もちろん参加者のみなさんから、そうした機会を企画・実現したいという声があつた場合には、ぜひ実現してもらいたいと思います。

授業を見る聞く学ぶ



授業参観は思い切って**異分野の授業をいろいろ選択すれば良かった**と思います。自分の領域に近い科目、専門ではなくとも非常勤などで教えることがありそうな科目、異分野の科目を選択すると、自分の授業に活かせる技術や方法も学べたろうと思います。



まさにその通りです。自身の専門分野に近い科目はもちろんですが、**全くの異分野の授業の参観にも挑戦してみようことを強くおすすめします**。例年、異なる分野の授業参観は大変好評で、新鮮な発見や、これまで知らなかつた教授手法に触れることができたこの声が寄せられています。

今どきの学生の反応や、留学生の様子、そしてその交流の様子について観察するには、語学の授業の参観もおすすです。学生の発言や主体的な取り組みを促すために、授業者によるさまざまな工夫が凝らされており、教員と学生のインタラティブなやり取りを多く観察することができます。

ぜひ参観してみてください。



参観したい授業はたくさんあったのですが、すべてを希望するとうなるのかわからず、**とりあえず最低限の教し希望しなかつた点を後悔しました**。

「授業を見る聞く学ぶ」では、一人当たり 3 つ以上の授業を参観することを義務付けています。3 つ以上の授業を希望した場合、**必ず出席すべきメインの 3 つの授業を指定したうえで、その他にオプション（選択参観）として、都合に合わせて参観可能な授業を設定します**。

オプションの授業の参観は、自身の都合に合わせて選択できるため、授業参観がたくさんありすぎて困るようなことにはなりません。安心して、興味がある授業には積極的に参観希望を出してください。



授業見学については、事前に**見学授業の情報**について説明があればさらによかつたと思います。



「授業を見る聞く学ぶ」については、希望調査時にシラバスの概要一覧を配布しているとともに、**参観の前日までに授業に関する資料やシラバスをメールで参加者にお送りしていただきます**。これらに事前を目を通してから参観するとともに、当日は各自プリントアウトして持参すると、より授業内容や授業者の活動に着目した観察ができるでしょう。



ISTU を利用した復習



メモを取りながらセミナーに参加はしていますが、後から復習する際に、一体何が議論されていたのか明確には思い出せないときがありました。そんなときに、**ISTU を利用してセミナーの内容を復習しました**。これはとっても便利でした！これまでISTU が存在すること自体知らなかったことを大変ありがたいと思いました。



プログラム内の講義部分については、比較的欠席することが多かったため、ISTU には大変助けられました。ISTU だからといって、学習に困難があったということはない、配信される動画がきれいに編集されていることは学習の大きな助けとなりました。**途中で動画を止めて確認をしたり、考えたりすることができるとは、動画による学習の利点であると思います。**



セミナーの様子は、セミナー終了後概ね3日後以内にISTUにおいて動画配信するようになっています。やむを得ず欠席してしまった場合や、復習に活用できます。

配信は、プログラム終了の3月末まで行っています。

※ISTUの使い方は「ガイド」をご参照ください。

ISTUにおける動画配信の様子→

当日のパワーポイント資料と講師の映像から成るコンテンツとして提供しています。

セミナーの資料



セミナーやワークショップなどで用いられた講師陣のパワーポイントは、すべて事後にデータで欲しい！という方が多い！



すべてISTUからPDF形式でダウンロードできます。

一部資料は、著作権や講師の都合上、インターネット経由での配信が不可の場合もあります。それ以外の資料については、セミナー終了後3日以内にISTUに掲載しています。ぜひ活用してください。

リフレクティブジャーナル執筆のコツ



特に受け身になりがちなレクチャーの回は、後からジャーナルを読み返すことが多々ありました。ジャーナルの中で**将来につなげるような課題や疑問を一つ二つ書き残しておく**と、セミナーが終わったあとに自分が得たもの、あるいは考え方が変わったことを実感できるかもしれません。



「リフレクティブジャーナル作成ガイド」の付録にも解説がありますが、リフレクションでは、**自身が体験したことを綴るだけでなく、それをふり返りながら、最終的には「今後の対処法の創出」まで行き着くことが理想とされています**。ですが、毎回のセミナー後に必ず対処法や改善策が見いだせるとは限りません。その時には、「現時点での自身の課題や疑問を書き残していく」という方法が有効です。

何を書いたら良いのかわからない場合には、リフレクティブジャーナル作成ガイドを見直して、付録にある質問一覧などを参考にするとよいでしょう。



リフレクティブジャーナルは学習の有効性を高める上で**大変効果的**であると思います。ぜひ、全ての参加者のみなさんに**まじめに取り組んでもらいたい**と思います。自身の教育観の言語化という観点からは、「書くこと」は必須であると思っております。有意義な取り組みでした。



リフレクティブジャーナルを書くの**と書くのとは、大違い**だと気づきました。このプログラムに参加する前は、リフレクティブジャーナルというものを知らなかつたため、何かのセミナーを受講すると走り書きのメモだけが残り、だんだんに学んだことを忘れていくのが常でした。しかし、頭の中にもやもやと残る記憶をしっかりと文字化すると、意外にも**頭がすっきり**することがわかったのと、あの時知ったことは何だっただろう？というときに**すぐに見返せる**ジャーナルがあると便利なのを知ったので、プログラムの最初のころから**自分のリフレクションを大事にしよう**と思えました。



かなり早めの段階で、**リフレクションと科学論文執筆は非常に似たプロセス**であることに気がつきました。リフレクションの手法を身に付けることは教育者としても研究者としても**有益と捉える**ことができたので、**熱意を持って取り組む**ことができました。

リフレクティブジャーナルの執筆を通して自己省察力を養うことは、本プログラムが最も大事にしているプロセスのひとつです。研究や日々の生活の間をむっつり時間を作り、プログラムに参加しているみなさんによっては、時にはわずらわしく思う課題かもしれませんが、プログラムOB/OGからは「やっておいてよかった」という声が毎年寄せられています。
ぜひこの機会にリフレクションの習慣を身につけてもらえると嬉しいです。



プログラム以外のセミナー



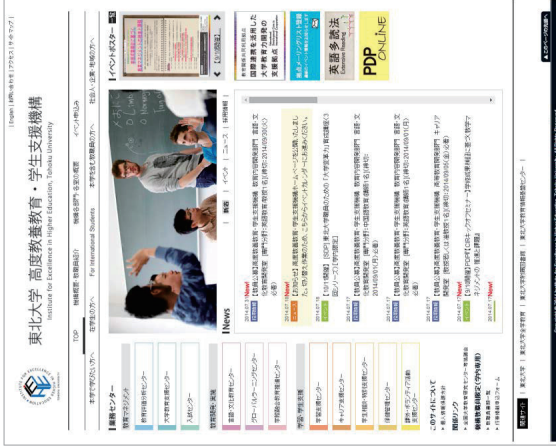
PFFP/NFP 参加期間中に開かれていた学内の他のセミナーについても、センターの活動や PFFP の内容に関連があるものは紹介があるのではないかと思いましたが、ありませんでした。



高度教養教育・学生支援機構では多くの PD (専門性開発) セミナーを開催しています。これらの中には、もちろん、みなさんに有益なものもたくさんあります。既に参加したことのある人には、毎回メールリストでご案内がしていることと思います。

これらセミナーの情報は、高度教養教育・学生支援機構のウェブサイトで配信しています。ぜひ定期的にアクセスしてみてください。

高度教養教育・学生支援機構ウェブサイト <http://www.ihe.tohoku.ac.jp/>



【フルコース】参加者向け

海外他大学訪問調査



日程表だけでは、現地バークレーでどのような活動が待っているのか想像することが難しくなっています。そのため現地に到着して、市内観光などに時間を費やし、**プログラムが始まってから自分たちのすべきことの多さに気付かされる**、ということになってしまいました。それ以降に睡眠時間が削られ疲労が溜まっていったのは、時差の所為だけではなかったと思います。

事前に複数回にわたり、説明の機会を設けてはいますが、**バークレー研修のプログラムはタイトだということをしっかりと頭に入れておいてください**。もちろん、若干の自由な時間はありますが、海外他大学訪問調査は「物見遊山」ではなく、教育について考え、比較の視点を養うための学びの機会です。心身ともに万全の準備をして臨みましょう。



フィールドワークでの研究者訪問と専門の先生の授業参観は領域が近いだけでも参考になります。海外他大学訪問調査に行くことが決まり次第、**早めにアポイントを取った方が良いと思います**。



海外他大学訪問調査では、事前に用意された研修内容だけではなく、自分自身で予定を組み、アポイントメントを取って臨むフィールドワークの時間があります。

過去の参加者は、自分の研究分野の研究者訪問や、ゼミ訪問、授業参観などに取り組んでいきます。**年明けにはアポイントメント取りを開始できるように、情報収集を早めに始めると良いでしょう**。訪問先のウェブサイトを活用したり、指導教員などに知人がいないかどうか聞いてみたりするのも手です。

アポイントメントの取り方については、プログラムを参照してください。



フィールドワークでの研究者訪問では、執筆された論文を数本読み、授業の課題図書を読むなど**準備をできるだけして臨みます**。専門の先生がいる場合には、**積極的に授業の参観を申し込んでみるのが良い**と思います。シラバスなども送っていただくと尚良いと思います。



海外他大学訪問調査での**フィールドワークを成功させるためには、事前の準備が鍵となります**。せっかくの機会を最大限に活かせるよう、できる限りの準備をしていきましょう。

また、インタビューや面談だけではなく、**その先生の授業参観をする、という活動が好評**です。研修内にも授業参観はありますが、必ずしも自分の研究分野に関する授業であるとは限りません。同じ研究分野の教員が、現地の大学でどういった授業を実践しているのかわかる絶好の機会です。ぜひチャレンジしてみてください。



フィールドワークを行う際に、**そこで見るものを相対化できるような情報をもっと欲しかった**かもしれません。それは東北大のことでいいし、日本の大学一般のことでいいし、アメリカの大学一般のことでいいです。本質的に訪問先の大学は何がすごくて、何が限界なのか（訪問先の大学の環境でしか実現できない理由も含めて）。そういった視点を持ってフィールドワークを行うためには、比較を行うために十分な情報が必要かなと思います。



海外他大学訪問調査の前に、米国の高等教育の専門家を招いてのセミナーをオンラインで学べる機会を提供しています。これに加えて、訪問先の大学のウェブサイトで情報収集するなど、**自身で「予習」することを推奨しています**。現地に行ってみてから初めて「こんなことを知っておく必要がある」と気づくことが多いのですが、できるだけ事前に想像力を働かせて情報収集しておきましょう。

また、プログラム内では、歴史の中の東北大学、東北大学ファクトブック（日・英）などを資料として配布しています。ぜひ目を通してご覧ください。



訪問先の先生の GSI (Graduate Student Instructor) と話す予定でしたが、**東北大学のメールアドレスにキャンパス外からアクセスする方法がわからなかった**ため、現地滞在時に、訪問先の先生からのメールに気がつくことができました。それで、GSI との面談はできませんでした。



毎年、メールアドレスに関するトラブルが起こっています。

①フリーのメールアドレスからのメールを先方に受信してもらえない

Yahoo や Google などのフリーのメールアドレスを使用している場合、パークレー側の研究者のメールソフト上で「迷惑メール」であると判断され、受信してもらえないケースが多発しています。この場合、スムーズにフィードバックのアポイントメントが取れません。フリーメールを使用している人は、ぜひこの機会に **<tohoku.ac.jp> のメールアドレスを使用**できるように設定をお願いいたします。ac.jp のドメインは、それだけで日本の高等教育機関が送信元であるという属性を示しているため、迷惑メールフィルターにはかからず、信頼性の高いメールアドレスであると判断されます。

② <tohoku.ac.jp> に学外からアクセスできない

学外からアクセスする方法を事前に設定することも可能です。これについては各自、東北大学の情報シナジー機構のウェブサイトを参照して設定をお願いいたします。また、**自分**がいつも使っているウェブメールで受信できるように設定をすることも可能です（例：Gmail で tohoku.ac.jp に届くメールをやりとりする）。これについては、使用しているウェブメールサービスで IPOP3 を利用して他のアカウントのメッセージを確認などの設定をお願いいたします。これでパークレーにおいてもメールの送受信で困ることはないでしょう。



私の英語力だと、会話を十分に理解できない場合が多かったので、甘えたことを言わせてもらおうと、「**英語を練習しておきなさい**」と事前にもっと発破をかけてほしいと思った（というが、自分であらがじめ気づいておくべきだった）。



海外他大学訪問調査の講師はすべてパークレーのスタッフです。もちろん、日本側運営スタッフも同行しますが、**現地での研修は全て英語**で行われます。

一日の終わりに、日本側運営スタッフとのふり返りのセッションを設けることも可能です。パークレー研修には十分準備して臨むとともに、現地で疑問が生じた時は、積極的にスタッフに質問するように心がけてください。

最後に

本プログラムの運営担当は次の通りです。プログラムに関する質問や、提案、ISTU の利用に関するお問い合わせなどは以下にご連絡ください。

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター

Tohoku U. PFFP/NFP 担当

川内北キャンパス 川北合同研究棟 201 高度教養教育・学生支援機構 事務室

〒980-8576 仙台市青葉区川内 41


Email: tu-pffp@ihe.tohoku.ac.jp

Tel: 022-795-4471

Fax: 022-795-4749

マイクロティーチングガイド

東北大学 新任教員プログラム2016 大学教員準備プログラム2016



Tohoku University **New Faculty Program**
Tohoku University **Preparing Future Faculty Program**



東北大学 高度教員教育・学生支援機構 大学教育支援センター
教育関係共同利用拠点「知識基盤社会を担う専門教育指導力育成拠点」

自分の授業をみつめる—マイクロティーチング—

教授活動の試行を通して、自身のティーチングスタイルをふり返りましょう

マイクロティーチングとは

PFFP/NFP では、授業実践のスキル獲得のために、参加者が一回の授業計画をたて、そのうちの一部を実践し、これに対して他の参加者や先達教員がコメントをフィードバックするマイクロティーチングの機会を設けています。(2016年11月15日(火曜日)開催)

マイクロティーチングは、参加者が自分のティーチングの長所を発見するとともに、さらなる練習、工夫の余地があるポイントについて認識する機会を提供するための活動です。

マイクロティーチングの目的

マイクロティーチングは、参加者の皆さんが自身のティーチングのスキルを向上させるための機会を提供し、支援するための活動です。次のことを目的としています。

- シラバス作成のセミナー等で学んだことを実践に適用してみる
- 他の参加者から建設的なフィードバックを得る
- 他の参加者の教え方から学び、自分自身の教え方の長所を知り、自信を持つ

マイクロティーチングで実施する教授活動の対象

マイクロティーチングを実施するために、「授業デザインとシラバス作成」のセミナー（2016年8月25日(木曜日)実施）で作成した授業（全15回）のうち、一回分の授業の計画を立案して下さい。

当日は、その一回の授業のうちの「任意の部分」を切り出し、7分間の実践を行います。

7分間の活動は、授業のある特定の部分とし、**活動の途中で時間が終了してかまいません。**

また、他の参加者は、授業者の設定、要求に応じて適宜受講生役を担います。

マイクロティーチングの流れ

マイクロティーチングは以下のような流れで行います。

1. マイクロティーチングの方法とピア・ラーニングに関する講義
2. 授業のふり返り方についてのセミナー
3. マイクロティーチング
 - 授業者による授業設定の概要説明（3分間）
 - ティーチング（7分間）
 - うまくいったところ、さらによりよくできる部分のふり返り
 - 他の参加者からのフィードバック、ピア・ラーニング

1. マイクロティーチングの方法とピア・ラーニングに関する講義

マイクロティーチングの実践に先駆けて、セミナーの冒頭では、マイクロティーチングの方法とピア・ラーニングについての説明を行います。

ピア・ラーニングとは、他の参加者：仲間（peer）と学びあうことを意味し、同じ立場の学習者同士の対話や質問のやりとりを通して、自分自身の気づきを得ていく学習方法のことを指します。

PFPP/NFP のマイクロティーチングでは、このピア・ラーニングによってお互いの実践や授業計画から相互に学びあう機会の提供を目指しています。

2. 授業のふり返り方についてのセミナー

マイクロティーチングの様子はビデオ撮影し、セミナーの最後に DVD に収録してお渡しします。参加者のみなさんには、後で各自視聴し、セルフ・リフレクションに取り組んでいただきます。

自身の映像を視聴することは、必ずしも心地の良いものではありません。この方法と効果について、セミナーの当日にお伝えします。

マイクロティーチングのリフレクティブ・ジャーナルには、セルフ・リフレクションの実践結果も含めた内容を執筆するようにして下さい。

3. マイクロティーチング

マイクロティーチングでは、まず、授業者が自身の設計した授業の概要を説明します。その後、7分間で実践を行います。実践後には、まず自分自身で、うまくいったところ、さらによりよくできるところについて感想を述べます。

最後に、他の参加者からのフィードバック、ピア・ラーニングを通して、自身の実践をより良くするためのヒントを探します。

※注※

マイクロティーチングで実施する7分間は、自由に選択して構いません。授業の開始から7分、重要な項目の導入部分の7分…など自分で決めましょう。

マイクロティーチングの準備

マイクロティーチングの実施に際して、次のことを準備して下さい。

- 授業を設計する
 - 「授業デザインとシラバス作成」のセミナー（2016年8月25日実施）で作成した授業（全15回）のうち、一回分の授業の計画を立案しましょう
 - 具体的な授業計画を作成する
 - 授業計画フォーマットを利用し、設計した授業の計画を示しましょう。フォーマットは、後ほど大学教育支援センターから送付します。
 - マイクロティーチング(7分)で実施する部分だけでなく、1コマ(90分)の授業計画を作成してください。
 - 授業計画には
 - ・授業名、対象となる受講生、授業の目的
 - ・設定した目的を達成するために利用する教え方や活動
例) 講義、問いかけ、ディスカッション
- を明記しましょう。マイクロティーチング当日に参加者全員に配布します

授業計画は**2016年11月7日（月曜日）**までに「tu-pfpp@ihe.tohoku.ac.jp」に提出して下さい

※内容に不足や検討すべき事項がある場合には、修正のうえ、再提出を求めます。

マイクロティーチングプランの作成

マイクロティーチングプランは、他の参加者やアシリテーターが授業者の意図を理解するために重要な情報源です。有効なフィードバックを得るためにも、しっかりと作成に取り組みましょう。

実践者所属・氏名		東北大学 大学教員準備プログラム/新任教員プログラム Tohoku U. PFP/NFP 2016	
マイクロティーチングプラン			
I. 対象授業について			
授業題目	教育心理学		
対象学生	(学部) 文系学部 (学年) 2 年生		
クラス規模	40 名		
授業の目的と概要	本授業では子どもの発達に関する基本的な知見を踏まえた上で、家庭や地域、学校における教育の諸問題について心理学的な視点から理解を深めていく。その際に、専門知識を身につけるだけでなく教育問題に対してどう向き合うべきかを考えられるようになることを目指す。		
学習の到達目標	① 心理学の専門知識に基づきながら様々な教育問題の背景を説明できる。 ② 教育問題について心理学的知見を踏まえながら考えを述べることができる。 ③ 関心のある教育問題について自ら調べようとする姿勢を持つことができる。		
II. 授業全体(90分)の狙いと展開について			
想定授業の全体像	本授業では初中等教育における学力の問題を取り上げる。具体的には、学力問題に関する現状と課題を様々なデータに基づきながら示すとともに、ゆとり教育・脱ゆとり教育が実施された背景についても解説する。その過程で、自らを受けてきた教育を振り返るとともに、どのような教育の在り方が望ましいのかを考えてもらう。		
実践箇所とそこでの目的	マイクロティーチングでは展開①の学力低下・学力格差に関する解説の箇所を実践する。この箇所では、教員が様々なデータを紹介しながら学力問題の現状と課題を解説するだけでなく、学生にも発問をしながら授業を展開する。学生の反応をうまく活用しながら学力問題の現状と課題を理解させることがこの箇所の目的である。		
指導案	時間	0-10 (導入)	10-35 (展開①)
指導案	時間	0-10 (導入)	10-35 (展開①)
指導案	実践内容・活動	実践の工夫/留意点	予測される学生の反応
0-	(90 分の授業内容・活動について記入。導入、展開、まとめめなど、授業の流れを記載する)	(実践するうえでの留意点やポイント、気を付ける点などを記入)	(予測される学生の行動や思考などを記入)
希望する評価の観点	(例) フィードバックが欲しい観点を記入 例: 板書の方法、説明の流れ、例示の適切さ		

マイクロティーチングプラン (例)

実践者所属・氏名		東北大学 大学教員準備プログラム/新任教員プログラム Tohoku U. PFP/NFP 2016	
I. 対象授業について			
授業題目	教育心理学		
対象学生	(学部) 文系学部 (学年) 2 年生		
クラス規模	40 名		
授業の目的と概要	本授業では子どもの発達に関する基本的な知見を踏まえた上で、家庭や地域、学校における教育の諸問題について心理学的な視点から理解を深めていく。その際に、専門知識を身につけるだけでなく教育問題に対してどう向き合うべきかを考えられるようになることを目指す。		
学習の到達目標	① 心理学の専門知識に基づきながら様々な教育問題の背景を説明できる。 ② 教育問題について心理学的知見を踏まえながら考えを述べることができる。 ③ 関心のある教育問題について自ら調べようとする姿勢を持つことができる。		

II. 授業全体(90分)の狙いと展開について

想定授業の全体像	本授業では初中等教育における学力の問題を取り上げる。具体的には、学力問題に関する現状と課題を様々なデータに基づきながら示すとともに、ゆとり教育・脱ゆとり教育が実施された背景についても解説する。その過程で、自らを受けてきた教育を振り返るとともに、どのような教育の在り方が望ましいのかを考えてもらう。		
実践箇所とそこでの目的	マイクロティーチングでは展開①の学力低下・学力格差に関する解説の箇所を実践する。この箇所では、教員が様々なデータを紹介しながら学力問題の現状と課題を解説するだけでなく、学生にも発問をしながら授業を展開する。学生の反応をうまく活用しながら学力問題の現状と課題を理解させることがこの箇所の目的である。		
指導案	時間	0-10 (導入)	10-35 (展開①)
指導案	時間	0-10 (導入)	10-35 (展開①)
指導案	実践内容・活動	実践の工夫/留意点	予測される学生の反応
	・ 前回の授業の簡単な振り返りと、前回の授業に関する学生の質問や感想を紹介。 ・ 前回の授業と今回の授業のつながりとして、今回の授業の流れについて伝える。	・ 授業で使用するパワーポイントの流れに沿ったプリントを配布する。プリントには適度に空白が設けられており、学生が自分でメモを取れるようになっている。	・ 低下しているのいずれか、学力低下に関する自分の予想と実際の一致不一致を認識。
	・ 学力低下問題について 発問①：現代の若者は以前よりも学力が低下していると思うか？ 解説：これまでの学力低下に関する議論の紹介。	・ 授業で使用するパワーポイントの流れに沿ったプリントを配布する。プリントには適度に空白が設けられており、学生が自分でメモを取れるようになっている。	・ 低下しているのいずれか、学力低下に関する自分の予想と実際の一致不一致を認識。

<p>希望する 評価の視点</p>	<p>説明と発問のバランス、説明のわかりやすさ</p>	<p>・学力と格差について 発問②：中学生のころ一日学校以外でどの程度勉強していたか？ 解説：学習時間の変化、格差の拡大についてデータを示しながら説明</p>	<p>・発問に対し手を挙げてもらい、その後で何名かの学生を指名し、手を挙げた理由を答えてもらう</p>	<p>・勉強時間～分。中学時代の自分の学習を相対化</p>
<p>35-75(展開②)</p>	<p>・ゆとり教育について 解説：ゆとり教育の目的と内実、それに対する批判について説明</p>	<p>・期間巡視をしながらうまくペアになっていない学生をペアにさせる</p>	<p>・調べ学習やキャリア教育等、何をしていたか印象にない等の反応。身についたものとしては調べ力、協調性、特になし等</p>	
<p>75-90(まとめ)</p>	<p>・脱ゆとり教育について 解説：PISAの結果や脱ゆとり教育、教育評価の難しさについて説明</p>	<p>・授業内レポート 学力問題やゆとり教育、脱ゆとり教育について学んだことを踏まえ、あるべき教育について自らの考えを授業内レポートに記述する。最後にミニットペーパーに質問・感想を書いて提出</p>	<p>・授業内レポートは成績評価に反映させる。 書き終わった学生にはミニットペーパーに感想や質問を書くよう指示する</p>	<p>・早く書き終わって退屈そうにする学生。</p>

I. 対象授業について

- 実施する授業の題目, 対象学生の学部と学年, クラス規模 (小規模: ~30 人, 中規模: 30~60 人, 大規模: 61 人~) を記入する
- シラバスに関するセミナーで学んだことを踏まえて, 授業の目的と概要, 学習の到達目標を記入する

II. マイクロティーチングで実践する部分について

- 想定している 90 分間の授業の全体像について記入する
 - 参加者やアシリターターに, どのような授業なのかわかるように説明する
- マイクロティーチングで実践する 7 分間の位置づけと目的を記入する
 - 90 分の授業のどの部分であるかを明確にする
例: 冒頭の 7 分間, 前回の授業の復習, 覚えているかの確認
例: 今日のテーマの導入部分, □□という質問により, 学習者に○〇について想起させる
- 指導案を記入する
 - 7 分間のティーチングの内容を明確にする
 - ◇ 授業者が行う活動を記入する
 - ◇ 実践上工夫や留意点, 何のために行うのかといった目的や意図を記入する
 - ◇ 予想される学生の反応, 状況, 理解の様子について記入する
- 希望する評価の視点を記入する
 - 参加者やアシリターターに特にフィードバックをもらいたいポイントを明確にする

模擬授業（2017年2月予定）の流れ

模擬授業では、マイクロティーチングワークショップで受けたフィードバックを反映し、授業計画をブラッシュアップしたうえで、30分程度の実践を行います。より長めの実践を行い、さらに実践的な力に身につけましょう。模擬授業には、先達教員も参加します。参加者の他に、先達教員からもフィードバックを受けることができます。

模擬授業の流れはマイクロティーチングの実践と同様です。

1. 授業者による授業設定の概要説明（3分間）
2. ティーチング（30分間程度）
3. うまくいったところ、さらによりよくできる部分のふり返し
4. 他の参加者、先達教員からのフィードバック

模擬授業の準備

マイクロティーチングと同様に、授業計画フォーマットを利用し、次のことを明記した授業計画を作成しましょう。

- 授業名、対象となる受講生、授業の目的
- 設定した目的を達成するために利用する教授学習活動
例) 講義、問いかけ、ディスカッション

授業計画の提出締め切りについては別途連絡します

ティーチングの実践以外の役割

マイクロティーチング、模擬授業において、他の参加者が実践を行っているときには、あなたは学生役の一人として参加し、授業者の設定に応じて、質問したり回答したりしましょう。

ティーチングの実践後には、参加者のティーチングがあなたの学習に役立ったかについて、具体的な内容を建設的にフィードバックしましょう。また、今後別な方法で実施できそうな点についても提案しましょう。

フィードバックを行う際には、授業計画の中で参加者が示している「授業の目的」を考慮するようにしましょう。

プログラム、マイクロティーチング、模擬授業の実施に関するお問い合わせは下記までお寄せください。

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター
〒980-8576 仙台市青葉区川内 41
(川内北キャンパス 川北合同研究棟 201
高度教養教育・学生支援機構 事務室)
Email: tu-pfpp@ihe.tohoku.ac.jp
TEL: 022-795-4471 FAX: 022-795-4749

大学教職員のための推薦図書リスト

これから大学教員を目指すみなさんや初期キャリアにいる教職員のみなさん、あるいは自分の日頃の仕事について見直そうとしている方々に向けて、大学教育について考えるうえで有用な書籍をご紹介します。

ここで紹介する書籍の多くは、東北大学図書館に蔵書があるとともに、東北大学 高度教養教育・学生支援機構の資料室にも収録されています。

推薦図書は、高度教養教育・学生支援機構（旧・高等教育開発推進センター）による出版物の他、「大学人としての教養」、「大学教員の仕事」、「学生理解」、「授業設計」、「学習論／心理学」、「研究室指導」、「高等教育」、「大学マネジメント」、「比較の視点」の9つのカテゴリに分けて紹介されています。また、それぞれがどのような内容なのかすぐに把握できるよう、専門性開発プログラム運営スタッフや先輩教員からの推薦文も掲載しました。

もちろんですが、ここに紹介している書籍を全て読む、ということを選択してはなりません。「もっと知りたい」、「体系的にまとめられている本を読みたい」と、ふと思った時に、本選びの参考にしてもらえればと思います。

継続的に自身の専門性を開発していくみなさんの、お役に立てば幸いです。

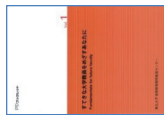


東北大学 大学教育支援センターによる 大学教職員のための推薦図書



東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター
教育関係共同利用拠点「知識基盤社会を担う専門教育指導力育成拠点」

PD ブックレット



「PDブックレット Vol.1 すすきな大学教員を目指すあなたに」(2011)

東北大学 高等教育開発推進センター編

大学院生と若手キャリアの教員向けに、大学教員の専門性をわかりやすく解説した一冊。ひとつひとつのブックも短く、気軽に読み進められます。教育、研究、大学運営だけではなく、「休暇を取る」と題して、実際の大学教員が自身の余暇の過ごし方を綴っているポイントのひとつです。



「PDブックレット Vol.2 大学の授業を運営するために」(2012)

邑本俊亮 著, 東北大学 高等教育開発推進センター編

PPFP/NFP の先達教員でもある邑本俊亮先生による一冊。邑本先生は認知心理学を専門とし、優れた授業実践ならびに授業改善・工夫に尽力され、東北大学総長教育賞と全学教育貢献賞を受賞されました。心理学の知見をもとに、邑本先生自身の授業運営の工夫やアイデアが紹介されています。



「PDブックレット Vol.3 学生のための心理・教育的支援」(2012)

田中真里, 池田忠義, 堀匠, 佐藤静香 著, 東北大学 高等教育開発推進センター編
学生相談と発達障害学生の支援を取り上げ、その理解を助ける豊富な情報と事例を紹介しています。対応のポイントが簡潔にまとめられているだけでなく、社会全体としてこの問題にどう取り組んでいるのか、海外の大学ではどのように対応しているのかといった動向も学ぶことができます。
ダウンロード版: 高度教養教育・学生支援機構ウェブサイト> 機構概要・教員紹介> 刊行物一覧・所蔵リスト> PDブックレット



「PDブックレット Vol.4 ER@TU — 多読のすすめ」(2012)

Daniel Eichhorst & Shearon Ben 著, 東北大学 高等教育開発推進センター編

本書では、東北大学の英語教員らが取り組んでいる「多読法(言語力向上を目的として外国語で書かれた理解可能な大量のテキストを意識的に読むこと)」が解説されています。東北大学における多読プログラムの特徴や、設計の原理、運営方法などについて学ぶことができます。



「PDブックレット Vol.5 高等教育における教育・学習のリーダースHIP」(2014)

Craig McInnis, Paul Ramsden & Don Maconachie 著, 杉本和弘 訳

東北大学 高等教育開発推進センター編

オーストラリアで刊行されたハンドブックの訳書。大学教育の改革や改善に携わる「リーダースHIP」を対象とし、大学組織をどう導いて変革を起こしていくのか、組織開発において、どういったリーダースHIPを発揮すればよいかを解説した指南書です。



「PDブックレット Vol.6 大学教員のブレーク・スルー」(2015)

東北大学 高度教養教育・学生支援機構編

大学教員としての人生において困難にぶつかった際、それをどう打破し前進してきたのかーベテランの先生方に、次世代を担う若手教員への励ましの意味も含めて自身の「ブレーク・スルー」について執筆していただきました。諸先輩方の経験談から学びを深めるための一冊です。



「PDブックレット Vol.7 PDR ハンドブック」(2016)

Daniel Eichhorst, Todd Ennslen, Shearon Ben 著

東北大学 高度教養教育・学生支援機構編

東北大学の英語教員が、長年の経験と試行錯誤を重ねて開発に取り組んできた、学習者主体のデザイン・カッションによる英語の授業手法を紹介するハンドブックです。実施手法や実際に使用している教材を惜しみなく収録しています。英語の授業を担当している教員にはもちろんですが、その他の科目の授業に対しても多くの示唆が得られます。

大学人としての教養



「科学の健全な発展のために - 誠実な科学者の心得 -」(2015)

日本学術振興会「科学の健全な発展のために」編集委員会 編, 丸善出版

研究倫理を守るために、各界の専門家が集まって日本で初めて出版された研究倫理の標準的テキストです。日本学術振興会のHPからもテキスト版と英語版もダウンロードできます。
(<https://www.jsps.go.jp/j-kousei/rinri.html>)。

ISBN: 978-4621089149, 図書館: 本館 2F 学関



「ORI 研究倫理入門 責任ある研究者になるために」(2005)

ニコラス H. ステネック, 山崎茂明訳, 丸善出版

アメリカ研究公正局がまとめた研究倫理に関する標準的テキストです。研究倫理は国を超えて共通なものであり、具体例が豊富で参考になります。大学の研究倫理推進担当者にとって必読文献といつてよいでしょう。

ISBN: 978-4621075241, 図書館: 法政実務図書室, 工学分館 2F 図書

大学教員の仕事



「もっと知りたい! 大学教員の仕事」(2015)

羽田真史 編著, カノンシャ出版

東北大学高度教育・学生支援機構が教育関係共同利用拠点として、5年間に及ぶ取り組みの成果を盛り込んだ集団的力作です。いわゆるFD関係者だけの執筆になるのではなく、認知心理学、情報科学、経営学、哲学、生物学など各分野の教員が自分の経験も踏まえて書き上げた大学教員のワタシが詰まっています。かならずあなたの琴線に触れるでしょう。

ISBN: 978-4779510045, 図書館: 一, 機構資料室に蔵書有



「大学教員準備講座」(2010)

夏目達也, 近田政博, 中井俊樹, 齋藤芳子 著, 玉川大学出版部

名古屋大学の大学教員準備プログラムに基づいた内容構成。これから大学教員をめざす大学院生、任期付研究員、非常勤講師に向けて、大学教員の職業的特徴や、求められる知識、技能が体系的にまとめられています。

ISBN: 978-4472404009, 図書館: 本館 2F 学関



「職業としての大学教授」(2009)

潮木守一 著, 中央公論新社

大学教員とはロマンチックな仕事とお考えではないでしょうか。柳澤教授のような優雅な生活はないのです。リアルな大学教授の生活を知りたい方におすすです。

ISBN: 978-4120040672, 図書館: 本館 2F 学関



「ベストプロフェッサー」(2008)

ケン・ペイン 著, 玉川大学出版部

アメリカの高等教育関係図書ベストセラーのひとつで、著者は歴史学の教授です。紹介されている63人の「ベストプロフェッサー」には、あのマイケル・サンデル教授も含まれています。大学教員の教育観をどのように言葉にしているか、という視点で読み進めると、自分自身の教育観を明らかにしていく作業に役立ってでしょう。

ISBN: 978-4472403620, 図書館: 工学分館 2F 図書



「成長するティップス先生」(2001)

池田輝政, 戸田山和久, 近田政博, 中井俊樹 著, 玉川大学出版部

名古屋大学がウェブ上で公開していた授業の秘録集をまとめた書籍。ティップス先生の授業日誌編には、若手大学教員なら共感するようなエピソードがたっぷりあり、その状況や悩みに対応したティップス集が収録されています。『私の教師が大学を成仏させる』という面白い面白コラムも数多く掲載されています。

ISBN: 978-4472302572, 図書館: 本館 書庫



「大学教授職の使命—スカーシップ再考」(1996)

アーネスト・ボイヤー 著, 玉川大学出版部

夢もロマンもない職業などありません。知を生産する大学教員としてわけがわからなくとも読んで、学生たちとうんちを傾けるには絶好の一冊です。

ISBN: 978-4472098116, 図書館: 本館 書庫

学生理解



「知的好奇心」(1973)

波多野龍余夫, 稲垣佳世子 著, 中央公論新社

人に限らず、動物が持つ好奇心が学習の原動力になるという、今でも基本となる知見をまとめて提示し、毎日出版文化賞を受賞した名著です(同じ著者による『無気力の心理学』もお薦めします。紹介者はこの本で『獲得された無力感』という言葉を知りました。現代社会の理解には、両方とも必要?)

ISBN: 978-4121003188, 図書館: 本館 書庫



「人はいかに学ぶか」(1989)

稲垣佳世子, 波多野龍余夫 著, 中央公論新社

『知的好奇心』の著者たちによるもので、自分の学習観の見直しをするのに最適な1冊です。

ISBN: 978-4121009074, 図書館: 本館 書庫



「ポスト青年期と親子戦略 大人になる意味と形の変容」(2004)

宮本みち子 著, 勁草書房

従来の大人像の変容と、ポスト青年期(青年期から成人期への移行期)という概念を広げた名著。ポスト青年期に関する先行研究を踏まえつつ、日本と欧米諸国における状況を整理していきます。

ISBN: 978-4326601684, 図書館: 本館 書庫



「大学生の学びとキャリア 入学前から卒業後までの継続調査の分析」(2013)

梅崎修, 田澤実 編著, 法政大学出版局

静態的分析に止まらぬ I-E-O モデル (Input-Environment-Outcome モデル) を超え、学生を成長の観点からとらえる研究書。10 回にわたる学生調査の結果をもとにキャリア教育の効果や、キャリア発達の促進、キャリア意識の変容について分析しています。

ISBN: 978-4588686061, 図書館: 本館 2F 学関

授業設計



「シリーズ大学2 大衆化する大学—学生の多様化をどうみるか」(2013)

広田照幸他 編著, 岩波書店

大学の大量化, 学生の多様化について, 高等教育の歴史や国際比較の視点を交えながら, 現代的特質を明らかにすることを目的とした一冊です。

ISBN: 978-4000286121, 図書館: 本館 2F 学閲



「大学教育の変貌を考える」(2014)

三宅義和, 居神浩他 著, ミネルヴァ書房

いかにゆるいノンエンリート大学, マージナル大学を対象にした学生論。大学を取り巻く状況の変化, 変貌を大衆化, 国際化, 多様化をキーワードに解説します。

ISBN: 978-4623070138, 図書館: 本館書庫



「思いやりはどこから来るの? 利他性の心理と行動」(2014)

日本心理学会 監修, 高木修, 竹村和久 編, 誠信書房

社会性や思いやりを心理学の立場から分析する, 目からうろこの一書。日本心理学会の監修のもと, 最新の知見がまとめられています。

ISBN: 978-4414311112, 図書館: 本館 2F 学閲



「本当のかしこさとは何か—感情知性 (EI) を育む心理学」(2015)

日本心理学会 監修, 箱田裕司, 遠藤利彦 編, 誠信書房

このタイトル, 見てドキリしませんか。少なくとも年に1度2度はため息つく思いをたははずです。キ・コンビテンシーとか汎用的能力とかいうマジックワードが飛び交っていますが, 学生を育てて自分自身も育つ大学教授には, 常に念頭に置かねばならない問いです。主に初等中等教育が対象の本書ですが, 大学教育に携わるみなさんにとっても, 答えが見つかるはずです。

ISBN: 978-4414311143, 図書館: 一, 機構資料室に蔵書有



「大学教員のための授業方法とデザイン」(2010)

佐藤 浩章 編, 玉川大学出版部

愛媛大学の教員研修の教科書をもとにした一冊。シラバスの書き方から実際の授業方法, 成績のつけ方, 授業の振り返りまでを網羅し, わかりやすく解説されています。資料編には, 教材として使用できる事例やワークシートが豊富です。

ISBN: 978-4472404184, 図書館: 一, 機構資料室に蔵書有



「授業をどうするか—カリアオルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集」(1995)

B. G. デイビス他 著, 東海大学出版会

カリアオルニア大学バークレー校の優秀教員から集めた授業のためのアイデア事例集。自分の興味に合わせて気軽に読める一冊です。

ISBN: 978-4472404009, 図書館: 本館 2F 学閲



「授業の道具箱」(2002)

B. G. デイビス他 著, 玉川大学出版部

「授業をどうするか!」の回答書にあたり, リアレンス・ブックとして利用できるように作られた実用的な資料集。カリアオルニア大学バークレー校の教員らが, ティーチングに関する49の技法を順に解説していきます。中には, 学生のために推薦書を書くときの留意点なども詳しく示されており実用的です。

ISBN: 978-4486015321, 図書館: 本館書庫



「科学をどう教えるか—アメリカにおける新しい物理教育の実践」(2012)

日本物理教育学会 監修, 丸善出版

物理教育研究者が物理を教える教師向けに書いた一冊。認知科学や脳神経科学の最新の研究成果を取り入れつつ, よりよい学習のための手法や教材を科学的に解説しています。物理分野のみならず, 理工系はもろろん, 文系の教員にもおすすすめします。

ISBN: 978-4621085509, 図書館: 本館 2F 学閲



「大学教員のためのルーブリック評価入門」(2014)

ダネル・スティーブンス他 著, 玉川大学出版部

ルーブリックとは, 「ある課題について, できるようになってもらいたい特定の事柄を配置するための道具(本書 p.2)」です。ルーブリックを自身の教育活動に取り入れられようとしている人, 体系立ててルーブリックについて学びたい人のための入門書としておすすすめの一冊です。

ISBN: 978-4472404771, 図書館: 一, 機構資料室に蔵書有

研究室指導

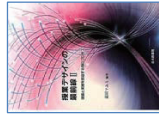


「教材設計マニュアル—独学を支援するために」(2002)

鈴木克明 著, 北大路書房

「独学を支援する」という目的に使うプリント教材の作成を例に, 教材づくりに初めてチャレンジする人を想定してまとめられた一冊。教育工学の中核であるインストラクショナルデザインという理論がベースです。

ISBN: 978-4762822445, 図書館: 本館 2F 学閲



「授業デザインの最前線 II 理論と実践を創造する知のプロセス」(2010)

高垣ユミ 編著, 北大路書房

主として教育心理学の視点から, 授業研究に関する最新の理論や研究成果を幅広く網羅しています。中にはカウンセリングの諸理論をどのように授業に活かせるか, といった興味深いテーマも扱っています。巻末の資料には, 中学生向け授業の指導案が収録されています。

ISBN: 978-4762827082, 図書館: 本館 2F 学閲



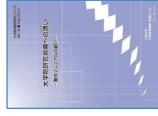
「研究指導を成功させる方法—学位論文の作成をどう支援するか—」(2008)

リチャード・ジエームス, ガブリエル・ポールドウィン 著

メルボルン大学によるガイドブックの日本語訳。基礎編では学生との関係作り, 応用編では学生へのフィードバックや動機づけの支援方法, そして仕上げ編では学生のキャリアについて考える, といった実務的なヒントが簡潔に解説されています。

ISBN: 978-4-862930125, 図書館: 一, 機構資料室に蔵書有

原文 (Eleven Practices of effective postgraduate supervisors) がダウンロードできます
http://www.cshe.unimelb.edu.au/resources_teach/teaching_in_practice/docs/11practices.pdf



立教大学 大学院研究指導への誘い」(2013)

立教大学 大学院研究指導・支援センター

日本では, 大学院の研究指導のためのテキストはまだ多くありませんが, 海外では多くが発表されています。本書では, それら海外の研究指導マニュアルのエッセンスを抽出して紹介しています。

オンデマンド版を下記サイトで配布

http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/_asset/pdf/No.18.pdf

学習論／心理学



「アメリカの心理学者 心理学教育を語る—授業実践と教科書執筆のためのTIPS」(2000)

R. J. スタンバーグ 著, 北大路書房

心理学者による心理学入門の授業実践の書ですが, 心理学教育に限らず, あらゆる領域の授業においても通じる有益なヒントが満載。アメリカの心理学者 11 人が, それぞれ自身の教育観を熱く語っています。一流研究者の「教育に対する情熱」に, 心を揺り動かされる一冊です。

ISBN: 978-4762821882, 図書館: 本館 2F 学閲



「間違えだらけの学習論 なぜ勉強が身につかないか」(1994)

西林克彦 著, 北大路書房

理解や学習における知識の重要性を論じています。多くの具体例とともに, 研究を基にしたデータを提示しつつ, 新たな学習論が展開されており, 非常に読みやすく, わかりやすい一冊です。

ISBN: 978-4788504882, 図書館: 本館 2F 学閲



「研究室マネジメント入門—資金・安全・知財・倫理」(2009)

日本化学会 編著, 丸善

理系の研究室を運営する人たちが知っておくべき事項をよみやすくまとめた一冊。資金や人のマネジメント, 安全管理, 倫理や不正行為への対応などについて, 実例とともに図や資料を交えながらわかりやすく解説しています。

ISBN: 978-4621081051, 図書館: 本館 2F 学閲

高等教育



「大学と社会」(2008)

安原義仁、大塚豊、羽田貴史 著、放送大学教育振興会
放送大学の専門科目の教科書。「大学の誕生と発展」から、グローバル化、多様化、今後の高等教育政策に至るまで、幅広くカバーし、歴史的経緯や国際的視野を学ぶのに最適な一冊。大学教育支援センター一長の羽田貴史教授が一部を執筆しています。

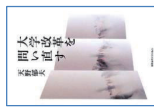
ISBN: 978-4595308024, 図書館：本館 3F 学開放送大学



「大学改革その先を読む」(2007)

寺崎昌男 著、東信堂
大学教育の研究の第一人者である寺崎昌男先生による「大学問題連続セミナー」の講演録。大学改革史を踏まえつつ、現在の大学が抱える課題を取り上げます。さまざまなエピソードを交えつつ、口語で非常に読みやすく書かれています。初めて大学史を学ぶ方は、この本から始めてみてはいかがでしょうか。

ISBN: 978-4887137882, 図書館：一, 出版社在庫なし, 機構資料室に蔵書有



「大学改革を問い直す」(2013)

天野郁夫 著、慶應義塾大学出版会
戦後の日本の教育行政を歴史的見地から俯瞰し、「全入」問題や高大接続、秋入学などの具体的な課題についての提言を示した一冊。法律や答申の内容を踏まえつつ、学問的に高等教育改革を捉えたい人におすすです。

ISBN: 978-4766420531, 図書館：本館 2F 学開



「シリーズ大学5 教育する大学—何が求められているのか」(2013)

広田照幸他 編著、岩波書店
大学教育の改革について、教育、職業準備教育、専門的職業、民主主義のそれぞれと大学、という視点で議論が展開されています。法科大学院や工学系技術者と大学に関する章もあり、その設立の経緯や今後のあり方についても示されています。

ISBN: 978-4000286152, 図書館：本館 2F 学開



「シリーズ大学6 組織としての大学—役割や機能をどうみるか」(2013)

広田照幸 他 編著、岩波書店
大学とは、いったいどのような組織なのか、という問いに込めてくれる一冊。組織のガバナンスに関する原理的な考察に加え、大学の成員としての職員と学生に光をあて、大学組織の新しいあり方が議論されています。我々が身を置く「大学」とは一体何なのか、ちよと立ち止まって考えてみてください。

ISBN: 978-4000286169, 図書館：本館 2F 学開

大学マネジメントカ



「大学マネジメント改革 改革の現場—ミドルのリーダーシップ」(2014)

篠田道夫、教育学術新聞編集部 著、ぎょうせい
著者は私立大学の理事を長く務め、長い実務経験をもとに私立高等教育研究所での調査研究をもとにまとめたもので、本書は現場経験に裏打ちされた厚みがあります。高等教育研究にあらがちな質問紙調査と統計分析によるお話ばかりでなく、リアリティ感覚を高めるためにもお読みください。

ISBN: 978-4324097991, 図書館：本館 2F 学開



「なぜ人と組織は変わらないのか」(2013)

ロバート・ケガン、リサ・ラスコフ・レイヒ 著、池村千秋訳、英治出版
著者たちはハーバード大学教育大学院で成人発達や変革リーダーシップを研究しています。改革改革と勇ましい掛け声が飛び交いながら実際に変われないのは、権限や資源の問題もさることながら、人間の知性の様式に根源があることが掘り下げられています。組織運営がうまくいかない時に、悲憤慷慨するのではなく、一度手に取ってみませんか。

ISBN: 978-4862761545, 図書館：本館 2F 学開



「市民社会組織のためのロバート・議事規則入門 民主主義の文法 新装版」(2014)

ノリス・P・ジーマン 著、立木茂雄 監訳、朝書房
会議の運営はうまくいかないものでね。無理ありません。ルールとスキルが教えられてこなかったのだから。本書は、アメリカにおける会議運営のバイブル、ロバート議事規則の簡易版です。議長役の役割や効果的な議事進行など民主的でスムーズな議事運営のために、委員会、教授会、学会などの場面でも使えます。

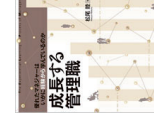
ISBN: 978-4860650858, 図書館：一, 機構資料室に蔵書有



「リーダーシップ入門」(2005)

金井壽宏 著、日本経済新聞出版社
「リーダーシップ」はだれにも関わりのある問題だ。というまえがきで始まる本書は、現場でリーダーシップを發揮してきた実践家の持論と、リーダーシップ研究に由来する理論とを接合しながら、読む人それぞれリーダーシップの実践へと誘います。あなたらしいリーダー像を探るためのガイドブックとしても役立つはず。

ISBN: 978-4532110536, 図書館：本館 1F 学開新書日経文庫



「成長する管理職」(2013)

松尾睦 著、東洋経済
経験学習研究の第一人者の手になる一冊。組織のマネジャーになるのどんなに「経験」に学べばいいのか。良質な「経験」を通してどんな能力を向上させるのか。豊富な知見をもとに、その成長メカニズムをわかりやすく説いてくれます。

ISBN: 978-4492533284, 図書館：蔵書有, ただし研究室に配架, 機構資料室に蔵書有

比較の視点

「リフレクティブ・マネジャー」(2009)

中原淳, 金井壽宏 著, 光文社新書

働く大人は、仕事上の経験を振り返り、他者との対話や議論を通して、将来を展望しながら成長していく。本書では、そんな大人の「学びと成長」のあり方が語られます。企業における大人の学びが中心テーマですが、学び成長しようとする大学教職員が読んでも多くの示唆が得られます。

ISBN: 978-4334035280, 図書館: 本館 2F 学関



「大学の教務 Q&A」(2012)

中井俊樹, 上西浩司 編著, 玉川大学出版部

自分の授業が一人前に行えるようになってくると、教員の教育力はそれだけではありません。単位の取り方や休学、卒業に単位が足りないと駆け込めたりしてきた学生に説明することもその一つ。もちろん、大学職員であれば必須の 1 冊。

ISBN: 978-4472404566, 図書館: 一, 機構資料室に蔵書有



「カレッジマネジメント」隔月刊

リクルート 編

リクルートが大学等の経営者向けに隔月刊行している雑誌。目まぐるしく変化する高等教育について折々の最新課題を特集し、課題の全体を俯瞰しつつ豊富な先進事例で迫っています。高等教育専門家による連載も読み応え十分。市販されてはいますが、WEB で閲覧可能です。

URL: http://souken.shingakunet.com/college_m/

ISBN: 図書館: 一, 機構資料室に蔵書有



「歴史のなかの東北大学—大学と学生の一世紀—」(2009)

東北大学史料館 編

東北大学の史料館の常設展示の内容をもとに、東北大学の誕生から現在までの大学と学生の歴史をまとめた一冊。東北大学出身者は、自身の大学をより深く理解するため、学外出身者は、自身の出身大学と比較しながら読み進めてみてはいかがでしょうか。

図書館: 本館 2F 学関



「世界の大学危機 新しい大学像を求めて—」(2004)

潮木守一 著, 中央公論新社

もとは大学院の通信講座のテキストとして書かれた一冊。イギリス、ドイツ、フランス、アメリカの 4 か国を取り上げ、それぞれの国における 19 世紀初頭から現代までの大学の歴史の大きな流れを捉えることを目的として書かれています。比較の視点を養い、日本の大学のあり方を相対化して考えるのに向うつてくつてです。

ISBN: 978-4121017642, 図書館: 本館 3F 学関新書中公新書



「激動するアジアの大学改革—グローバル人材を育成するために」(2012)

北村友人, 杉村美紀 共編, 上智大学出版

グローバル化や国際化の流れのもとで、アジアの高等教育における改革の状況や今後の発展について解説されています。それぞれの国の高等教育の状況や政策を概観し、比較の視点を養うにはおすすめの一冊です。

ISBN: 978-4324094396, 図書館: 本館 2F 学関

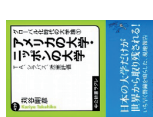


「アメリカの大学・ニッポンの大学—TA・シラバス・授業評価」(2012)

河谷剛彦 著, 中央公論新社

アメリカと日本の大学、教育を比較して論じる一冊。両国の TA 制度の違いに始まり、授業や評価の方法についても紹介されています。

ISBN: 978-4121504296, 図書館: 本館 2F 学関

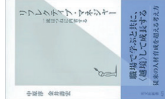
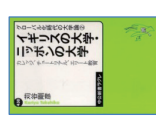


「イギリスの大学・ニッポンの大学—カレッジ、チュートリアル、エリート教育」(2012)

河谷剛彦 著, 中央公論新社

著者がイギリスのオックスフォード大学に転職するというエピソードから始まり、現地からのレポートという形でまとめられているため、物語を読んでいるかのように感じられます。イギリスの大学を通して、日本の大学の特徴を改めて考えるのにおすすめの一冊です。

ISBN: 978-4121504302, 図書館: 一, 機構資料室に蔵書有



高等教育ライブラリ



「高等教育ライブラリ1 教育・学習過程の検証と大学教育改革」(2011)
 東北大学 高等教育開発推進センター編, 東北大学出版会
 どのような教育が効果的な学習成果につながるのか?という問いに対して, 大学教育に関する研究データを基に, 理論と実践についてまとめた一冊です。
 ISBN: 978-4-86163-163-4, 図書館: 本館書庫



「高等教育ライブラリ2 高大接続関係のパラダイム転換と再構築」(2011)
 東北大学 高等教育開発推進センター編, 東北大学出版会
 大学進学率の上昇とともに, 高校と大学の接続のあり方にも変化がみられます。「AO 入試の10 年と今後」, 「大学入試と高大連携活動」, 「良質な大学入試問題とは」の3 つのトピックを挙げ, 今後のあり方について議論されています。
 ISBN: 978-4-86163-164-1, 図書館: 本館書庫



「高等教育ライブラリ3 東日本大震災と大学教育の使命」(2012)
 東北大学 高等教育開発推進センター編, 東北大学出版会
 東日本大震災を受け, 今後の大学はどよう在り, どのような人材育成に取組むべきなのでしょう。メディア, 科学技術史, 科学哲学の専門家による議論とともに, 東北地域の大学における復興支援活動の現状を踏まえ, 今後を展望します。
 ISBN: 978-4-86163-187-0, 図書館: 本館 2F 学関



「高等教育ライブラリ4 高等学校学習指導要領 vs 大学入試」(2012)
 東北大学 高等教育開発推進センター編, 東北大学出版会
 大学入試は高校教育にどのような影響を与えているのでしょうか。高大接続にはどういった問題が存在しているのでしょうか。高校, 大学, それぞれの立場から大学入試の問題点について考える一冊です。
 ISBN: 978-4-86163-188-7, 図書館: 本館 2F 学関



「高等教育ライブラリ5 植民地時代の文化と教育—朝鮮・台湾と日本—」(2013)
 東北大学 高等教育開発推進センター編, 東北大学出版会
 韓国植民地化から100 年にあたる2010 年に, 東北大学高等教育開発推進センターで開催された国際シンポジウム「植民地時代の文化と教育」等の成果をまとめた論集。日本・韓国・台湾の8 名の研究者が最新の成果を寄稿しています。教育史, 大学史, 比較文化それぞれの視点からまとめられた一冊です。
 ISBN: 978-4-86163-221-1, 図書館: 本館 2F 学関



「高等教育ライブラリ6 大学入試と高校現場—進学指導の教育的意義—」(2013)
 東北大学 高等教育開発推進センター編, 東北大学出版会
 2012 年に開催された東北大学高等教育フォーラム「進路指導と受験生心理」をもとにした一冊。多様化する高校教育において, 進学指導や大学入試はどのような役割を果たしているのでしょうか。高校, 大学それぞれの視点から大学受験の教育的意義について考察します。
 ISBN: 978-4-86163-222-8, 図書館: 本館 2F 学関



「高等教育ライブラリ7 大学教員の能力—形成から開発へ—」(2013)
 東北大学 高等教育開発推進センター編, 東北大学出版会
 最新の調査結果から得られたデータをもとに, 日本の大学教員の画像と, 今後の展望についてまとめた一冊。大学のあり方が大きく変化していく中で, 大学教員はその地位, スキル, キャリアをどのように進化・発展させているのかについて解説します。
 ISBN: 978-4-86163-223-5, 図書館: 本館 2F 学関



「高等教育ライブラリ8 「書く力」を伸ばす—高大接続における取り組みと課題—」(2014)
 東北大学 高等教育開発推進センター編, 東北大学出版会
 「書く力」は, 高校や大学教育の中でどのように育まれているのでしょうか。大学入試のための小論文指導の中で「書く力」はどのように伸びているのでしょうか。高校と大学のそれぞれで「書く力」の養成に取り組んでいる教員からの報告をもとに考察します。
 ISBN: 978-4-86163-243-3, 図書館: 本館 2F 学関



「高等教育ライブラリ9 研究倫理の確立を目指して—国際動向と日本の課題—」(2015)
 東北大学 高度教養教育・学生支援機構 編, 東北大学出版会
 STAP 細胞事件をはじめとして, 日本の研究機関と研究者には研究倫理をしっかりと身に蓄積することが求められ, 大学教員の必修教養といえるでしょう。本書は, 日本・アメリカ・イギリス・ドイツ・中国の研究倫理確立の最新動向を共同研究でまとめたもので類書がありません。研究倫理に取り組む方々におすすめです。
 ISBN: 978-4-86163-259-4, 図書館: 本館 2F 学関

最後に

本推薦図書リストに掲載されている書籍の書影（表紙画像）の使用については、各出版社の許諾を得ております。
また、本リストに掲載されている書籍の一部は、「もっと知りたい大学教員の仕事」（ナカニシヤ出版）においても紹介
しています。

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター
川内北キャンパス 川北合同研究棟内
〒980-8576 仙台市青葉区川内41
Email: cpd_office@ihe.tohoku.ac.jp
Tel: 022-795-4471
Fax: 022-795-4749

【PFPP/NFP OB/OG 通信】

① [PFPP/NFP OB/OG] 2016 年度プログラム募集要項公開と留学生向けセミナーのご案内 2016 年 4 月 19 日 16:06

PFPP/NFP OB/OG のみなさま

東北大学 大学教育支援センターの今野です。
年度明けのお忙しい日々をお過ごしのことと思います。
嬉しいことに、2016 年度も継続してプログラムを提供できることになりました。
これもひとえに、様々な形でご支援くださっている OB/OG の皆さんのおかげです。
本当にありがとうございます。

このメールから、2015 年度参加者の方々にも配信を開始しております。
どうぞよろしくお願いたします。

今日のご案内は

- 2016 年度プログラム広報へのご協力願い
- 学内限定特別講義「日本の大学教員と海外での就職をめざす留学生のための進路支援！」についてです。

■2016 年度プログラム広報へのご協力願い

現在、4 月 28 日（木）16:00～のプログラム事前説明会に向けて
学内外への広報に力を入れているところです。

【2016 年度プログラム事前説明会】

4 月 28 日（木）16:00～17:30
川内会場：川内キャンパス、川北合同研究棟 101 ラウンジ
青葉山会場：青葉山キャンパス 青葉記念会館 401（川内地区から同時中継）

ぜひ周りの方々におすめしただただだければと思います。

参加者募集 CM も公開しています。
<https://www.facebook.com/CPDtohoku/videos/vb.1400220533587557/14913635451577/?type=2&theater>

ポスターや募集要項は CPD のウェブサイトでダウンロードできます。

<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/>

応募の受け付けは 5 月 9 日（月）～27 日（金）です。

■学内限定特別講義「日本の大学教員と海外での就職をめざす留学生のための進路支援！」

留学生の方向けに、キャリア支援センターが特別講義を開講します！
羽田先生も登壇します。

日時：2016 年 5 月 17 日（火）
時間：13:00～16:00（12:40 開場）
場所：青葉記念会館 401 大研修室（青葉山キャンパス）

※テレビ会議システムで、川内キャンパス、（東北大学高度教養教育・学生支援機構 CAHE ラウンジ
合同研究棟 101）にも配信します。言語は、日本語（一部英語）となります。

東北大学の大学院博士課程で研究し、日本の大学に就職を目指す留学生の方も多いと思います。
大学教員になるためには、①公募に応募し、②書類選考を突破し、③面接をクリアしなければなりません。最近では、模擬授業を入れ、採点を重視する大学も増えてきました。
また、海外で企業等に就職する場合には、プレゼン力や履歴書 (Resume) の書き方も大きな判断材料になります。このたび、高度イノベーション博士人財育成ユニットでは、日本の大学に
教員として就職を希望する方、海外、特に英語圏の企業に就職を目指す方へのセミナーを
開催することになりました。日本人の大学院生も歓迎します。

申込方法など詳細は下記ウェブサイトでご確認ください。
https://www.ihe.tohoku.ac.jp/pd/index.cgi?program_num=1461029493

最後までお読みくださり、ありがとうございます。
次回の配信をお楽しみに！

今野

PFPP/NFP OB/OG 通信【16-01】（通算第 26 号）

（署名省略）

② [PFPP/NFP OB/OG] 2016 年度プログラム参加者募集開始と大学中国語教授法強化講座のご案内 2016 年 5 月 11 日 11:48

PFPP/NFP OB/OG のみなさま

東北大学 大学教育支援センターの今野です。
あっとい間に GW も終わり、今年度の PFPP/NFP の参加者募集を開始しました。

締切は 5 月 27 日（金）17 時です。
もし周りにご興味のある方がいらっしゃいましたら、ぜひ宣伝をお願いします！

Facebook: <https://www.facebook.com/CPDtohoku/>

Twitter: https://twitter.com/CPD_tohoku

また、前回のメールに対し、近況報告やメールアドレスの変更などの
ご連絡ありがとうございます。この春から新しい所属先に着任された方々の
ますますのご活躍を心から祈っております！

さて、今日は
◆大学中国語教授法強化講座：中国語を教える大学教員のためのスキルアップコース
のご案内をします。

大学で中国語を教える方向けの海外集中コースです。
北京語言大学で、中国語教育の理論・方法論、指導の実際、教材について学ぶ
大学教員対象プログラムをカスタマイズしました。スキルアップを目指す中堅教員、
初めて教壇に立つ教員を全国募集します。
なお、研修のための費用の一部は、中国政府および東北大学が負担します。

【研修期間】 2016 年 9 月 2 日（金）～10 日（土）

もし、お知り合いの方で中国語を教えている方がいれば、おすすめてください！

詳細はこちら

<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/pdp/>

添付のポスターもご参照ください。

引き続きどうぞよろしくお願いたします！

今野

PFPP/NFP OB/OG 通信【16-02】（通算第 27 号）

（署名省略）

③ [PFPP/NFP OB/OG] プログラム参加者懇話会（同窓会）のお知らせ！ 2016 年 6 月 28 日 17:00

PFPP/NFP OB/OG のみなさま

東北大学 大学教育支援センターの今野です。

仙台は梅雨真っ只中の今日この頃ですが、いかがお過ごしでしょうか？

おかげさまで、今年度も 7 月から PFPP/NFP を開始する準備がたちました。
これもひとえに、プログラム OB/OG のみなさんが口コミで参加者をひろげて
くださっているおかげです！本当にありがとうございます。

面接の際に、「このプログラムを何で知りましたか？」という質問をするたび
懐かしい名前を聞くことができ、本当にうれしく思っています。
継続的なご協力、ありがとうございます！

ということ、毎年恒例のプログラムオリエンテーション後の

参加者懇親会（同窓会）を企画したいと思えます！ぜひご参加ください。

【日時】2016年7月16日（土）19時～
【場所】仙台市内（追ってご案内します）

参加を希望される方は、7月7日（木）までにご返信ください。

今年度のプログラム参加者の数は過去最大です、
PFFP/NFP（フルコース）6名
PFFP/NFP（ショートコース）24名
の総勢30名が参加します。

うち10名は東北大学以外からの参加です。

まずまずプログラムOB/OGの皆さんからのお力添えが必要になるかと思えます。
どうぞよろしくお願いたします！

この春から所属やご連絡先が変更になった方が、お手数ですがお知らせいただけますと
うれしいです。みなさまからのご連絡を楽しみにしております！

今野

PFFP/NFP OB/OG 通信【16-03】（通算第28号）

（署名省略）

④【PFFP/NFP OB/OG】7月開催PDセミナーのご案内 2016年6月29日 17:12

PFFP/NFP OB/OGのみなさま

東北大学 大学教育支援センターの今野です。
もう2016年も半分が終わってしまいますね…。

7月に予定されているPDセミナーをご案内します。
既に何名かのOB/OGの方に申込みいただいたようなのでうれしいです。
どうもありがとうございます。

ご都合に合わせて興味のあるセミナーにご参加いただければ幸いです。

■「しまった!」とならないために—ICT時代の教育で押さえておきたい法—

今野が企画を担当しているPDセミナーのひとつです。
著作権法などの教員が知っておくべき法律についてクリッカーを使いながら
クイズ形式で学ぶセミナーです。

開催日：2016年7月7日（木）
時間：14:00-16:00
場所：東北大学川内北キャンパス 教育・学生総合支援センター東棟4F 大会議室
<http://www.tohoku.ac.jp/japanese/profile/campus/01/kawauchi/areaa.html> (A01)

講師：大（東北大学 教育情報基盤センター 准教授）
金石 吉成（東北大学大学院法学研究科 講師）

趣旨：

教員における情報技術の活用は既にごく身近なものになりつつあります。
一方で、急速な技術発展により法律と現場との齟齬や想定外の事項も発生しています。
どのような法律があり、どのように解釈したらよいか、わかりやすい事例や最新の
トピックを交えながら学びます。

詳細・申込み

https://www.ihc.tohoku.ac.jp/pd/index.cgi?program_num=1465256206

■研究倫理シリーズ 第4回 発表倫理を考える

羽田先生肝いりの研究倫理シリーズの第4回です。
今回は発表倫理について学びます。

開催日：2016年7月9日（土）

時間：13:00-17:00

場所：東北大学川内北キャンパス 教育・学生総合支援センター東棟4F 大会議室
<http://www.tohoku.ac.jp/japanese/profile/campus/01/kawauchi/areaa.html> (A01)

講師：

山崎茂明教授（愛知淑徳大学人間情報学部）
吉村富美子教授（東北大学大学院法学部英文学専攻）
大隅典子教授（東北大学医学系研究科）
羽田貴史教授（東北大学高度教育・学生支援機構）

趣旨：

真実ある研究活動を進める上で、コアとなるのは発表倫理ですが、国際的な動向と
日本の動向とは大きなずれもあります。発表倫理のあり方は、現在もまだ流動的なのです。
これらの問題を、『科学者の発表倫理』（丸善出版、2013年）で知られる山崎茂明氏、
『英文ライティングと引用の作法 盗用と言われないための英文指導』（研究社、2013年）の
吉村富美子氏、日本分子生化学会前理事長（第18期）として研究倫理に取り組んできた
大隅典子氏、公正研究推進協会（APRIN）理事・東北大学公正な研究活動推進委員会
専門委員会委員長（総長特別補佐）として研究倫理に関わってきた羽田貴史氏の4名で
フロアを含めた議論を行います。

詳細・申込

https://www.ihc.tohoku.ac.jp/pd/index.cgi?program_num=1464915212

どうぞよろしくお願いたします。

今野

PFFP/NFP OB/OG 通信【16-04】（通算第29号）

（署名省略）

⑤【PFFP/NFP OB/OG】PDセミナーのご案内 2016年7月28日 14:21

PFFP/NFP OB/OGのみなさま

東北大学 大学教育支援センターの今野です。
東北大学は昨日、今日とオーブンキャンパスでにぎわっています。
皆さんの中には忙しく対応された方々もいらっしゃると思います。
大変お疲れ様でした。

7月16日（土）に、無事、2016年度のプログラムを開始することができました。
3連休の初日にもかかわらず、懇親会（同窓会）へご参加くださったOB/OGの
みなさま、本当にありがとうございます。

オリエンテーション当日の様子は、CPDのウェブサイトで随時更新中ですので
ぜひご覧ください。

http://www.ihc.tohoku.ac.jp/CPD/programs/program_cat/pfp/program_year/now

それでは、8月以降のPDセミナーのご案内です。
7月のセミナーにも、OB/OGの方々が参加していただいていたうれしかったです。
ぜひ、ご都合に合わせて興味のあるセミナーにご参加いただければ幸いです。

■機関戦略と資源配分

日時：2016年8月7日（日）10:00-12:00（受付：9:30）
場所：東北大学川内北キャンパス 教育・学生総合支援センター東棟4階大会議室
講師：水田 健輔（大正大学地域創生学部 教授）

【趣旨】

大学経営・財務の問題に造詣の深い水田健輔教授（大正大学）を講師に迎え、我が国の
マクロな高等教育政策や大学財政の動向を踏まえつつ、国立大学を中心にした機関レベルの
資源配分と機関戦略について考えます。大学マネジメントに関心のある方々、
広くご参加ください。

【詳細・お申し込み】
https://www.ihe.tohoku.ac.jp/pdf/index.cgi?program_num=1468671410

■ 研究評価の手法とマネジメント

日時：2016年8月7日(日) 13:00-15:00(受付 12:30)
場所：東北大学 川内北キャンパス教育・学生総合支援センター東棟4階大会議室
講師：林 隆之(大学改革支援・学位授与機構 教授)

【趣旨】

言うまでもなく、「研究」は大学の中心的機能の一つです。研究活動の評価は、科学者共同体が自律的に知識の質を維持・向上させ、研究活動を活性化するためのものとして機能してきました。しかし近年、投じられる資金の増大と研究不正の増加を背景に、社会各方面から厳格な説明責任を求める声が強まっています。研究評価は、学内資源をどう配分するかという機関マネジメントにも関係し、さらに国内外における当該大学の名声やランキングにも影響を与えます。経営戦略の観点から重要な意味をもち、その課題は重層的で、本セミナーでは、大学改革支援・学位授与機構の林隆之先生をお迎えし、研究評価をめぐる現代的課題を踏まえながら、研究評価の手法とそれに基づくマネジメントのあり方について学びます。奮ってご参加ください。

【詳細・お申し込み】
https://www.ihe.tohoku.ac.jp/pdf/index.cgi?program_num=1468671777

■ 授業デザインとシラバス作成

近年、PFFPNFPの必修セミナーとして実施している好評のセミナーです。初期のころのプログラムには含まれていなかったのですが、学び直しの機会として参加してみるのはいかがですか？

日時：2016年8月25日(木) 13:00-17:00
場所：東北大学川内北キャンパス
教育・学生総合支援センター東棟4階 大会議室
講師：串本 剛(東北大学高度教育・学生支援機構 准教授)

【定員】40名
【申込期限】2016年8月19日(金)
+++++

シラバスの作成は、今日ではほとんどの大学教員に求められている事柄となっていますが、その必要性がいまひとつ自覚できない、あるいは本来の機能が十分に活かされていないと感じ、という方も少なくないと思います。本セミナーでは、シラバスのある機能のうちでも、特に授業デザインの小道具としての側面に注目し、1学期を通して展開される授業についても、授業の目標・授業の内容・成績評価方法の3つを構造化することの重要性を解説します。また、その方法を体験し身に付けてもらうために、参加者の皆さんが作成したシラバスを材料にセミナーを進めていく予定です。

【お申込】
https://www.ihe.tohoku.ac.jp/pdf/index.cgi?program_num=1469162334

■ 授業づくり：準備と運営

こちらも近年、PFFPNFPの必修セミナーとして実施している好評のセミナーです。初期のころのプログラムには含まれていなかったのですが、学び直しの機会として参加してみるのはいかがですか？

日時：2016年9月14日(水) 13:00-15:00
場所：東北大学川内北キャンパス
教育・学生総合支援センター東棟4階 大会議室
講師：邑本 俊亮(東北大学 災害科学国際研究所 教授)

【趣旨】学生の前に授業を行うことは大学教員の当然の職務となっています。しかし、授業が思ったようにはいかず、悩んでいる教員もいることでしょう。準備したことが十分に伝わらなかった、学生が授業内容を理解してくれない、おしゃべりが多い、居眠りしている、などなど、教員の頭を悩ませる状況は数多く存在します。授業を成功させるためにはどうすればよいのでしょうか。

本セミナーでは、1回の講義形式の授業を念頭に置いて、学生が集中し、内容を十分に理解できるような授業をつくるためにはどのような点に留意する必要があるのか、どんな準備をして、いかに授業を展開するとよいのかについて、受講者の認知面・心理面から解説を行います。また、受講生の皆さんの授業づくりの工夫や失敗談について情報交換を行い、よりよい授業づくりのヒントを互いに共有したいと思えます。

【お申込】
https://www.ihe.tohoku.ac.jp/pdf/index.cgi?program_num=1469162859

どうぞよろしくお願いたします。

今野

PFFPNFP OBOG 通信【16-05】(通算第30号)

一 (署名省略)

⑥【PFFPNFP OBOG】授業参観および10月実施のセミナーについてお知らせ！ 2016年9月30日 19:52

PFFPNFP OBOGのみなさま

東北大学 大学教育支援センターの今野です。とうとう明日から10月ですね！

おかげさまで、7月からスタートしている今年度のPFFPNFPは過去最大人数の28名で、学び進めております。

本メールでは、10月に行われるセミナーのご案内と、今年度分の授業参観のご案内をいたします。

まず、授業参観については、今年度もプログラムOBOGからの参加を受け付けます。先生方のご協力もあり、授業のレポーターも少しずつ増やしているところです。ぜひご参加ください。

添付の授業概要をご覧ください、参観のご希望がある場合には日程調整表にご記入いただき、本メールに添付にてご返信ください。

誠に勝手ながら、10月6日(木)までの返信をお願いいたします。

もし、11~12月の日程などで、現時点では判らないものに関しては、直前(1週間前くらい)までお聞きいただけます。でも受け付けられる場合がありますのでその場合はお問い合わせください。

続いて、10月14日のセミナーのご案内です。

【PDセミナー】本当のかしこさとは何か―感情知性と大学教育―

日時：2016年10月14日(金) 15:00-17:00
講師：箱田裕司(京都女子大学 教授)
場所：東北大学川内北キャンパス 教育・学生総合支援棟東棟4階 大会議室

大学教育では専門知識を身につけるために、「理論的」であることが重視され、「感情」は排除してきました。しかしEQ(心の知能指数)ということばがあるように、豊かな感情を育てることは、市民性が柔軟な思考を育てる重要な課題であることが明らかになってきました。感情知性を育てることは大学において大切な課題です。

詳細・お申し込みはこちら
<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/archives/4863>

どうぞよろしくお願いたします。

今野
PFFP/NFP OB/OG 通信【16-06】(通算第 31 号)
一 (署名省略)

⑦ [PFFP/NFP OG/OB] 11 月実施セミナーのご案内 2016 年 10 月 19 日 10:42
PFFP/NFP OB/OG のみなさま
東北大学 大学教育支援センターの今野です。
先日お送りした授業参観のご案内への返信ありがとうございました。ご参加いただけます OB/OG の方々には、近々お会いできることを楽しみにしています。
この OB/OG 通信も、今号で 30 号の節目を迎えることとなりました。
毎回返信をいただいたり、近況報告をいただいたり、みなさまから寄せられる声はプログラム関係にも大いに役立っております。改めて感謝申し上げます。
今年度のプログラムも順調に進んでおり、今月末には昨年から新たに導入した「国内他大学訪問調査」を 2 泊 3 日で実施します。今年度も訪問先は、大阪大学、立命館大学、同志社大学、と昨年より訪問先はひとつ増え、授業参観の機会も拡充することができました。
実りある訪問になるよう、統籌準備を進めているところです。
来月にはいよいよ、マイクローチングセミナーも開催します。
プログラムも佳境に入ってきたと実感している今日この頃です。
それでは、11 月のセミナーをご案内いたします。
先運教員でもあるトッド先生のセミナーです！
【PD セミナー】
Classroom management techniques for classes conducted in English
日時：2016 年 11 月 11 日 (金) 15:30-18:00
講師：Todd Enslin (東北大学高度教養教育・学生支援機構 講師)
Barry Kavanagh (東北大学高度教養教育・学生支援機構 講師)
英語での授業運営をスムーズに行うためには、授業内容そのものに関する英語表現だけではなく、授業の始末方、学生への指示の出し方などもお知っておく必要があります。
本ワークショップでは、得た英語で授業を担当する可能性のある教員や、大学教員を目指す大学院生のみならずを対象として、授業の中で使う英語表現を実践的に学びます。
経験豊かな講師と一緒に楽しみながら表現力を身につけてくださいね。
詳細・お申し込みはこちら
https://www.ihetohoku.ac.jp/pd/index.cgi?program_num=1475451857
なお、12 月下旬には、プログラムの有効性を検証する目的で、全国ユニバーサリティ会議を実施する予定です。主に、プログラム修了生の追跡調査を予定しております。
仙台にて、1 泊 2 日の日程で企画しておりますが、ご興味のある方はご連絡ください。
お待ちしております。

⑧ [PFFP/NFP OB/OG] 12 月実施セミナーのご案内 2016 年 11 月 17 日 15:11
PFFP/NFP OB/OG のみなさま
東北大学 大学教育支援センターの今野です。
一段と寒くなって参りましたが、いかがお過ごしでしょうか。
今年度も OB/OG の方も参加しての授業参観が着々と進んでおります。
プログラム修了後も継続的に顔を出してもらえうれい限ります。

年末のプログラム修了生追跡調査に関しても、ご協力の申し出をたくさんいただきました。ありがとうございました。
統籌準備を進めておりますのでどうぞ楽しみにお待ちしております。
今年度の PFFP/NFP は、今週ひとつの山場であるマイクローチングを終えました。とても良い雰囲気であることができて、ほっとしているところです。
それでは、12 月のセミナーをご案内いたします。
【PD セミナー】
コーチング技能を活用した院生指導
日時：2016 年 12 月 9 日 (金) 13:00-16:10
場所：東北大学川内北キャンパス 教育・学生総合支援棟東棟 4 階 大会議室
昨年から開催しているセミナーです。このセミナーの醍醐味は後半のワークショップにあります！昨年の受講を逃してしまつた方、ぜひこの機会にご参加ください！
学部の卒業研究や大学院での研究は、学生が様々な知識を動員して探究的活動を行い、問題解決力を養成する最も重要な活動です。そのために欠かせないのが、研究指導ですが、日本では研究指導のスキル育成には明確な方法論がありません。研究指導を担当する教員は、モデルがなく、試行錯誤しながらスキルを身に付けているのではないのでしょうか。
学習科学では、研究指導は、認知的徒弟制 (Cognitive Apprenticeship) と呼ばれ、モデリング・コーチング・足場かけ・詳述・省察・探索といった手順が定式化されています。特に重要なのは、学生を援助しながら助言や課題を与えるコーチングです。
好評だった昨年に引き続き、出江(いずみ)紳一(東北大学理工学研究科長・教授と、倉重知也氏(株式会社イグニタス代表取締役、国際コーチ連盟 プロフェッショナル認定コーチ)をお招きし、コーチングを活用して院生の動機づけを高め、スムーズに指導を進めるスキルアップの機会を設けることにしました。院生指導に初めて取り組む方、スキルアップを目指す方はぜひご参加ください。
※このセミナーは、東北大学大学院教員準備プログラム (Tohoku U. PFFP) および新任教員プログラム (Tohoku U. NFP) の一環としても提供されます。
詳細・お申し込みはこちら
https://www.ihetohoku.ac.jp/pd/index.cgi?program_num=1477897923
【PD セミナー】
Classroom English: Pronunciation
日時：2016 年 12 月 16 日 (金) 15:00-17:00
講師：Vincent Scura (東北大学高度教養教育・学生支援機構 講師)
研究発表や留学生対応など英語を使用する場面は多々ありますが、大人になってからは基本的な英語の発音のコツを丁寧に学ぶ機会はないかもしれません。本セミナーでは、通じる英語に欠かせないリスムやアクセント、日本人が苦手とする音をとおりあげ、ネイティブ講師による実践的な練習を交えて楽しく学びます。
詳細・お申し込みはこちら
https://www.ihetohoku.ac.jp/pd/index.cgi?program_num=1477376201
みなさまにお会いできることを楽しみにしております！
今野
PFFP/NFP OB/OG 通信【16-08】(通算第 33 号)
一 (署名省略)

⑨ [PFFP/NFP OB/OG]「東京門会」設立と 1 月実施セミナーのご案内 2016 年 1 月 10 日 15:01
PFFP/NFP OB/OG のみなさま
東北大学 大学教育支援センターの今野です。
2017 年、今年もどうぞよろしくお願いたします。

ディスレクシアの症状のコミュニケーションやアセスメントの手法、事例に加え、ワークも取り入れながら
大学において実施可能な対応について考えます。ご参加をお待ちしています。
大学教職員をはじめ、関心を寄せるみなさまの参加をお待ちしています。

(主催) 東北大学 高度教育支援センター 学生支援機構
(共催) 東北大学大学院 教育学研究科
【お申込み】
https://www.ihe.tohoku.ac.jp/pd/index.cgi?program_num=1479084247

楽しい日が続きますので、どうかご愛顧ください！

今野
PFFP/NFP OBOG 通信【16-09】(通算第34号)

― (署名省略)

⑩ 【PFFP/NFP OBOG】2016年度プログラム成果報告会のご案内 2016年3月2日 15:58

Tohoku U. PFFP/NFP OBOG のみなさま

東北大学 大学教育支援センターの今野です。
ご無沙汰しております。

現在、PFFP/NFP の海外他大学訪問調査で今年度のPFFP/NFP参加者と
ハークレーにいます。リンクもサブリーナも元気です。
今年のカリフォルニアは雨が多いと聞いていたのですが、今のところ
天候にも恵まれて、充実した研修の日々を過ごしています。

さて、3月23日(木)に、今年度のプログラム成果報告会を開催することに
なりました。ぜひ多くのOBOGのみなさんに参加していただきたいと思います。
年度末で忙しい時期かとは思いますが、ご都合が合えばぜひご参加ください！

- 【2016年度プログラム成果報告会】
2017年3月23日(木) 13:00-16:00
川内北キャンパス 川北合同研究棟 CAHE ラウンジ
- 【2016年度プログラム成果報告会 修了祝賀会】
2016年3月23日(木) 19:00～
仙台駅周辺、または国分町

ご参加いただける場合には、3月9日(木)までにご連絡ください。
ご返信の際には、下記のフォーマットをご利用ください。

氏名：
【成果報告会】 出席する／出席しない
【修了祝賀会】 出席する／出席しない

また、4月から新たな所属先に移られる方もいらっしゃるかと思います。
その際には、ぜひご一報をいただけると嬉しいです。

皆さまのご参加を心よりお待ちしております！

今野

PFFP/NFP OBOG 通信【16-10】(通算第35号)

― (署名省略)

今年も、OBOGの方々から、年賀状、年賀メールをいただきました。
みなさんお忙しいのに、大学教育支援センターのことを覚えてくれて
本当にありがとうございます。喜ばしい近況報告も複数寄せられ
スタッフ一同で喜んでおります。

10月にお送りしたOBOG通信【16-05】(通算第30号)にて
ご案内しておりました、プログラム修了生の追跡調査をかねた
「全国ユニザ会議」が雑事、昨年再来に開催されました！
遠くは広島からもご参加いただき、2011年度～2015年度までの
各参加者と深夜まで熱い議論が交わされました。
ご参加いただきました皆さま、本当にありがとうございます。

そこでの議論で、修了生の勤務先が全国に広がっていることもあり
なかなか仙台に集まるのは大変だけれど、関東支部などを作ってみては
どうか、との提案がありました。さっそくPFFP2011修了生の森新之介さんが
動いてくれました。下記、森さんからのメッセージです。

どうも、2011年度にPFFPを修了しました森と申します。
この度、FBに「Tohoku U. PFFP/NFP 東京同門会」というグループを開設しました。
<https://www.facebook.com/groups/360133544348173/>
関東在住ですとなかなか仙台での集まりに参加できませんが、こっちでもできる範囲で
旧交を温めたり交流を広げたりしていきたいです。
当面は、所属に關係なく参加できるFD研修会などあれば随時情報を共有し、参加者が
ある程度の人数になったら都内(新宿?)で顔合わせ兼ねて集まりたいと考えています。
ご参加お待ちしております。

各終了年度別に仙台での忘年会や新年会など節目に集まりを開催されている旨
いろいろとご連絡いただいておりますが、こうして修了生の手によって地球支部が
出来るというのは、とっても嬉しいです。みなさまも、ぜひ！

なお、大学教育支援センターでは下記ウェブサイト、SNSでも情報を配信しております。
ぜひのぞいてみてください。

- facebook
<https://www.facebook.com/CPDtohoku>
- twitter
https://twitter.com/CPD_tohoku
- CPD ウェブサイト
<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/>

全国ユニザ会議の様子は、また改めてご案内いたします。お楽しみに！

それでは、1月のセミナーをご案内いたします。

【PDセミナー】
「ディスレクシア―読み書き困難―への気づきと支援」
【日時】2017年1月17日(火) 15:00-18:00
【場所】東北大学 川内北キャンパス
教育・学生総合支援センター東棟4階 大会議室

今野が企画しましたセミナーです。ご興味のある方、ぜひお越しください！

【趣旨】

会話を流暢にでき、知的能力も標準値にありながら、文字情報の処理がスムーズにいかない
「ディスレクシア」(読み書き困難)の存在が明らかになってきています。本人の努力不足や
受け付けられなく、脳の働きや使い方が異なるために起る症状であることが判明されてきました。
一方で、トーマス・エジソンやトム・クルーズなどの著名人もディスレクシアであったとされる説もあり、
各分野で才能を発揮している例も報告されています。読み書き困難を伴う学生に出会った場合、
大学や大学教員はどのような対応ができていますか？
本セミナーでは、言語発達や読み書き困難等に関連する研究が、小学生から成人までの
読み書きに関する相談に応じてきた川崎聡次先生を講師にお迎えし、

先達教員ガイド 2016

「東北大学 大学教員準備プログラム」 「東北大学 新任教員プログラム」
先達教員のみなさまへ

先達教員のみなさまへ

このたびは、東北大学 大学教員準備プログラム (Tohoku U. PFFP) 及び新任教員プログラム (Tohoku U. NFP) におきまして、先達教員にご就任いただき誠にありがとうございます。Tohoku U. PFFP/NFP は、大学教員を志望する大学院生及び初期キャリアにある大学教員が、研究・教育・社会貢献・大学への貢献など多様な大学教員の役割を理解すると共に、生涯にわたる職業的専門性発達の展望を持つことを目的としています。

両プログラムにおいて参加者は、国内でのセミナー、ワークショップ、授業参観、国内外他大学訪問調査（フルコース・オプション）などに参加し、大学院教育だけでは十分に培えない高等教育や教授・学習に関する知識・理解を深めます。また、自己省察を通じて継続的な専門性発達を行える主体的な態度・意欲・能力を形成します。

まだ経験の乏しい参加者がこうした態度や能力を形成していくには、先輩教員が自身の豊富な経験をもとに、省察への援助・助言を行うことが効果的です。当プログラムに先輩教員による支援を導入して今年度で6年目となりますが、自分の指導教員以外の先輩教員との交流の機会が持てることは、例年参加者から好評を得ています。

先達教員のみなさまには、ご自身の教育経験に基づき、先達、よき助言者として、プログラム参加者への励まし、課題を明確にする手助け等の活動へのご協力をお願いいたします。

<2016 年度 PFFP/NFP 先達教員のみなさま>

イノベーション戦略推進本部	医学薬学専攻	澤谷 邦男 名誉教授	名譽教授
薬学研究科		平澤 典保 教授	教授
災害科学国際研究所		畠本 俊亮 教授	教授
文学研究科		永吉 希久子 准教授	准教授
医学系研究科	保健学専攻	佐藤 一樹 助教	助教
高度教養教育・学生支援機構	言語・文化教育開発室	佐藤 勢紀子 教授	教授
高度教養教育・学生支援機構	言語・文化教育開発室	Todd Enslen 講師	講師
高度教養教育・学生支援機構	高等教育開発室	関内 隆 教授	教授
高度教養教育・学生支援機構	高等教育開発室	佐藤 智子 准教授	准教授



東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター
教育関係共同利用拠点「知識基盤社会を担う専門教育指導力育成拠点」

プログラム構成

Tohoku U. PFFP/NFP では、知識の提供と実践の場の提供により、参加者が大学教員の仕事について理解を深め、自身の教育観の構築を支援しています。

＜達成目標＞

参加者は次のことができるようになることを目指します。

- 生涯にわたり専門性を高めるために、効果的な省察ができるようになること
- 大学教員の役割、仕事を理解し、展望を持ってキャリア構築を設計できること
- 教育活動に関する基礎的知識を身につけ、自分なりの言葉で教育観を語れるようになること
- 異分野の研究や教育文化を知ること



＜活動内容＞

- 仕事を理解する（高等教育や大学教員の仕事に関するセミナー）
- 基礎知識を得る（シラバス作成ワークショップ）
- 実践力を磨く（マイクロティーチング、模擬授業）
- 比較の目を育てる（セミナー、ワークシヨップ、国内外他大学訪問調査）
- 同僚とつながる（他の参加者との交流、ディスカッション）
- 先達から学ぶ（授業参観、コンサルテーション）
- 自己省察力を養う（リフレクティブジャーナル）

Tohoku U. PFFP/NFP 2016 の参加者

Tohoku U. PFFP/NFP 2016 には、全てのプログラムに参加する「フルコース」と、プログラムの一部のセミナーおよび授業参観のみに参加する「ショートコース」があります。フルコース参加者は、書類・面接審査を経て決定しています。ショートコースは、参加資格の確認を経たうえで基本的に希望者にすべてを受け入れています。2016 年度のプログラムには、フルコースに 6 名、ショートコースに 23 名の合計 29 名が参加します。

【フルコース参加者】

＜PFFP 参加者＞

1	イシハラ 石原 マサフミ 雅文	男	日本	東北大学 原子分子材料科学高等研究機構	ポスドク (助手)
2	ハヤシ 林 シンゴ 慎吾	男	日本	東北大学大学院 教育学研究科	D2
3	オウ 王 イ 偉	男	中国	東北大学大学院 国際文化研究科	専門研究員

＜NFP 参加者＞

1	タカハシ 田中 カズヨシ 香津生	男	日本	東北大学 サイクロトロンのラシオアクセラレーター	助教
2	ロウツ Roots マリア Maia	女	エストニア	東北大学大学院 法学研究科	助教
3	ヨシダ 吉田 サリン 沙蘭	女	日本	東北大学大学院 教育学研究科	准教授

【ショートコース参加者】

＜PFFP 参加者＞

1	シエウ 周 シン 振	男	中国	東北大学大学院 国際文化研究科	GSICS フェロー
2	シノハバ 渡邊 ヒロユキ 竜太	男	日本	東北大学大学院 国際文化研究科	GSICS フェロー

3	チリダ ヒロキ 成田 裕幸	男	日本	東北大学大学院 理学研究科	D1
4	チカオ キョウコ 中尾 教子	女	日本	株式会社内田洋行 教育総合研究所	研究員

＜NFP 参加者＞

1	ニイ マキ 新居 麻樹	女	日本	東北大学歯学部 附属歯科技工士学校	講師
2	エン シュンコウ 袁 春紅	女	日本	岩手大学 農学部	准教授
3	シノハラ ヨロジ 主演 祐二	男	日本	岩手大学 教育推進機構	准教授
4	オノノ ミチ 大野 美砂	女	日本	岩手大学 農学部応用生物化学科	助教
5	トミカキ ヨウコ 富永 陽子	女	日本	岩手大学 教育推進機構	准教授
6	ハラタ ナホコ 原田 奈穂子	女	日本	東北大学 医学系研究科 保健学専攻	講師
7	タナカ ヤスエ 田中 恭恵	女	日本	東北大学大学院 歯学研究科	助教
8	エンカイ エロキ 遠海 友紀	女	日本	東北学院大学 ラーニング・コモンズ	特任助教
9	シマダ 嶋田 みのり	女	日本	東北学院大学 ラーニング・コモンズ	特任助教
10	カマタ セイジ 鎌田 誠司	男	日本	東北大学 学際学フロンティア研究所	助教
11	カヤマ マサヒロ 鹿山 雅裕	男	日本	東北大学 学際学フロンティア研究所	助教
12	ウエノカキ ホミ 上岡 紀美	女	日本	仙台百百合女子大学 人間学部人間発達学科	講師
14	シロク エカリ 塩飽 由香利	女	日本	東北大学 歯学研究科	助教

14	オノカワ マリコ 及川 麻理子	女	日本	東北大学 歯学研究科	助教
15	ウツボト トオル 坪谷 透	男	日本	東北大学 歯学研究科	助教
16	ヤマノウチ ヤスノリ 山内 保典	男	日本	東北大学 高度教養教育・学生支援機構	准教授
17	スガハラ アキコ 菅原 明子	女	日本	東北大学病院看護部 東北大学大学院医学系研究科	助手
18	タマカケ ゲン 玉懸 元	男	日本	いわき明星大学 教養学部	准教授
19	ニシオカ タカシ 西岡 貴志	男	日本	東北大学大学院 歯学研究科	助教

Tohoku U. PFFP の概要

Tohoku U. PFFP は、**大学教員を目指す大学院博士課程後期の学生、ポストドク、研究員を対象**に、大学教員に求められる能力を育てることを目指しています。プログラム参加者は、大学教育に関する学内セミナーや授業参観、マイクロティーチング、国内／海外他大学訪問調査（オブション）を通して大学教員に必要な能力や知識を獲得し、円滑に初期キャリアを積んでいくことができるよう、大学教職への準備を図ります。同時に、プログラムを通じて他分野の参加者と交流し、将来の同僚について知るとともに、大学における多様性を体験してもらおうことを目指しています。

Tohoku U. NFP の概要

Tohoku U. NFP は、**新任教員を対象**（平成 23 年 4 月以降採用、概ね 40 歳以下）に、大学教員に求められる様々な能力や知識の獲得を通じて、円滑に初期キャリアを積んでいくことが出来るように支援することを目指しています。特に、参加者が組織の一員としての大学教員という視点を身につけ、自らの活動を省察し、これからの大学や大学教授職について自分なりの展望をもつことを目指しています。

2015 年度からの変更点

[1] ショートコースにおけるリフレクティブジャーナルの導入

2015 年度の参加者より、フルコース参加者だけでなく、ショートコースにおいてもリフレクティブジャーナルの執筆を課してほしい、という要望が寄せられたため、ショートコースにおいてもリフレクティブジャーナルを課題の一つとして導入することにしました。

[2] 前期授業を対象とした授業参観の実施

全学教育を対象とした場合、前期に実施している授業を参観対象としてほしいという要望が多いことから、7 月下旬に実施される授業も参観の対象とすることにしました。

[3] 資料提供のタイミングと活用の呼びかけの工夫

オリエンテーション時に配布している各種資料や書籍が、活用されていない状況が明らかになったため、一括してオリエンテーション時に配布することをやめ、適時必要な資料を配布している方法をとることにしました。配布時には、その意図なども解説することで、より豊富な資料を活用してもらええることを期待しています。

[4] 模擬授業の実施方法の改善

先達のみならずから寄せられたご意見をもとに、模擬授業の実施方法を改善します。これまでにも課していた「授業 1 回分（90 分間）を設計した後、そのうちの一部をマイクロティーチング／模擬授業として実践する」という流れが実際には踏襲されていない場合が多いことから、ティーチングプランの様式を 90 分間のものに変更し、授業全体の流れを先達教員と共有できるようにします。また、プログラム OB/OG からの協力により、学習者役を別におき、先達教員にはコメントのフィードバックに集中してもらおうという方法も検討していく予定です。

[5] 先達コンサルテーションの実施方法の改善

先達教員、参加者の双方から時間の設定について要望が寄せられていることから、一人あたりにかける時間を延長する方法を検討します。また、事前に参加者からの質問内容を先達にお伝えできるように実施方法について改善します。

先達教員の役割

先達教員のみなさまには、次の6つの役割をお願いいたします。

1. オリエンテーションへの参加
2. 「授業を見る聞く学ぶ」における授業公開と授業後デイスカッション
3. 模擬授業におけるコメントのフィードバック
4. リフレクティブジャーナルの確認と対面コンサルテーション
5. 成果報告会への参加
6. 先達教員としての活動に対するフィードバックの提供

以降のページでそれぞれの活動内容について説明します。

1. オリエンテーションへの参加

参加者との顔合わせをします

2016年7月16日(土) に実施するオリエンテーションにご参加いただき、参加者との顔合わせをします。

オリエンテーションでは、自己紹介、プログラムの目的に関する説明、大学教員の役割と大学教育に関するブレインストーミング、比較の視点を育てるワークショップ、ランチタイム懇親会を予定しています。

終日の参加が難しい場合は、可能な範囲での部分的な参加も可能です。特に参加者との顔合わせが行われる午前中～ランチ懇親会にかけてご出席いただければ幸いです。

当日欠席の場合は、あらかじめ先達教員のみなさまの自己紹介と参加者へのメッセージをビデオ収録し、オリエンテーション当日に上映することで、先達教員のみなさまを参加者にご紹介いたします。ご協力をよろしくお願いいたします。

2. 「授業を見る聞く学ぶ」における授業公開と授業後デイスカッション

ご担当されている授業の参観許可とデイスカッションへの協力をお願いします

プログラム参加者は、より具体的に教育活動について考えるために、実際の授業を参観し、授業後に担当教員とのデイスカッションをします。

先達教員の皆さままで、2016年度の前期・後期に授業を開講される方には、上記の活動においてご自身の授業を公開していただくと共に、授業後のデイスカッションにご協力をお願いいたします。

授業後のデイスカッションは、参観人数に合わせて30～60分程度を予定しております。

日程の調整については、別途ご連絡いたします。

〔参加者の声〕「授業を見る聞く学ぶ」

- 教員に“動き”があることがやはり効果的であると思った。教員と個々との対話、グループとの対話があった。学び合う場という雰囲気を生み出してくれた。トッド先生が学生の名前を呼んでコミュニケーションをとっていたのも、あるようでなく、良いなと思った。コミュニケーションは学びを深めるということのひょうじょうに思った。グループワーク中のファシリテーターの役割も重要である。各グループのディスカッションが深まるように全体への目を配り必要であった。授業見学は、毎回、新たな発見と学びがあつてとても有意義であった。特に今回は、日本語、英語、どのような講義でも共通する部分があることも面白かった。教育とは、テーマについて、学生とともに学び、深め合うプロセスであると思う。そのために教員は、引き出す、補うといった役割を担っている。教えるのではなく、共に学び、育ちあうということだろう。。静的ではなく、非常に動きのあるプロセスである。コミュニケーションは、日常一般だけでなく、教育にも重要な意味をもつことが理解できた。
- 統計計算の最も基礎的な部分に関する講義だったので、ある程度の基礎知識もあり、内容に入っていくやすかったものもあるが、それでも非常にわかりやすく、簡潔かつ抜け落ちとしない講義内容で大変勉強になった。今までのNFPでは授業の組み立て方、伝え方、学習者の理解プロセスなど、先達の先生方の経験や研究に基づいた分析・考察・実践結果の中身を主に勉強させてもらっていたが、今回は実際の授業でのパフォーマンスを拝見できとても有意義だった。なぜ「わかりやすかった」のか。いくつか印象に残った点を書いておく。1) 喋り方が明確で聞きやすく、言い方に迷いがないので、聞いている方が緊張感を持ち、雑念無く授業について行ける。自分の場合は、専門分野の内容でも、いや他人に説明するとなつた場合、言葉の定義や使い方、内容の正確さなどに自信がなくなつて言葉がスラスラ出てこない場合がよくある。普段の勉強の賜物なのだろうか。淀みなく喋る力を身に付けた。2) 当然かもしれないが、板書がキレイで読みやすい。図はキレイに、字ははっきりしている。要所要所で内容を区分け（番号を振る）し、「今何をやっているのか」をわかりやすくしている。自分はまだセメスターを通して行うような授業を受け持ったことはないが、もしやる場合は板書でやると決めているので、参考にしたい。3) 宿題の解説と質問への回答を丁寧に行っている。前回のNFPの講義で、呂本先生が「既有知識、既習内容の活性化」を強調しておられたが、それに当たる。前回何を学んで、今何を学ぶのか、前回と今の内容をつなげられるように意識したい。
- 授業中一貫して、昼食後の時間帯であるにも関わらず喋っている学生が少なく、熱心に書く作業をしている学生が多かったことから、本授業では、学生の意欲を刺激し持続するような工夫がなされており、またそれが機能していると思った。学生の眠気防止については、先生ご自身も配慮している点として挙げておられたが、授業内で話題にする上

ビックリそれ自体が学生の興味を惹くものであることに加えて、学生に質問したり、短い動画を複数回用いたり、学生自身に作業させたりすることで、授業にめりはりが生まれ、授業内の学生の意欲を喚起し、維持する一因になっていた。また、和間の移動も、質問に対する回答を聞きとるためだけでなく、学生との距離を心理的に縮める上でも効果を発揮していた。和間巡視や質問の仕方などは教育実習の際にも指摘された経験があるが、実際に教壇に立つと緊張して忘れてしまうことが多かったので、必要に応じて意識しながら取り入れていきたい。

- 学生の積極的な発言を促すために、非常に重要な対応の仕方であると感じた。誰も間違ったら「恥ずかしい」「先生に怒られる」などと考え、どうしても失敗を恐れて消極的な行動をとってしまう。現在の自分も、研究室の先生と議論を交わす際に怒られることを懸念し、積極的に意見を言っていない気がする。逆に後輩に意見された際には、自分は意外とはっきり「それは違うでしょ！」とやってしまっているかもしれない（あまり覚えていない）。その場にいる全員が「議論に参加していること」を感じ、「全員で結論を出した」感を得るためにも、議論（授業）の場の環境づくりは極めて重要である。授業の場以外でもぜひ出来るようになりたいし、実践していきたい。
- 自分が特に印象的だったのは2点。まず、分かりやすさよリアリティを追求して、図よりも写真を用いるという点。たしかに図の場合はエッセンスを抽出するために簡略化して、必要な部分をわかりやすく描く。自分の分野では主にそのようにしている。一方でわかりにくくても実際の写真を用いたというのは、おそらく普段から実験などをしており、そのリアリティな姿に日常的に接して、それに対し何らかの実験を行わなければならなかったため、わかりにくくてもリアリティを知っておく必要性があるのだろう。このへんは実験主体の学部（薬学含む）とそうでない学部との違いと感じた。もう一点は最後にスライド資料を配った点について。内容をしっかり覚えてもらいたい必要のある学部の授業（おそらく学部の授業）では資料を最初に配って書き込みをできるようにする一方、今回のような全学の授業では覚えてもらう必要はないため、授業中は聞くことに集中してもらい、最後に記録として残すために資料を残すとのことだった。このように授業の意図に応じて資料を配るタイミングをかえるというのは、簡単な手法であるが効果的であると感じたので、自分も使わせていただこうと思った。

3. 模擬授業におけるコメント

参加者の実践する模擬授業を参観し、フィードバックをご提供下さい

模擬授業の概要

PFP/NFP では、実践的な授業実践のスキル獲得のために、参加者が一回の授業計画をたて、そのうちの任意の一部を 20 分程度実施し、これに対して他の参加者や先達教員からコメントをフィードバックする機会を設けています。

先達教員のみならず、**2017年2月予定のワークショップ「自分の授業をみよめる～模擬授業」にご参加**いただき、参加者のティーチャリングに関するコメントをご提供ください（詳しくは開催日前に再度ご説明いたします）。

模擬授業ワークショップの流れ

模擬授業ワークショップは以下のような流れで行います。

- 参加者による授業設定の概要説明（3分間）
- ティーチャング（17分間）
- うまくいったところ、さらによりよくできる部分のふり返り
- 他の参加者、メンターからのフィードバック

17 分間の授業実践は、計画した一回の授業のうちの任意の部分の切り出ししたものであり、活動の途中で時間が終了することがあります。また、他の参加者、先達教員は、授業者の設定、要求に応じて適宜受講生役を担うことがあります。

模擬授業におけるコメントの方針

模擬授業ワークショップにおいては、参加者が自分のティーチャングに関する長所を発見するとともに、さらなる練習、工夫の余地があるポイントについて認識できるよう、建設的なコメントをお願いいたします。また、ご自身のこれまでのご経験から、参加者の課題に関連するティーチャングに関するエピソードなどもお寄せいただければ、より充実したセッションとなるでしょう。

また、模擬授業ワークショップでは、主に**教え方 (implementation of teaching techniques) に主眼を置いてコメント**することとします。ただし、

授業内容上の課題が授業の成否に関わるかと判断される場合には、この点についても具体的なアドバイスをお寄せ願います。

模擬授業におけるコメント時の留意点

フィードバック時には、次のことを留意願います。

- セッションの構成（導入部分として適当だったか?）
- 進行のペース（速すぎ/遅すぎるところはなかったか?）
- 言語/非言語コミュニケーション（声、アイコンタクト、ジェスチャー）
- 受講生とのインタラクション（学習を支援/促進するものであったか?）
- 道具の利用（黒板、その他教具の使用方法）

Osaka University, Course Design and Teaching Workshop 資料(2011)を一部改題

フィードバックの方法については、次のことを留意願います。

- 授業の背景・設定に関連した指摘を行うこと
- 人（人格）を批評するのではなく、パフォーマンスを批評すること
- ネガティブな点・ポジティブな点、両方のコメントをすること
- 特定の事象について、あいまいな点なく明確に伝えること
- 「どう改善するか」についてのアイデアを提供すること
- 1つか2つの主なポイントに絞ってコメントすること
- コメントの目的は支援であることに留意すること
- 学習者（受講生）の視点からの指摘も行うこと

Saroyan, A., & Amundsen, C. (2004)等を参考に作成

〔参加者の声〕「模擬授業」

- 不安だったのは「仕事にするかもしれないことが楽しくなかったらどうしよう?」ということでした。言い換えれば、根本的に自分に合っていないと判明したら、ということですが。これについては、今回の模擬授業で救われました。実のところ、今回選択した授業内容について話すのがとても楽しかったのです。それも、フィードバックにおける評価を受ける前から、話すことそのものがしっくり来り楽しかったのです。これは平澤先生が最後におっしゃっていた「若い人たちに自分の持っているものを伝えるのは楽しいし、そうあってほしい」に通じるものがあります。
- 今回の模擬授業では、板書とスライドの、それぞれの強みを見ることができて興味

深かった。自分は板書派であるが、それぞれの長所と短所を考えてみる。仮に授業の「質」を、大雑把に、①わかりやすさ、②情報量、③参考資料の質・効果性、④どれだけ学生の積極性を引き出せるか、4つで評価できるとすると、①は板書、②・③はスライドに軍配が上がりそう。④については板書・スライドという方法論以外の部分が大いだろう。板書のわかりやすさの要因は、授業の内容について、教員の中で一旦消化されたものももう一度形になって板書に表れている、という実感と安心感が大いと思う。加えて、ノートを取る学生とペーパーが合いやすいので、無理なく授業を展開していける点も大きい。②・③のスライドの利点については説明不要だろう。一長一短あるが、自分としてはやはり①のわかりやすさを追求したい。邑本先生が仰っていたことだが、「わかる」ということが学生の授業への積極性を引き出すからである。そういう意味で、①と④の関連性を自分としては大事にしたい。となると、板書派の課題は情報量と参考資料の質をどうやって確保するかである。まだ実践した経験がないので何とも言えないが、授業外の課題をうまく出すことでカバーできるのではないかと妄想している。板書で行う場合、情報量はスライドの半分程度と見積もるのが妥当だろう（澤谷先生が仰っていた）。授業外の課題を、上手くナビゲートしてやれば、残り半分の情報を学生自ら調べて身に付ける、ということではできないものだろうか。そうすれば、①②③④全て揃う気がするのだが、机上の空論だろうか。自分が実践する時までとっておきたい計画である。

- 前回のマイクロティーチングを踏まえ、分量を増やす形で模擬授業を行った。前回のマイクロティーチングでは宗教学の話が多かったため、学術的な内容より宗教と日常生活との関係がみられる資料を授業内容に取り入れた。刺激的な内容で興味をひくことを考えたが、刺激的な内容だからこそ「宗教とは何か」という問いに対して偏見をもたせる可能性があることをコメントから学んだ。また、「宗教」と「宗教学」の二柱で授業を構成したが、報告者の中でもその区別と両方の繋がりが明確に定まっておらず、曖昧なまま授業を行ったことに気付いた。二回の授業を通じてもっとも難しさを感じたのは、興味誘発と新しい知識の伝達におけるバランスである。面白そうな内容を伝えながら、知識を共有するとともに客観的視点を育てる授業を理想として考えているが、それを達成するための課題いくつみつめた。PFFPの様々な研修を通して、これまで学生の立場でみていたことを教員の立場でみるようになりつつあると意識していたが、それらを消化するには時間が必要であるようだ。

4. リフレクティブジャーナルの確認と対面コンサルテーション

参加者との個人面談にご協力ください。

プログラム参加者は、「**大学教員の役割や仕事を理解し、自分なりの考え方を説明できる**」ようになることを目的とし、リフレクティブジャーナルの作成を行います。

リフレクティブジャーナルとは、自分の経験・体験・思考を省察し、考察した内容について記していく記録を意味します。記述することによって、より深い考察ができ、自分なりの考え方を表現できるようになることから、自己省察を促進するためには有効な方法だと考えられています。

先達教員の皆さまには、プログラム実施期間中に一度、上記のリフレクティブジャーナルにおける参加者の記述を確認したうえで、**2017年3月**に実施予定の対面コンサルテーションを実施していただくようお願いいたします。

対面コンサルテーションにおいて先達教員は、ご自身の経験を踏まえ、参加者が大学教員という役割の在り方について明確なビジョンと価値観を持てるように励まし、助言、問いかけをしてください。参加者がより多角的な視点で教育活動について考えることができるよう、問いかけやこれまでの経験の共有をお願いします。

対面コンサルテーションの流れ

対面コンサルテーションは以下のよう流れで行います。

【前半】先達一人当たり 3～4 名の参加者と各 15～20 分ずつの面談

【後半】グループディスカッション（40 分）

グループディスカッションは、参加者と先達全員で、特に全体と共有したいことや、他の参加者・先達の意見も聞きたい、というトピックを出し合って進めます。

〔参加者の声〕「先達コンサルテーション」

- 本プログラムで様々な研修を受講してきて、その最後の時期に、経験豊富な先達教員の方々から生の声を聞いたことは非常に良かった。6人の先生方の意見を聞いて総括的に感じたこととして、先生全員が、学生別により良い教育をどのように提供するかということを常に考えていることがわかり、とても素晴らしいと感じた。
- 今回私は、先達教員の方々に対して、教員として働いてきた中で教育観がどのように変化していったか、もしくはどのような教育観を持っているか、ということを中心に話を聞いた。教育観に関する内容は少し違った話も多かったが、学生個人のパーソナリティを踏まえて、学問の楽しさをより楽しく面白く学生に伝えることに尽力し誠行錯誤することが、大学教員の本質的な役割なのではないかと感じた。パークレーにいた時も同じことを感じたが、学生からの多少的外れで、遠慮のない質問に答えてくださる先生方の懐の深さを感じた。授業見学の後のディスカッションを踏まえた内容を聞いたつもりもしたが、ディスカッションの時と比べると、より自分のペースで質問をしたり、時には個人的に悩んでいたことなど（ライフワークバランス、教員としての生活、大学教員として人間関係をどうするかなど）を多く伺うことができた。
- 私は指導教員が学生を褒めるどころをほとんど見ることがありません。もちろんそういう育て方もあるのだろうと思っておりますので、昔はそれに慣れようとしておりました。しかし最近になり、どうにも研究室の後輩がいまいちモチベーションに恵まれないことや、自分自身の自己肯定感が低下していたことについて考えてみたときに、褒めることの必要性を感じるようになりました。これについて永吉先生は「今の時代、学生の先行きは不安定で、そこで否定的な評価だけを受けていると精神的に厳しいものがある」と時代背景も踏まえてお話ししてくださいました。また「投稿論文がなかなか通るとも限らない状況において教授にくらいは認めて欲しい」ともおっしゃっていました。これについては褒められない状況にばかりいた身としてはカルチャーショックにも似た衝撃を受けましたが、本当にその通りだと思えました。また平澤先生は「まず簡単な実験からはじめてもらってその成功を褒めることで自信がつくと、ちよっと騙すように申し訳ないのだけど、より難しいことに挑戦する際に失敗を乗り越えやすくなる」というような褒めることの別の効能について教えてくださりました。これは本当だと思えます。成功経験とそれを評価された経験が不足している、投げ出しにくくなることも多々あると思えますので。
- 長い間、私にとって、大学教員という職業は研究の継続に付随するものであった。修士課程および博士課程への進学を決めた時、研究が動機の多くを占めており、大

学教員はその先の進路として可能性の高い選択肢の一つではなかった。良くないこととは思いつつも、研究と比較すると、受動的かつ消極的な姿勢でそれを選ぼうとしていたことは否定できない。しかしながら、各種セミナーを通して大学教員という仕事について知識や理解を深め、これまでの自分の経験を振り返ったり、短時間ながら授業を構想することによりやりがいを見出したりする中で、研究者としてだけでなく、教育者としての大学教員像を現実味のある形で思い描くようになってきた。先達コンサルテーションに向けて質問事項がとめどなく考えついたり、先達の方々のお話を伺いながらさらさらなる質問事項が浮かんだりすることに気づき、大学教員としての自分の在り方について、以前よりも、そして想像以上に積極的になっていくことを改めて実感し、そのような変化を良い傾向だと受け止めている自分に少し驚いた。教育への関心が高まるにつれて、特に教育と研究、それ以外の業務とのバランスの取り方への関心が高まり、私が先達コンサルテーションで提示した質問の多くはその点に関連するものだった。それらへの回答は、首尾不首尾やどれを重視しているのかなども含めて、一様ではなく、しかし、それらのバランスを考えらるうえで、不可抗力であったり予測不可能な要素は排除できるものではなく、またキャリアを通して常に一貫して保てるものではないという点は共通していた。そして、時間の使い方や教育と研究の関連を工夫すること、視点を変えて再考してみることなどのご教示をいただいた。自分にとっての教育と研究、それ以外の業務との正しいバランスは推し測ることもできないほど曖昧としている段階で、今回得られた回答の本当の意味を知るのはまだ先のことだと思いが、その点について今後ずっと考えていく際の指針を得られたように思う。柔軟性を持って自分のキャリアと向き合っていきたい。

- 自分達の研究を育んでいくのも教育だと考えたと研究も教育も境界はない。研究、教育と区別して考える必要はないんだなと思えたのは新鮮だった。自分の研究を伝えるのも、育むのも研究であり教育である。何だかすっきりした。研究と教育が育まれるのも育ちの過程と運動していて、その時の環境や自分の状態に左右されるというご意見が多かった。一歩ずつ考え進んでいけばおのずと重み付けがシフトしていくのだろうと思った。そのためにもリフレクションを今後も続けていきたい。タイムマネージメントは避けては通れないテーマである。何にどれだけ時間をかけるかは、見失いやすい。特に研究活動は終わりが無い営みのせいか、自分でオンオフのマネージメントが求められる。それぞれの価値観にもよるが、ワークライフバランスは大事にしていきたい。これからの時代背景にもよるだろう。学生であっても修羅場続きだが、修羅場があっても乗り越えていくうちに前に進む推進力になるというコメントを頂いた。修羅場続きで気持ちが減入ることも多い。先達の方々のコメントを大事にしたい。

5. 参加報告会および修了式への参加

参加者に、プログラム全体を通してのコメントのフィードバックをお願いします

2017年3月に予定されている参加報告会へご出席いただき、参加学生に対して、プログラム全体を通してのコメントをお願いします。

6. 先達教員活動についてのフィードバック

プログラム全体を通しての先達教員活動に関してご意見をお寄せください

海外の大学教員準備プログラムや、授業改善のための活動においては、先輩教員によるコンサルテーションが重要な役割を果たします。我が国では、組織的な活動としての取組みはまだ不十分です。この取組みを通じて、日本の大学にふさわしい活動のモデルを構築を目指しています。

プログラム終了後、高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センターに対して、先達教員の役割、活動体制等について、忌憚なきご意見をお寄せください。

お寄せいただきましたご意見をもとに、来年度以降のプログラム内容、先達教員活動の内容をさらにより良いものにするため、改善を図ります。

ISTU の活用

PPFP/NFP では、より充実したプログラムにするため、ISTU（東北大学インターネットスクール）を利用します。

ISTU とは、東北大学の全正規授業に標準対応した e ラーニングシステムです。東北大学に在籍する全ての学生、教職員が利用することができます。プログラムにおける利用方法は次の 2 点です。

- 動画の配信
- リフレクティブジャーナルの掲載

国内セミナーやワークショップは全て撮影をし、欠席した参加者のために配信をします。先達教員は、ISTU の動画を視聴することで、参加者がどのような活動をしたのかを確認することができます。

また、参加者のリフレクティブジャーナルや、配布資料などもアップしますので、参加者の経験や思考の様子を確認することができます。

最後に

PFFP/NFP における先進教員の役割, ISTU 等の利用に関するお問い合わせは下記までお寄せください。

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター

Email: tu-pffp@ihe.tohoku.ac.jp

TEL: 022-795-4471

FAX: 022-795-4749

東北大学
大学教員準備プログラム (PFFP)
新任教員プログラム (NFP)

先達教員ランチ懇親会
2015年7月9日

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター
教育関係共同利用拠点「知識基盤社会を担う専門教育指導力育成拠点
- 大学教員のキャリア成長を支える日本版SoTLの開発」

ランチ懇親会の流れ

- ご挨拶 (羽田貴史 大学教育支援センター長)
- 大学教員準備プログラム (PFFP) および 新任教員プログラム (NFP) の概要
- 先達教員のみなさまにお願いしたいこと
- 質疑応答
- 先達教員のみなさまから

目標

- 生涯にわたり専門性を高めるために、効果的な省察ができるようになること
- 大学教員の役割、仕事を理解し、展望を持ってキャリアを設計できること
- 教育活動に関する基礎的知識を身につけ、自分なりの言葉で教育観を語れるようになること
- 異分野の研究や教育文化を知ること

プログラムでの活動内容



PFFPとNFPは合同で実施

昨年度の参加者からの評価

- 模擬授業、先達コンサルは好評
- 目的・コンセプトの共有、パークレー研修の位置づけに関する昨年度の課題が解決
- リフレクティブ・ジャーナルの取組みに対する評価が向上

昨年度先達教員からの評価

- 内容はちょうどよい
- 交流の機会がもっとあってもよい
- 参加者のプロフィールやキャリアプラン、問題意識を事前に把握したい
- 先達教員も他の先達の授業を参観できると良い
- 他大のシラバスや授業も見れると良い
- 海外派遣の効果は高いので継続すべき
- コンサル時に質問が漠然としすぎていた

2015年度の課題

- ① 先達教員と参加者との交流、情報共有体制の強化
→交流の機会の拡充、プロフィールの共有
- ② 東北大学以外の授業参観の実現
→東北工業大学、立命館大学との連携を実現
- ③ OB/OGとの継続的な関係作り
→同窓会の実施、ファシリテーターとしての招聘
- ④ プログラムの全国公開
→他大学からの参加の受け入れ

今年プログラムの変更点

- プログラムの全国公開 (他大学からも参加可)
- プログラムのつまみ食い可能な「ショートコース」を新設 (セミナー+授業参観)
- 院生指導法セミナーを新設
- オプションを設定
- パークレー研修をオプションに
- 国内の他大学訪問調査を新設 (立命館)

2種類のコース

ショートコース

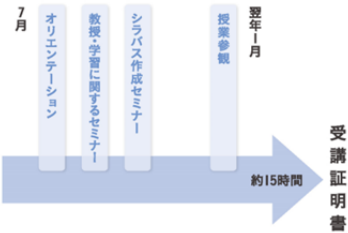
- ・まずは教育実践について学びたい方向け
- ・選抜なし（応募資格の確認あり）
- ・7月～翌年1月まで

フルコース

- ・大学教員の仕事について総合的に学びたい人向け
- ・書類選考・面接による参加者の選抜あり
- ・7月～翌年3月まで

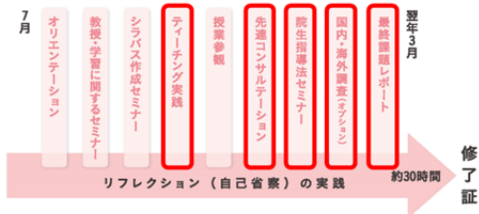
ショートコース

■まずは教育実践について学びたい方へ(ショートコース)



フルコース

■大学教員の仕事について総合的に学びたい方へ(フルコース)



フルコースの特徴

- ・オプションとして、国内・海外大学の調査訪問への参加応募資格
- ・経験豊富な先達教員によるコンサルテーションの機会
- ・マイクロティーチングなどの教育実践の機会
- ・院生指導法に関するセミナー
- ・リフレクションの実践とフィードバック

フルコースのみ

国内・海外他大学調査訪問

- ・比較の目を育てる
 - 授業参観，教員とのディスカッション
 - 学習支援組織の訪問と聞き取り
 - 研究者訪問
- ・希望調査のうえフルコース参加者から選抜
 - 国内他大学訪問調査：立命館大学（2泊3日）
 - 海外他大学訪問調査：パークレー（1週間）

実施スケジュール

活動	日程	ショート
オリエンテーション	7月18日（土）	○
シラバス作成ワークショップ	8月25日（火）	○
学習と教育の科学（セミナー）	9月10日（木）	○
授業づくり：準備と運営（セミナー）	9月16日（水）	○
授業を見る聞く学ぶ（授業参観）	10月～1月中	○
マイクロティーチング（授業実践）	10月	
院生指導法セミナー	12月3日（木）	
模擬授業（授業実践）	2月	
国内他大学調査訪問（2泊3日）	10月	
海外他大学調査訪問（1週間）	2月下旬～3月上旬	
先達コンサルテーション	3月	
参加報告会&修了証授与式	3月	

先達の皆さまにお願いしたいこと

1. オリエンテーションへの参加
2. 「授業を見る聞く学ぶ」における授業公開と授業後ディスカッション
3. 模擬授業におけるコメントのフィードバック
4. リフレクティブ・ジャーナルの確認と対面コンサルテーション
5. 参加報告会への参加
6. 先達教員としての活動に対するフィードバック

オリエンテーションへの参加について

【日時】2015年7月18日（土）10:00-17:30

【場所】川内北キャンパス 教育・学生総合支援センター 大会議室

- プログラムについては配布資料参照のこと
- 午前中の顔合わせにて自己紹介を実施
- 午前中～ランチ懇親会（13:00終了）までの参加でかまいません
- ランチ懇親会費用として800円をお納めください



「授業を見る聞く学ぶ」について

- 授業参観とディスカッションの実施
- 10月～翌年1月中に実施する授業が対象

- 後日、改めてご案内したおりに、公開いただける授業の日程をお教えください
- 授業公開とそれに引き続く30～60分のディスカッションが実施可能な日
 - 掲載授業以外にも、参観が可能な授業があれば、それについても合わせてお知らせください

【締切】2015年9月6日（日）

17

模擬授業におけるコメントについて

【日時】2016年2月中旬の週のいずれか1日

【場所】川内北キャンパス 講義棟を予定

- 参加者がそれぞれ20分の模擬授業を実践
- 上記に対し、コメントをフィードバック



18

ジャーナルの確認とコンサルについて

【日時】2016年3月上旬のいずれか1日

【場所】川内北キャンパス内のどこか

- 先達一人当たり4名の参加者と各20分ずつ（予定）
- 全体でのグループディスカッション



19

質疑応答



20



大学教員を目指す 大学院生・ポスドクの みなさん

将来、大学教員になるために知っておくべきことは、どんなことでしょうか。
東北大学 大学教員準備プログラム Tohoku U. PFFP で、
大学教員に求められる能力や知識、実践力を身につけませんか？

2016年度 東北大学大学教員準備プログラム

Tohoku University Preparing Future Faculty Program (Tohoku U. PFFP)



募集要項公開 2016年5月2日(月)
東北大学大学教育支援センター HPよりダウンロード
<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/pffp>

募集期間 2016年5月9日(月)～27日(金)

事前説明会を開催します

2016年4月28日(木) 16:00-17:30

- プログラムの概要
- 過去の参加者による体験談
- 質疑応答、など



川内
北キャンパス
川北合同研究棟 101
メイン会場



青葉記念会館 4階 401
テレビ会議にて同時中継



このプログラムには、大学教員の仕事を総合的に学ぶフルコース（30時間程度）と、教育実践を中心としたショートコース（15時間程度）があります。
すべての活動に参加・課題を提出した受講者には、修了証（フルコース）もしくは受講証明書（ショートコース）が授与されます。

【お問い合わせ先】

東北大学高度教養教育・学生支援機構
大学教育支援センター
〒980-8576 仙台市青葉区川内 41
TEL.022-795-4471 FAX.022-795-4749
E-mail : tu-pffp@ihe.tohoku.ac.jp

URL <http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/pffp>

f 「CPDtohoku」で検索

@CPD_tohoku





大学のこれからを担う フロントランナーに

大学教員の仕事は多岐にわたり、
新任教員は戸惑いや大きなストレスにさらされることが少なくありません。
東北大学 新任教員プログラム Tohoku U. NFP で、
大学教員に求められる能力や知識、実践力を身につけませんか？

2016年度 東北大学 新任教員プログラム Tohoku University New Faculty Program (Tohoku U. NFP)



募集要項公開 2016年5月2日(月)
東北大学大学教育支援センター HPよりダウンロード
<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/nfp>

募集期間 2016年5月9日(月)～27日(金)

事前説明会を開催します

2016年4月28日(木) 16:00-17:30

- プログラムの概要
- 過去の参加者による体験談
- 質疑応答、など



川北合同研究棟 101
メイン会場



青葉記念会館 4階 401
テレビ会議にて同時中継



このプログラムには、大学教員の仕事を総合的に学ぶフルコース（30時間程度）と、教育実践を中心としたショートコース（15時間程度）があります。
すべての活動に参加・課題を提出した受講者には、修了証（フルコース）もしくは受講証明書（ショートコース）が授与されます。

【お問い合わせ先】

東北大学高度教養教育・学生支援機構
大学教育支援センター
〒980-8576 仙台市青葉区川内 41
TEL.022-795-4471 FAX.022-795-4749
E-mail : tu-pffp@ihe.tohoku.ac.jp

URL <http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/nfp>

Facebook「CPDtohoku」で検索
Twitter @CPD_tohoku



Tohoku U. PFFP

Preparing Future Faculty Program

東北大学 大学教員準備プログラム

全国の
大学院生
(博士課程後期)
ポスドク
対象

将来、大学教員になるために
知っておくべきことは、どんなことでしょうか。
東北大学 大学教員準備プログラム
Tohoku U. PFFP で
大学教員に求められる能力や知識
実践力を身につけませんか？

**東北大学のみならず、
全国の大学院生が参加しています。**

これまでの参加大学一覧：
岩手大学、熊本大学、東北工業大学、東北学院大学、
仙台白百合大学、いわき明星大学、東日本国際大学、
理化学研究所、(株)内田洋行

大学教員を目指す 大学院生・ポスドクの みなさんへ



先進教員の声



参加者と接していると、彼らが教育活動に対して真摯に向き合い、様々なことを考え、悩み、自分自身を向上させてようとしていることがよくわかります。教員になる前やなりたての時期に、このような経験ができるのは本当に幸せですね。さあ、あなたも大学教員への扉を開いてみませんか。

東北大学
災害科学国際研究所 教授
邑本 俊亮先生

本プログラムでは、複数の教員から様々なコメントやアドバイスをもらえます。異なる専門分野の参加者やOBとの交流もきつといい刺激になるでしょう。大学教員を目指す人、教員になつたばかりの人に、意欲と自信を持たせてくれるプログラムです。

東北大学
高度教養教育・学生支援機構 教授
佐藤 勢紀子先生



基礎知識を得る

実践力を磨く

比較の目を育てる

同僚とつながる

先達から学ぶ

仕事を理解する

自己省察力を養う

今まで研究のことが考えてこなかったけど、幅広い教員生活をやっていたら不安...こんな悩みに向き合う機会をくれたのがPFFPでした。同世代の若手研究者や多くの先進教員との交流を通じて、大学教員の役割をじっくり考えることが出来ました。

東海大学
課程資格教育センター
助教
斉藤 仁一朗
(2013年度受講)



PFFPは、大学教育や研究のあり方について、具体的かつ実践的に考えさせてくれる場所でした。大学教員を目指す若手研究者や学生にとって、貴重な試行錯誤の機会だと思います。将来を見据えることで、現在の立ち位置や研究についても見つめ直すことができました。

東北大学 文学研究科 D3
山田 今日子(2013年度受講)

参加者の声

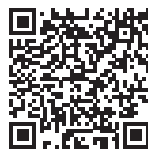
将来の大学教員として必要な知識や経験を得るだけではなく、異分野の熱意ある若手研究者や先進教員たちとの交流を通して自身の教育観について考えることができました。これまで抱いていた教員として働くことへの不安を和らげてくれた非常に貴重な機会でした。

湖北短期大学
総合マネジメント・情報学科
専任講師
熊谷 摩耶
(2014年度受講)



本プログラムで得たものは、教育の理論やその実践方法だけではありませんでした。濃密な時間を過ごしたメンバーとのつながりは、研究分野を超えたものであり、私の一生の財産です。

東北大学 薬学研究科 助教
笹野 裕介(2011年度受講)



【お問い合わせ先】
東北大学高度教養教育・学生支援機構
大学教育支援センター
〒980-8576 仙台市青葉区川内 41
TEL.022-795-4471 FAX.022-795-4749
E-mail : tu-pffp@ihe.tohoku.ac.jp
HP <http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/pffp/>
「CPDtohoku」で検索
@CPD_tohoku

大学教員準備プログラム

未来の同僚や経験豊富な先達教員との対話、様々な大学から集まった大学院生たちが活動することで、大学教員としての自分、教育観、大学教育を考える視野を身につけます。



仕事を理解する

大学教員の役割や専門性について学びます

基礎知識を得る

授業設計、運営に必要な理論を学びます

先達から学ぶ

経験豊かな先輩教員が「先達」として皆さんの成長を応援します

比較の目を育てる

異分野の研究・教育文化に触れ、比較の視点を養います

同僚とつながる

人的ネットワークを育み、組織の一員としての大学教員について考えます

実践力を磨く

授業実践に対するフィードバックを得て、自信をつけます

自己省察力を養う

リフレクション(省察)により、自身の実践結果をふり返る力を身につけます

他大学訪問調査(オプション)

他大学の授業参観、教員とのディスカッションにより、多様な大学の在り方などについて理解を深めます。参加者は希望調査のうえ、選抜により決定します(2泊3日) 予定 ※渡航・宿泊費は東北大学高度教養教育・学生支援機構が負担します



7月

オリエンテーション

教授・学習に関するセミナー

シラバス作成セミナー

ティーチング実践

授業参観

院生指導法セミナー

他大学訪問(オプション)

最終課題レポート

翌年3月

修了証

約30時間

リフレクション(自己省察)の実践

Tohoku U. PFFP Preparing Future Faculty Program

全国の
新任教員
対象

大学の これからを担う フロンタランナーに。

大学教員の仕事は多岐にわたり
新任教員は戸惑いや大きなストレスに
さらされることが少なくありません。
東北大学 新任教員プログラム
Tohoku U. NFP で
大学教員に求められる能力や知識
実践力を身につけませんか？

**東北大学のみならず、
全国の新任教員が参加しています。**

これまでの参加大学一覧：
岩手大学、熊本大学、東北工業大学、東北学院大学、
仙台白百合大学、いわき明星大学、東日本国際大学、
理化学研究所、(株)内田洋行



本プログラムでは、複数の教員から様々なコメントやアポイントがもらえます。異なる専門分野の参加者やOBとの交流もきつといい刺激になるでしょう。大学教員を目指す人、教員になつたばかりの人に、意欲と自信を持たせてくれるプログラムです。

東北大学
高度教養教育・学生支援機構 教授
佐藤 勢紀子先生



参加者と接していると、彼らが教育活動に対して真摯に向き合い、様々なことを考え、悩み、自分自身を向上させようとしていることがよくわかります。教員になる前やなりたての時期に、このような経験ができるのは本当に幸せですね。さあ、あなたも大学教員への扉を開いてみませんか。

東北大学
災害科学国際研究所 教授
邑本 俊亮先生

先進教員の声

参加者の声

このプログラムから得たものは、授業を行うためのスキルだけではなく、異分野の教員との交流やリアルタイム・チャットを通じて、自分の教育のあり方を見直し、自分つめなおす機会を得たことが、私にとっても大きな財産になりました。

東北大学 文学研究科 准教授
永吉 希久子 (2011年度受講)

他分野の若手教員に加え、経験豊富な先進教員と一緒に学んだ経験は、非常に有意義でした。また、授業の仕方、設計法のポイントを実践的に学ぶことで、教育に対する漠然とした不安から解放されました。お陰で、以前より教育・研究の両方に前向きに取り組んでいるように感じています。

東北医科薬科大学 大学教養教育センター
法学教室 講師
佐俣 紀仁 (2012年度受講)

Want to know more about what a university faculty member is expected to do? Want to hear and share advice on career in university? Want to develop your skills in curriculum/syllabus design, teaching and supervising? Want to make friends with new and experienced colleagues on campus? NFP is here for you.

東北大学 教育学研究科 特任講師(教育)
陳 思聡 (2014年度受講)

教育経験ゼロであった私は、このプログラムを通して、講義のあり方を1から10まで学ぶことができました。加えて、教育者として、そして研究者として、これからの大学教員に求められていることについて議論できる、多くの仲間にも出会うことができました。

東北大学 農学研究科 准教授
野地 智法 (2013年度受講)



【お問い合わせ先】
東北大学高度教養教育・学生支援機構
大学教育支援センター
〒980-8576 仙台市青葉区川内 41
TEL.022-795-4471 FAX.022-795-4749
E-mail : tu-pfep@ihe.tohoku.ac.jp
HP <http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/nfp/>
「CPDtohoku」で検索
@CPD_tohoku



東北大学 新任教員プログラム

同僚や経験豊富な先輩教員との対話を通じて
大学教員としての自分、教育観、
大学教育を考える視野を身につけます。



仕事を理解する

大学教員の役割や専門性について
学びます

基礎知識を得る

授業設計、運営に必要な理論を
学びます

先輩から学ぶ

経験豊かな先輩教員が「先輩」として
皆さんの成長を応援します

比較の目を育てる

異分野の研究・教育文化に触れ、
比較の視点を養います

同僚とつながる

人的ネットワークを育み、組織の一員
としての大学教員について考えます

実践力を磨く

授業実践に対するフィードバックを
得て、自信をつけます

自己省察力を養う

リフレクション(省察)により、自身の実践
結果をふり返る力を身につけます

他大学訪問調査(オプション)

他大学の授業参観、教員とのディスカッションにより、多様な大学の在り方などに
ついて理解を深めます。参加者は希望調査のうえ、選抜により決定します
(2泊3日) 予定 ※旅費・宿泊費は東北大学高度教養教育・学生支援機構が負担します



Tohoku U. NFP
New
Faculty Program

PPFP プログラム進行状況

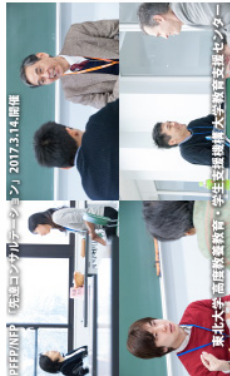
Progress of the Program



3/23 (木) PFFP/NFP成果報告会を開催しました

PPFP 2017年3月31日(金)

2016年度のPFFP/NFPの成果報告会、および修了証授与式を行いました。成果報告会にはフルコース参加者の他に、ショートコース参加者、OB/OG、先輩教員のみ…詳細はこちら



3/14 (火) 「先達コンサルテーション」を開催しました

PPFP 2017年3月22日(水)

フルコースプログラムの最後のコンテンツである「先達コンサルテーション」では、プログラムを通して明らかにした疑問や問いを直接先達の先生方にぶつけて議論します。各参…



2/26(日)-3/5(日) PFFP/NFP 「海外他大学訪問調査」を実施しました

PPFP 2017年3月21日(火)

フルコースのオプションである「海外他大学訪問調査」では、6名の参加者とともに、米国カリフォルニア大学バークレー校を訪問しました。現地での教授・学習の考え方、大…



2/22 (水) PFFP/NFP 「海外他大学訪問調査 事前研修」を実施しました

PPFP 2017年3月8日(水)

フルコース参加者のうち、オプションである「海外他大学訪問調査」として米国カリフォルニア大学バークレー校を訪問する参加者向けに「事前研修」を実施しました。まず羽…



2/17 (金) PFFP/NFP 「模擬授業」を実施しました

PPFP 2017年2月20日(月)

フルコース参加者による「模擬授業」を実施しました。11月に実施したマイクロティーチングでの経験をふり返り、さらなる工夫と改善を行い、17分間の模擬授業として実践…



12/9 (金) PFFP/NFP 「コーチング技能を活用した院生指導」を開催しました

PPFP 2016年12月16日(金)

大学院生の指導について考えるセミナー「コーチング技能を活用した院生指導」を開催しました。大学教員の仕事には、学生の問題解決力を育成することも含まれます。そのため…



11/15 (火) PFFP/NFP 「マイクロティーチングセミナー」を開催しました

PPFP 2016年11月21日(月)

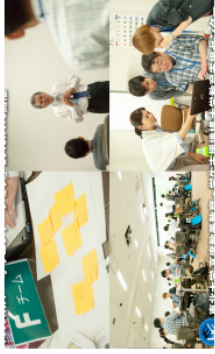
フルコースプログラムのハイライトのひとつ、「マイクロティーチングセミナー」を開催しました。ひとりひとりの参加者が自分の担当する(であろう)授業を設計し、そのうち…



10/26 (水) -28 (金) 「国内他大学訪問調査」を実施しました

PFFP 2016年11月2日(水)

フルコースプログラムのオプションとして国内他大学訪問調査を実施しました。自身の置かれている環境や、その特徴を理解するためには、多様な具体例を知り、それと相対化し…
詳細はこちら >>



オリエンテーションを開催しました

PFFP 2016年7月25日(月)

2016年度プログラムのオリエンテーションを開催しました。今年度は、NFP（新任教員プログラム）とあわせて、総勢29名の参加者の皆さんが揃います。プログラムの初…
詳細はこちら >>



10/14 (金) PDP/PFFP/NFP「本当の向きとは何か—感情知性と大学教育—」を開催しました

PFFP 2016年10月18日(火)

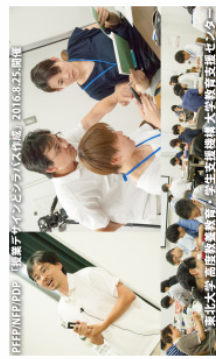
2016年度の3つ目のセミナーは、京都女子大学教授 福田裕司先生による「本当の向きとは何か—感情知性と大学教育—」でした。本セミナーも、PDセミナーとして…
詳細はこちら >>



9/14 (水) セミナー「授業づくり：準備と運営」を開催しました

PFFP 2016年9月14日(水)

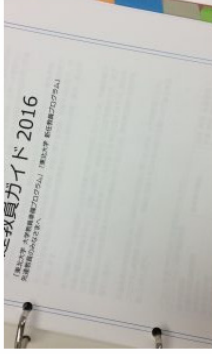
2016年度プログラムにおけるセミナーの2つ目は、東北大学 災害科学国際研究所の邑本俊亮教授による「授業づくり：準備と運営」でした。このセミナーはPDセミナーと…
詳細はこちら >>



8/25 (木) セミナー「授業デザインとシラバス作成」を開催しました

PFFP 2016年8月26日(金)

2016年度プログラムにおけるひとつめのセミナーは東北大学 高度教養教育・学生支援機構 の串本 剛准教授による「授業デザインとシラバス作成」でした。このセミナー…
詳細はこちら >>



先達ランチョン懇親会を開催しました

PFFP 2016年7月14日(木)

先達教員らと昼食を囲みながら今年度のプログラムに関する説明を方針を議論しました。2016年度からはお二人の新しい先達教員をお迎えします。ご期待ください！



2016年度PFFP参加者募集CM (ロングバージョン) を公開しました

PFFP 2016年5月19日(木)

Tohoku U. PFFP/NFP 2016年度参加者募集CMのロングバージョン (4分) を公開しました。4月28日に行われたプログラム事前説明会における参観…
詳細はこちら >>



2016年度PFFP/NFPの説明会動画を公開しました

PFFP 2016年5月13日(金)

2016年4月28日 (木) に開催したPFFP/NFPプログラム事前説明会の動画を公開しました。当日お越しになれなかった方はぜひご覧下さい。こちらからどうぞ…
詳細はこちら >>



2016年度プログラム説明会を開催しました

PFFP 2016年4月28日(木)

2016年4月28日(木)に開催した東北大学PFFP/NFPのプログラム説明会には、学内外から多くの方にご参加いただきました！ありがとうございます！


東北大学
大学教員準備プログラム (PFFP)
新任教員プログラム (NFP)

事前説明会
2016年4月28日(木)

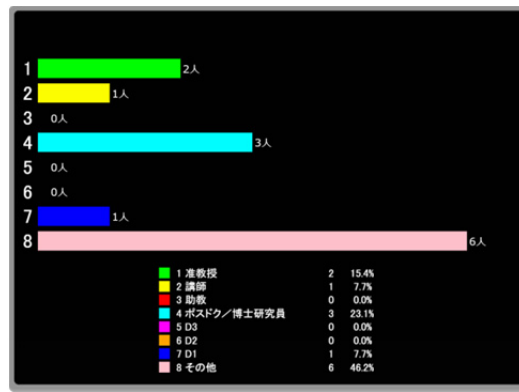

 東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター

説明会の流れ

- 本プログラムの開発の背景
- プログラムの概要
- 選考の流れ
- 過去の参加者による体験談
- 質疑応答

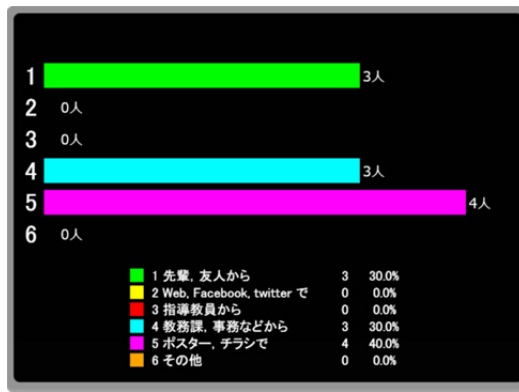
みなさんは？

1. 准教授
2. 講師
3. 助教
4. ポスドク/博士研究員
5. D3
6. D2
7. D1
8. その他



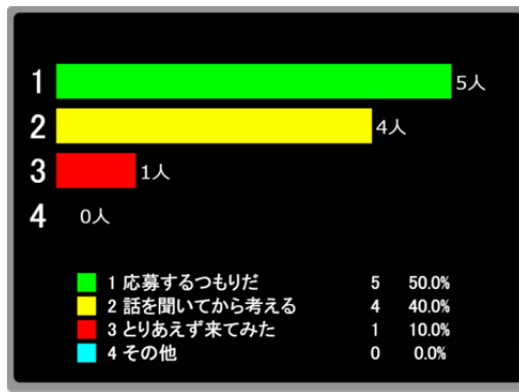
何で知りましたか？

1. 先輩, 友人から
2. Web, Facebook, twitter で
3. 指導教員から
4. 教務課, 事務などから
5. ポスター, チラシで
6. その他



応募の予定について

1. 応募するつもりだ
2. 話を聞いてから考える
3. とりあえず来てみた
4. その他



私たちについて

- 高度教養教育・学生支援機構(Institute for Excellence in Higher Education, IEHE)
 - 教養教育の高度化, 学生支援に関する調査研究, 企画および提言, それらの方法の開発, 実施に取り組む組織
 - 4つの部門と11のセンターから成る
- 大学教育支援センター(Center for Professional Development, CPD)
 - 教育関係共同利用拠点として大学教職員専門性開発に関する調査研究, プログラム開発, 実施するために設立

プログラム開発の背景

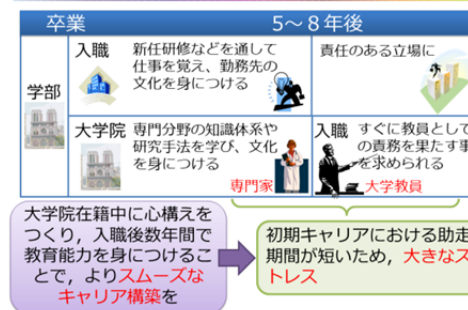
大学教員の役割



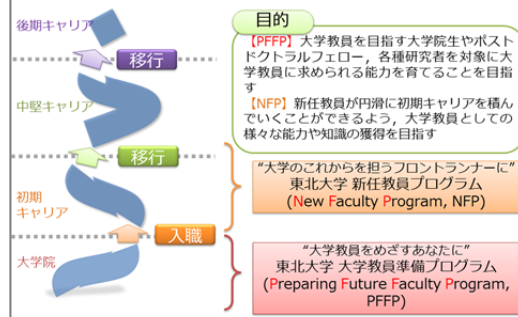
大学教員に求められる能力

- 概念の理解
 - 高等教育の目的と歴史/高等教育機関のタイプと使命/専門分野の知識/専門職アイデンティティの理解
 - 教員の仕事の分野の知識とスキル
 - 教育と学習プロセスの理解/研究プロセスの理解/業務とサービスの理解/組織における市民性の正しい理解
 - 人間関係のスキル
 - コミュニケーションスキル/チームワークと連携/多様性の理解
 - 専門職の態度と気質
 - 倫理と誠実性/生涯学習のモチベーション/専門的ネットワークの育成/生活におけるバランスを維持する情熱の育成
- (Austin & McDaniel 2006)

大学教員初期キャリアの特殊性



プログラムの位置づけ



海外のPFFP

- ◆ アメリカ
 - 1993年から全米大学協会 (AACU)と大学院協会 (CGS)がPreparing Future Faculty Programをスタート, 学会も協力し, 11分野44大学で認定プログラム提供, 300以上の大学が連携
- ◆ イギリス
 - 2006年以降, 仮採用の新任教員に, 高等教育資格課程 (Postgraduate Certificate in Higher Education, PGCHE)の取得を正規採用条件, SEDAが認定した院生向けプログラムを17大学で実施
- ◆ カナダ
 - 大学院で大学教育に必要な知識・技能修得のコースを設け, 資格付与, 採用時には受講者を優先
- ◆ オーストラリア
 - 26大学で大学院での資格認定プログラムを実施し, 大学院生も履修

日本におけるPFFPの例

名称	年度	形式	内容
北海道大学	2010-	5日間 (15講座)の集中講義	UC/(クレー)の教員による英語でのワークショップ
筑波大学	2013-	大学院共通科目	キャリアデザイン論, クラウドライティング入門など
東京大学	2013-	半期, 大学院共通科目として2単位認定	「大学教育開発論」とブレノネットワークワークショップ
名古屋大学	2005-	3日間の集中講義, 大学院共通科目	大学教員という職業, 授業設計, 教授法の基礎など
京都大学	2005-	毎年8月上旬に丸一日のワークショップ	大学授業の現在と未来 (講義), 演劇でコミュニケーションデザイン
立命館大学	2011-	オンデマンド講義+ワークショップ (2日間)	教育方法論, 授業設計, マイクロティーチング, ルーブリック評価等
大阪大学	2014-	大学院高度副プログラムとしてそれぞれ2単位	大学授業開発論, 学術的文献の作法とその指導, 現代キャリアデザイン特論

TOHOKU U. PFFP/NFPの概要

Tohoku U. PFFP/NFPの目的

- ◆ 大学教員に必要な能力や知識を獲得し、円滑に初期キャリアを積んでいくことができるよう大学教授職への準備を図る
- ◆ 他分野の参加者と交流し、将来や現在の同僚について知るとともに、大学における多様性を体験する

提供者側の意図

- “視点”の提供
 - > 大学教授職としての視点
 - > 大学組織としての視点
 - > キャリアステージという視点
 - > 比較の視点
- “場”の提供
 - > 異文化交流の場
 - > 教育実践の場
- “言語化”の支援

“視点”と“場”を提供し、各参加者が“大学教授職”に対する“姿勢”を作り“言語化”することを支援する

達成目標

- ・ 生涯にわたり専門性を高めるために、効果的な省察ができるようになる
- ・ 大学教員の役割、仕事を理解し、展望を持ってキャリア構築を設計できる
- ・ 教育活動に関する基礎的知識を身につけ、自分なりの言葉で教育観を語れるようになる
- ・ 異分野の研究や教育文化を知る

PFFP/NFPでは、知識の提供と、実践の場を提供することで、みなさんの目標達成を支援します

プログラムでの活動内容



PFFPとNFPは合同で実施

2種類のコース

ショートコース

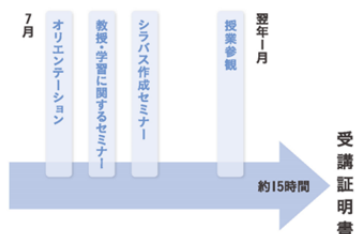
- ・ まずは教育実践について学びたい方向け
- ・ 選抜なし（応募資格の確認あり）
- ・ 7月～翌年1月まで

フルコース

- ・ 大学教員の仕事について総合的に学びたい人向け
- ・ 書類選考・面接による参加者の選抜あり
- ・ 7月～翌年3月まで

ショートコース

■ まずは教育実践について学びたい方へ(ショートコース)



フルコース

■ 大学教員の仕事について総合的に学びたい方へ(フルコース)



フルコースの特徴

- ・ オプションとして、国内・海外大学の調査訪問への参加応募資格
- ・ 経験豊富な先達教員によるコンサルテーションの機会
- ・ マイクロティーチングなどの教育実践の機会
- ・ 院生指導法に関するセミナー
- ・ リフレクションの実践とフィードバック

仕事を理解する

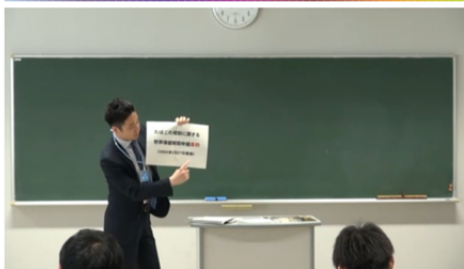


シラバス作成ワークショップ



フルコースのみ

授業実践/授業参観



他の参加者との交流



フルコースのみ

先達コンサルテーション



フルコースのみ

リフレクション



実施スケジュール

活動	日程	シヨート
オリエンテーション	7月16日(土)	○
シラバス作成ワークショップ	8月25日(木)	○
授業づくり: 準備と運営(セミナー)	9月14日(木)	○
本当のかしこさとは何か(セミナー)	10月14日(金)	○
授業を見る聞く学ぶ(授業参観)	7月-1月中	○
マイクロティーチング(授業実践)	11月	
模擬授業(授業実践)	2月	
国内他大学調査訪問(2泊3日)	10月予定	
研究指導法に関するセミナー	12月予定	
海外他大学調査訪問(1週間)	2月下旬~3月上旬	
先達コンサルテーション	3月	
参加報告会&修了証授与式	3月	

フルコースのみ

国内・海外他大学調査訪問

- 比較の目を育てる
 - 授業参観, 教員とのディスカッション
 - 学習支援組織の訪問と聞き取り
 - 研究者訪問
- 希望調査のうえフルコース参加者から選抜
 - 国内他大学訪問調査(2泊3日)
 - 海外他大学訪問調査(1週間) ※使用言語は英語

フルコースのみ 過去の訪問調査の様子

現地大学の講師によるセミナー
ディスカッションの様子
キャンパスの様子
Student Learning Centerの見学

プログラムの修了要件

- すべての活動に参加をすること（欠席の場合の対処法については担当者の指示にしたがう）
- すべての課題に取り組むこと

注意！
修了要件を満たすと評価された場合に高度教養教育・学生支援機構より修了証を発行します
また、活動への参加が不十分な場合、他大学訪問調査などのオプションの活動への参加はできません。

フルコースのみ 最終レポート課題

- プログラムの最後に提出するレポート（4,000字程度）
 - ▷ 大学院生向け
 - 学生にとって大学でのよい学習経験とはどのようなものだと思いますか。また、そういった学習経験を実現するために大学や大学教員は何をすべきだと思いますか
 - ▷ 新任教員向け
 - 自分の授業や学生指導において、その質を高める（よりよいものにする）ための課題は何だと思いますか。また、教員個人の立場から、東北大学の教育はどうあるべきだと思いますか

応募方法と選考の流れ

応募資格

[PFFP]
大学教員志望の大学院博士課程後期学生、日本学術振興会特別研究員、専門研究員など。高等教育機関（大学・短大・高専）の非常勤教員やTAなどの教育経験を有する者が望ましい。国籍は問わない

[NFP]
現在大学に勤務する平成22年4月以降採用の教員（概ね40歳以下）。本務の傍ら、東北大学川内北キャンパスで実施されるセミナーやワークショップに不都合なく参加できる者。国籍は問わない

フルコースの応募・選考方法

- 書類審査
- 面接（30分程度）

提出書類は大学教育支援センターHPからダウンロード
<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/>

PFFPはこちら
NFPはこちら

ショートコースの応募方法

- ウェブでエントリー受付

エントリーは大学教育支援センターHPから
<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/>

PFFPはこちら
NFPはこちら

フルコースの選抜結果通知までのスケジュール

募集期間	5月1日（金）～5月29日（金）17時必着
面接	6月上旬～中旬
結果通知	6月末

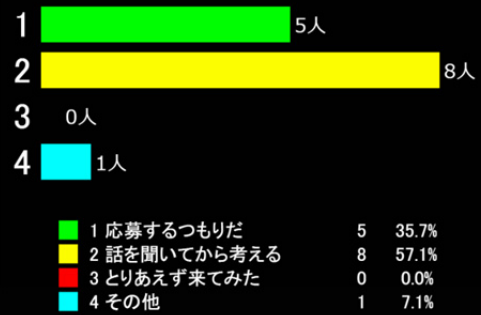
質疑応答



参加者体験談

応募の予定について

1. フルコースに応募する
2. ショートコースに応募する
3. ちょっと考えたい
4. 応募はしない



オリエンテーション「PFFP/NFP へようこそ」

【日時】2016年7月16日(土) 10:00~17:30

【会場】東北大学 川内北キャンパス 教育・学生総合支援センター東棟 4階 大会議室

【概要】2016年度のプログラム参加者の顔合わせを行うとともに、大学教育の課題と大学教員の役割に関する講義の受講、比較教育学の視点を組み入れたワークショップの実施を通して、本プログラムに対する理解を深めた。また、先達教員らとともに昼食をとり、交流を図った。2015年の実践から、講義と参加者紹介の順序を逆にし、昼食時の交流の活性化につながるよう工夫した。

【タイムテーブル】

10:00-10:10	はじめに
10:10-10:40	社会の中の大学教員 大学教育支援センター長 羽田 貴史 教授
10:40-11:00	質疑応答
11:00-11:10	休憩
11:10-12:00	参加者自己紹介・他己紹介セッション
12:00-12:30	先達教員自己紹介(含むビデオメッセージ)
12:30-13:30	ランチ懇親会
13:30-16:00	比較の目を育てるワークショップ 大学教育支援センター 杉本 和弘 教授
16:00-16:10	休憩
16:10-17:00	配布資料の活用法と課題の確認
17:00-17:30	誓約書, 今後の日程について(質疑応答含む)

【講演資料】(抜粋)

プログラム提供者の意図

- 「視点」の提供
 - 大学教授職としての視点
 - 大学組織としての視点
 - キャリアステージという視点
 - 比較の視点
- 「場」の提供
 - 異文化交流の場
 - 教育実践の場
- 「言語化」の支援

視点と場を提供し、各参加者が大学教授職に対する姿勢を作り言語化することを支援する

プログラムでの活動内容

顔合わせ

1. 大学教員とはどのような職業か

- ✓ 伝統的な専門職の1つ: 医師、法曹職、大学教授職
- ✓ 専門職の定義: 高度な専門的技術、資格、専門倫理、結社性、自律性
- ✓ 医師、法曹職との違い: 自営できない⇒組織に雇用されて専門性を発揮
- ✓ 多様な仕事の価値を理解し活動する統合的専門職(マルチ専門職)
 - Research 研究 ○Teaching 授業 ○Learning 学習指導 ○Advising 助言
 - Institutional Citizenship 大学運営 ○Outreach 社会に広げる
 - Professional service responsibility 専門家として貢献

* A. E. Austin (2008) "Strategies for Preparing Integrated Faculty: The center for the integration of Research, Teaching and Learning."

17. それでもやっぱり大学教員は楽しい

- ✓ 発見の喜び
 - 世界はこうなっていた 自分が初めて知る 人にも伝えたい
 - 新たな知見がもたらす「違って見える世界」
 - 世の中の役に立てばさらに幸い(誘惑も多い) 人の役に立つ=自己発見
- ✓ 学生の成長を見る喜び
 - ダメなやつと思っていた人間の姿容 人間の可能性を知る
 - 人間は人間によってのみ育てられる
- ✓ 自己決定・自己統治・他人に支配されない
 - すべてが自己責任 果実も大きい...
 - 人生を自己設計する味わい

アイズブレイク 「専門分野の違い」を探る

◆ワーク: 3つの観点で、メンバーの専門分野を比較する

最も特徴的なことを1~2点書き出す

- 1 学びの体系性: 学年ごとに学ぶべき知識が明確な積み上げ型
- 2 知の創出方法: 実験によるデータ収集とその分析
- 3 教員と学生の関係: 研究室の中に強いヒエラルキー

「比較の目」とは何か

- ◆「軸」に自覚的になる
 - 自分の立ち位置はどこか
- ◆虚心坦懐に眺める
 - 常に「唯一解」を求めようとする態度
- ◆ホリスティックな視野を確保する
 - 文脈や諸変数への配慮

ワークショップ 「世界における日本の大学」を考える

【課題】

インターネット上に設置された「質問箱」に質問が来たと仮定します。配布されたデータ等を使いながら、相談者が納得できる、創意工夫に溢れた回答を一つ作成してください。

【当日の様子】



他己紹介の様子



先達を囲んでのランチ



ワークショップに取り組む参加者

【参加者の声】（抜粋）

- 大学教員とはどのような職業について、羽田先生の経験を聞くことで具体的なイメージを持つことができました。一般的に大学の先生の仕事を訪ねると、「私の専門は〇〇〇」と専門分野を答えることが多いですが、羽田先生が学問や研究だけが大学の仕事ではなく、組織マネジメントや学生への教育なども大学の仕事であるとおっしゃっていたのが印象的で、改めて大学の仕事の多様性に気づくことができました。また、大学の仕事は医師や法曹職と異なり、自営することができず、組織に雇用されて専門性を発揮するものであるということ学びました。大学教員は多様な能力が求められるため、今回のPFFPの研修では大学教員の概念の理解はもちろんのこと、先達教員や研修をともに行う方のスキル等も学び多様性を理解し、人間関係を構築していきたいと考えております。(PFFP/フル)
- 羽田先生からは「大学教員の役割とキャリア・ステージ」というタイトルで講義があった。「対人関係に優れていると学生に学ぶ気持ちを起こさせるような温かく近い関係を学生と結ぶことができる」ことや、若いうちにアカデミックスキルを身体化すること、教員経験8年、約38歳で1人前感を持つという調査結果、天下の東京大学でも採用が増えた1000人は任期付き教員であることをお聞きした。今回のオリエンテーションで参加メンバーの他己紹介を聞き、若い人の学歴、経歴のまぶしさと併せて、聞けば聞くほど、自分が転向するのは難しいのではないかと、不利なことだと、意気消沈した。言葉尻はきついし、アカデミックスキルがそれほど身に付いているとも思えない。私は家族を養わなくてはならないので、任期付きなどという不安定な職に就くわけにもいかない。しかし、これらの不安はこれまで漠然と感じていたものであり、それが、羽田先生により、データとして示されたことで、現実を直視する機会を得たとも言える。つまりは、そこに近づいていくのかどうか、という自分自身の問題に立ち返ったのである。(PFFP/ショート)
- NFPプログラムへの採用が決まってから、心待ちにしていた初日を、とても緊張した気持ちで迎えた。このプログラムへの参加を決めた一番の理由は、新任教員としてのいろいろな経験や悩みを共有し合い、刺激し合い、支え合える仲間を見つけることだった。そのような出会いがあることへの期待の一方で、濃密な時間を共有することになるだけに、もし合わなかったら、ついていけなかったら、馴染めなかったら、という不安も大きなものだった。開始前にグループ内で会話が起ころことはなく、その不安はさらに大きくなっていったが、自己紹介、他己紹介をきっかけに、一度場の空気が緩むと、その後、抱えていた不安は消え、今後への期待が大きくなっていった。わずか数分の自己紹介、他己紹介の中で、お互いに小さな共通点を見つけ出すことができたことが、役立っていたように思う。また、メンバーそれぞれが異なる専門分野を持っていることはもちろんだが、それだけでなく、これまでの社会経験、文化的背景、教育に関する経験などが非常にバラエティに富んでいることがわかった。特に大学以外での教育に携わった経験、教育現場以外での職務経験、海外での職務経験、育児等の私生活と仕事との両立経験などは、自分にはないもので、多様な新しい視点を得られるように感じた。一方で、100名以上の学生を対象とした講義の経験や、実習指導といった経験は、自身の特色として、他のメンバーに共有できるものであるとも思った。今後、そうした互いの強みをシェアし合うことで、ひとりでは得られないいろいろな気づきを得たり、自分の引き出しを広げたり、困った場面での対処方法を増やしたりしていくことができれば、非常に有益だと感じた。昼食の際には、学生から意見が出ない際にどうしたら良いか、学生のモチベーションを高めるにはどうしたら良いか、という質問が出て意見交換がなされた。他のメンバーの工夫点は大変参考になるものであった。特に、意見が出ない時にはまず少人数のグループでディスカッションをしてもらい、その内容を発表するようにする、というのは、すぐに取り入れることができそうだと感じた。ただ、この際、せっかく先達教員の方がいてくださったのに、遠慮の気持ちなどもあり、ご意見を伺うことができなかったことが、もったいなかったと思った。同世代でのディスカッションは、身近な意見が得られて参考になると同時に、やはり経験の少なさという弱点があるため、今後同じような機会があれば、もっと積極的に先達教員のご経験を伺得るようにしたいと思った。(NFP/フル)

基礎知識を得る「大学の授業を設計する—授業デザインとシラバス作成」

【日時】2016年8月25日（木）13:00～17:00

【会場】東北大学 川内北キャンパス 教育・学生総合支援センター東棟4階 大会議室

【概要】大学の授業における目標・活動・評価について、事前に参加者が作成したシラバスを改善することを通して考えた。本セミナーは、拠点事業によるPDセミナーとの合同開催とし、プログラム参加者以外の一般申込による応募者も参加した。

【タイムテーブル】

13:00～13:05	開会あいさつ 羽田 貴史（大学教育支援センター長 羽田 貴史 教授）
13:05～16:55	授業デザインとシラバス作成に関する解説 各自のシラバスを使った演習 ルーブリックの役割と使用例 まとめ 串本 剛（東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授）
16:55～17:00	閉会あいさつ 今野 文子（東北大学高度教養教育・学生支援機構 講師）

【セミナー資料】（抜粋）

<p>1-2. シラバスの役割</p> <p>学生にとって</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業内容の確認：期待できる事と期待される事を自覚 学習計画の参考：必要な学習量の予測と調整 <p>授業担当教員にとって</p> <ul style="list-style-type: none"> 学生との関係作り：教育観を伝え不幸な出会いを回避 授業設計の具体化：実施を容易にし、改善を促す <p>その他の人々にとって</p> <ul style="list-style-type: none"> 教育内容／水準の理解：課程改善や単位互換で活用 	<p>1-3. 授業デザインの3要素</p> <p>どの順番で設計しますか？</p>	<p>2-1. 授業の目標</p> <ul style="list-style-type: none"> 最低限の“意図する学修成果”を記述する 「教員が何をするか」ではない！ 知識の修得に偏らない目標を設定する 知識・理解／能力・技能／関心・態度 ref. 参考② 目標の妥当性を検証する 状況的要因、教育課程の目的、社会の期待 ref. 参考③ →個別授業における領域の網羅が致命ではない
<p>2-2. 演習①</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業デザインワークシート 個人作業：①いま使っているシラバスに基づき、学修成果の領域別に3つの到達目標を記述し、対応する教育課程全体の目的を選択する。 ②全ての領域と目的を網羅する必要はないが、既存の到達目標を整理し、複数の領域をカバーする。 グループで共有：自分の内容を紹介し、複数の領域をカバーできない場合に助言し合う 全体で疑問点を共有 	<p>3-2. 演習②</p> <ul style="list-style-type: none"> 個人作業1：①目標の重要度に応じて合計配点を決め、その分の学修成果を把握する方法を選択する。②ひとつの目標に対して複数の方法を用いる場合は、内訳を考える。 個人作業2：ルーブリック作成ワークシートを使って、学習成果BもしくはCに対応する課題について、ルーブリックを作成する。 グループで共有：フィードバックの仕方を含めて成績評価方法を紹介し、ルーブリックの出来について検討し合う 全体で疑問点を共有 	<p>5-1. シラバスの修正</p> <ul style="list-style-type: none"> 修正点確認票 個人作業：ここまで学んだ内容を受けて、事前提出したシラバスで想定していた授業設計を修正した点、およびその理由を記入する（修正のない部分は「変更なし」で可） グループで共有：どこをなぜ変更したかについて紹介しあう 全体で疑問点を共有

【当日の様子】



講師の串本准教授



直接アドバイスをもらう参加者



ワークに取り組む参加者

【参加者の声】(抜粋)

- 串本先生から教えていただいた「目標→成績評価方法→内容という順番で書き、目標には最低限の意図する学習成果を記述する」というシラバスの書き方は新鮮だった。とくに、事前課題でシラバス作成をしたときは、授業内容から書きはじめ、授業目標に関しては、「授業を完全に習得した状態の理想の学生が達成している目標」を念頭に漠然と書いていただけだったので、「単位を取った水準の学生が最低限習得しておくべき授業目標」という、シラバスにおける授業目標の意義が明確になったのは非常に勉強になった。ただし(とくに必須科目では)ある一定数の学生に単位を取らせないといけないことが現実的に起こりうるので、「最低限の目標」をどのように設定するのかが結構難しい問題だと思われる。自分の設定する「最低限の目標」と、学生が達成できる目標には齟齬が生まれる可能性があるため、この調整に関しては現実に授業経験を通して身につけて行く必要があると思った。また、成績評価方法に関しては、事前課題では、知識や技能に偏った書き方だったのだが、態度に関しても成績として評価することも学んだ。ただし、物理学のような理系科目では、どんなに授業態度が良くても、やはり習得すべき知識、技能が一定水準まで身につけていないと評価は難しいと思われるので、学習態度をどの程度考慮するかについては今後考えていきたい。ただし、物理学においても、ゼミ形式の授業の場合は、ゼミの議論への参加態度も非常に重要になるので、今回学んだ学修時間から「知識・技能・態度」の適切な点数配分を考える方法は有用であった。また、今後例えば文系などの物理学の専門外の学生に「物理学概論」のような講義をするときには、レポートを提出させて評価をすることがありうるため、基準を明確にして、その日の体調や気分を左右されずにレポート評価を客観的にするための「ルーブリック」の作成を学べたことは非常にためになった。(PFFP/フル)
- これまでのシラバス作成は、前任者のものをそのまま引き継ぐ場合が多かったので、事前課題がなかなか難しかったというのが正直な感想だった。一番難しかった点は、今回のセミナーの内容とは直接的には関連しないのだが、当該科目の全学課程における位置付けが理解できていないため、何をどのように考えて目標を立てるのが適切かということが十分に検討できなかったことであった。実際、現在担当している大学院の科目も、そうした情報は得ないままに前任者のシラバスを参考にして組み立ててしまったが、今後実際に授業を担当する際には、そうした点をきちんと確認してから作成にあたりたいと感じた。(NFP/フル)
- 本シラバス作成に関する説明の中で、印象的だったことはシラバスという形で授業内容や評価方法についてできるだけ定量的に透明化することで、基準が明確になるため教員の手間が軽減されるのと、学生も目標を見据えることができるようになるので、より授業目標達成に近づくことができるという考え方を繰り返し強調されているところだった。一見すると自然な考え方だが、特に評価方法に対してはたして明確化するべきなのかどうかについて私の中で答えを見いだせず苦しんでいる問題である。私は実験などのレポート課題を出すときは「探究活動を行う力をつけるために、誰かに評価されるためではなくできるだけ自由な発想で考えてほしい」と考えている。そのため、レポートに対してあまりに明確な評価基準を作ってしまうと、「優秀なレポート像」が出来上がってしまい、自分なりにいいと思う実験やレポートを模索しなくなってしまうのではないかと考えている。(NFP/フル)
- シラバスを事前に書いたときには「どんぶり勘定」で書いていたことに気付いた。というか、書いている最中にも気付いてはいたが、それでもまあいいのではないかという感じがしていた。D チームの遠藤さんと周さんも同様の趣旨のことをおっしゃっていた。そういう現状の下で今回のセミナーにおいてシラバス執筆の指針と雛形を得たことは大きかった。遠藤さんと周さんはすでに授業を経験しているので、冒頭でのチーム内での発表のときには、さすがよく考えられているなど感じた。しかし、私は今は学生である。分からなくて当然という気持ちで恥を恐れずにできる限り正直でいようという方針を持った。「人生苦あれば楽あり」とはよく言ったもので、事前に苦労して授業設計をしておけば、後で(評価のときに)楽に仕事ができる。(PFFP/ショート)
- 今回のセミナーを受講したことで、授業設計やシラバス作成時の明確な指針や手法論を紹介いただいたこと今後非常に活用できると感じた。参加人数が多いので難しいとは思いますが、可能であれば各参加者のシラバスの修正案や指摘などをして頂きたかった。また、グループ分けしたが参加者同士で議論する時間があまりとれていなかったため非常に残念に感じた。個人的には、スタッフの皆さんの負担もあると思いますが、午前中から開始してよりグループ内で相互に議論できる時間を取ってほしかった。(NFP/ショート)

基礎知識を得る「授業づくり：準備と運営」

【日時】2016年9月14日（水）13:00～15:00

【会場】東北大学 川内北キャンパス教育・学生総合支援センター東棟4階大会議室

【概要】学習者が集中し、十分に理解できるような授業をつくるためには何に留意し、どのような準備をして、いかに授業を展開するとよいのかについて、1回の講義形式の授業を念頭に置き、学習者の認知面、心理面から授業作りについて学んだ。

【タイムテーブル】

13:00～13:05	開会あいさつ 羽田 貴史（東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター長）
13:05～14:55	講演「授業づくり：準備と運営」 邑本 俊亮（東北大学 災害科学国際研究所 教授）
14:55～15:00	閉会あいさつ 岡田 有司（東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授）

【セミナー資料】（抜粋）

<p>I 授業内容を理解させるために</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 伝わらない理由 2. 理解の認知プロセス 3. 理解を支援する方法 <p>II 学生の意欲を高める授業運営</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 学習意欲とは 2. 意欲を引き出す 3. 意欲を維持させる <p>III 気持ちのコントロール</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 伝わるのは授業内容だけではない 2. 非言語メッセージに気を配る 3. ポジティブな気分で授業をしよう 	<p>1. 伝わらない理由</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 情報発信の不備 (2) 知識のギャップ (3) 主題や要点が不明確 (4) 言葉だけでは不十分 	<p>2. 理解の認知プロセス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 既有知識の活性化 ・ 知識に基づく解釈・推論・精緻化 ・ 学習者自身のメンタルモデルの構築 <p style="text-align: center;">↓</p> <p>学習者がどのように受け止めるかによって 情報の意味・価値は異なってくる</p>
<p>3. 理解を支援する方法</p> <p>(1) 授業を組み立てる</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 1コマ(90分)の構造化 ② 材料の収集・選別・配列 ③ 既知情報と新情報のバランスを考慮 	<p>3. 理解を支援する方法</p> <p>(2) 知識の活性化を支援する</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 学生の知識状態の把握 ② 既習事項の想起を教示 ③ 知識を適用しやすい教材や課題の選定 ④ オーガナイザーの利用 	<p>3. 理解を支援する方法</p> <p>(3) メンタルモデルの構築を支援する</p> <ol style="list-style-type: none"> ① イメージ情報の提示 ② 精緻化情報の提示 ③ 既有知識との関連づけの教示

【当日の様子】



講師の邑本教授



セミナーの様子



質疑応答の様子

【参加者の声】（抜粋）

- 伝わるのは授業内容だけではなく、学生とのコミュニケーションも重要だ。こういったことは自分もそう思っているが、実施するのは難しい。非言語を使うのは内向的な自分にとっては決して簡単ではない。中でもパラ言語という言葉がはじめて聞いた。最後、「ポジティブな気分で授業しよう」という点を見て、自分の過去の姿を思い出した。自分は性格的にはどちらかというと暗い人間だと思っており、自分の本性を隠す、あるいはかえることができるのか。しいて言えば、自分は本当に大学教員に向いているのか、今からじっくり考えねばならない。つまり、どうやら自分が教師という職業を甘く見たということだ。この職業は思っていたよりはるかに挑戦的だ。(PFFP/フル)
- 開催日当日は大学院入試だったため、ISTU での受講となってしまった。ISTU での受講は、関心のある

箇所を繰り返し見られるという利点がある一方で、その場に参加して受講するのは、自分の気持ちの動かされ方が違うものだと感じた。これが「伝わるのは授業内容だけではない」ということのひとつの表れなのかもしれないと思った。後期になり、単独で担当する講義が初めて始まった。このタイミングで今回のテーマを聞くことができたことは、本当に参考になり、講義内容はいずれもすぐに自分の授業に取り入れたいと思うものであった。全体を通して印象的だったのは、学生の状態を知っておくことの重要性についてであった。講義をする際に受講者の知識に合わせたレベルで話をすることが重要である、ということによく指摘されることであり、理解もしているつもりであった。医療の分野でも、医療者と患者は知識の差が大きいので、その点を理解して話をすることが重要であるというのは常に言われることであり、心理士が現場で働く際の問題点としても「専門用語を使いすぎる」ということがあげられることはしばしばある。しかし、このことをさらに拡大し、既有知識との関連付けや、知識の活性化なども、自発的にしてもらえとは限らないということを理解し、工夫を行うことはしてこなかったように思う。特に、「〇〇Ⅱ」のような授業を担当している場合、「〇〇Ⅰ」のカリキュラムに含まれている内容については、知っていて当然と考えて触れないことが多く、「これは以前やりましたね？」の一言で流すことも多々有る。少なくとも、意識的にこちらで関連付けを促すということはしていなかった。講義の中であったワークをきっかけに、逆に自身のことを振り返ってみると、授業のみならず、日常生活においても、知識の関連付けが行われない場面、人から指摘されて「ああ言われてみれば！」となる場面は多々生じていることに気づいた。今後は、新規情報を説明するときのみならず、既有知識の応用といった話をする際にも、受講者の状態についてできるだけ理解しようとする姿勢を怠らなるとともに、受講者や学生に頼りすぎない姿勢が必要なのだと思った。(NFP/フル)

- 認知心理学の知識を授業に生かすことは大変有効であるということはずっと前から聞いていましたが、具体的にはどのようにすればいいか分かりませんでした。今回のプログラムを通して、それについて大変勉強になったと思います。授業の内容を学生に伝えるために、まずは伝わらない理由を知っておく必要があります。振り返ってこれまでの自分の授業を見てみると、残念ながら幾つか当てはまってしまったものがありました。もっとも気になったのは、やはり知識のギャップです。私自身は言語学の専門なので、語学の授業をする時も、無意識的に言語学の専門用語を使って知識の説明をすることがありましたが、学生が必ずしも分かっているとは限らないので気をつけた方がいいと思います。また、理解の認知プロセスを理解した上で、学習者の理解を支援する方法を考えることが出来ます。支援する方法がいろいろありますが、私の場合、一番気に入ったのは、知識の活性化による支援です。(PFPP/ショート)
- 【これまで】授業は好きなほうである。授業を実践するというよりも、学生と向き合っているということが恐らく好きなのである。まさしくコミュニケーションである双方向のやり取りができた時は大きな喜びとなるし、伝えたいという教員の思いと理解したいという学生の思いが一体となる瞬間はやはり感慨深いものがある。かといって、常時そのような瞬間を味わい良い実践ができていけるかと言えばさあならず、授業後は激しく落ち込み、無力感に苛まれることもしばしばであるが、それでもなんとかこれまでこなしてきたのが現状である。しかし、できればこれから先は、明るく楽しく、今日はよく伝わった！！と達成感を伴う授業を増やしていきたいと強く望み、今回のセミナーに参加した。【セミナーを通して】伝わらない理由に挙げられた「情報発信の不備」「知識のギャップ」「主題や要点が不明確」「言葉だけでは不十分」の4点に関しては、どれも“そうそう”と共感をもって聴くことができたため、これまでの経験を通して、学生に伝わらない要因そのものは自分なりに把握し意識化できていると感じた。では、どうするか・・・が課題である。理解の認知プロセスについては、最初に説明があった既有知識の活性化＝受け止める準備の必要性になるほどと思い、予習を真面目に行っていた頃の自身の遠い記憶を探ると、確かに、知識を使って補った(行間を読んだ)感覚がそれとなく思い出された。この想起によって、既有知識活性化の大切さが腑に落ちるとともに、知識を補うための素材をどう提供できるかが最初のカギであると感じた。理解を支援する方法については、授業の組み立てからメンタルモデルの構築支援まで、ある程度は採り入れているように思ったが、邑本先生が例示されたものと比べると、私の授業ではひとつひとつの採り入れ方が中途半端だったのでと振り返った。既習事項の想起を教示するにしても、邑本先生が示されたような丁寧さはなく、冒頭にさらっと述べるにとどまっていると思った。【今後の課題】今回のセミナーを通して、まずは、理解の認知プロセスをしっかりと把握したうえで、理解を支援する方法を確実に採り入れていくことが授業改善に向けての課題であると感じた。さらに、頭では分かっているが実践するとなると難しいのが、教員のすべてが学生に伝播する点である。これまでは、保育者を養成する立場で、授業の冒頭には決まって身だしなみや遅刻学生への指導が入ることで嫌な空気のなかで授業を進めざるをえなかったことも多い。そのあたりの教員側の気持ちの切り替えや場の作り方など、授業参観の折に先達教員に尋ねてみたいと思っている。今回の学びを踏まえて、今後は、少しでもポジティブな気持ちで学生と向き合い、自分自身を語る魅力的な授業を目指していきたい。(NFP/ショート)

先達から学ぶ「授業を見る聞く学ぶ」

【日時】2016年7月～2017年1月

【会場】東北大学，東北工業大学，東北医科薬科大学

【概要】授業経験豊かな教員の授業を参観し，自分の教育活動を考えるヒントを得た。授業後の検討会では，授業内の教育活動や授業前の準備などについて授業実践者から学んだ。参加者は自身の都合と興味関心に応じて，最低3件の授業参観を行うものとした。

【参観対象授業一覧】

	授業名	担当教員	参観日・講義会場
1	解析学C 常微分方程式入門 (対象：工学部)	見村万佐人 先生 東北大学 理学研究科	2016.7.19 (火) 1限 東北大学 川内北 C101
2	機能形態学1 (対象：工学部)	平澤典保 先生 東北大学 薬学研究科	2016.7.26 (火) 2限 東北大学 川内北 C101
3	ハードウェアセキュリティ演習 (対象：情報科学研究科)	本間尚文 先生，林 優一 先生 東北大学 情報科学研究科	2016.8.30 (火) 3限 東北大学 電子情報研究所
4	Program for 2016 Food & Agricultural Immunology Joint Lecture, Overview of vaccine development based on mucosal immunity. (対象：農学研究科博士後期課程)	野地智法 先生 東北大学 農学研究科	2016.10.11 (火) 3限 東北大学 雨宮キャンパス 農学研究科講義棟 10 番教室
5	デジタル信号処理 (対象：情報通信工学科3年生)	木戸博 先生 東北工業大学	2016.10.12 (水) 2限 東北工業大学 八木山キャンパス 131 教室
6	言語表現の世界 (水曜：医歯薬工)	呂本 俊亮 先生 東北大学 災害科学国際研究所	2016.10.12 (水) 3限 東北大学 川内北 C301
7	日本語表現 (対象：知能エレクトロニクス学科)	高橋 秀太郎 先生 東北工業大学	2016.10.13 (木) 4限 東北工業大学 八木山キャンパス 121 教室
8	制度の計量分析 (対象：文学部・文学研究科)	永吉 希久子 先生 東北大学 文学研究科	2016.10.14 (金) 2限 東北大学 川内南 文学部 315
9	行動科学各論・特論 (対象：全，特に制限していない)	佐藤 嘉倫 先生 東北大学 文学研究科	2016.10.24 (月) 5限 東北大学 川内南 413
10	差別と社会 (対象：文学部・文学研究科)	永吉 希久子 先生 東北大学 文学研究科	2016.10.14 (金) 2限 東北大学 川内南 文学部 315
11	英語 B2 (対象：文教)	トッド・エンスレン 先生 東北大学 高度教養教育・学生支援機構	2016.11.10 (木) 4限 東北大学 川内北 A205
12	市民と政治 (対象：建築学科3年生)	片山 文雄 先生 東北工業大学	2016.11.10 (木) 4限 東北工業大学 長町キャンパス R129
13	確率モデル論 (対象：大学院、学際高等研究教育院・大学院共通科目)	中尾 光之 先生 東北大学 情報科学研究科	2016.11.11 (金) 1限 東北大学 青葉山 情報科学研究科 2F 大講義室
14	ゲーム理論入門 (対象：全，特に制限していない)	佐藤 嘉倫 先生 東北大学 文学研究科	2016.11.11 (金) 3限 東北大学 川内南 文学部第二講義室
15	英語 C2 (対象：全)	ダニエル・アイコースト 先生 東北大学 高度教養教育・学生支援機構	2016.11.11 (金) 3限 東北大学 川内北 A202
16	日本語 F (対象：留学生)	菅谷 奈津恵 先生 東北大学 高度教養教育・学生支援機構	2016.11.15 (火) 2限 東北大学 川内北 C303

17	学習理論入門 (対象：理保歯薬工)	佐藤 智子 先生 東北大学 高度教養教育・学生支援機構	2016.11.16 (水) 1 限 東北大学 川内北 A204
18	言語表現の世界 (対象：医歯薬工)	邑本 俊亮 先生 東北大学 災害科学国際研究所	2016.11.16 (水) 3 限 東北大学 川内北 C301
19	社会の仕組みⅡ (対象：薬学部)	佐保 紀仁 先生 東北医科薬科大学	2016.11.25 (金) 11:40-12:50 東北医科薬科大学 小松島キャンパス 203
20	データベース (対象：工)	三石 大 先生 東北大学 教育情報基盤センター	2016.12.29 (火) 2 限 東北大学 青葉山
21	差別と社会 (対象：文学部・文学研究科)	永吉 希久子 先生 東北大学 文学研究科	2016.12.12 (月) 2 限 東北大学 川内南 文学部 315
22	日本文化を考える (対象：全)	佐藤 勢紀子 先生 東北大学 高度教養教育・学生支援機構	2016.12.12 (月) 3 限 東北大学 川内北 A307
23	学習理論入門 (対象：理保歯薬工)	佐藤 智子 先生 東北大学 高度教養教育・学生支援機構	2016.12.14 (水) 1 限 東北大学 川内北 A204
24	言語表現の世界 (対象：医歯薬工)	邑本 俊亮 先生 東北大学 災害科学国際研究所	2016.12.14 (水) 3 限 東北大学 川内北 C301
25	応用数学 B (対象：工・電気系)	早川 美徳 先生 東北大学 教育情報基盤センター	2016.12.22 (木) 1 限 東北大学 青葉山 電気情報 1号館・2D
26	言語表現の世界 (木曜：経保歯薬工農)	邑本 俊亮 先生 東北大学 災害科学国際研究所	2016.12.22 (木) 2 限 東北大学 川内北 B200
27	市民と政治 (対象：建築学科 3 年生)	片山 文雄 先生 東北工業大学	2016.12.22 (木) 4 限 東北工業大学 長町キャンパス R129
28	言語表現の世界 (対象：医歯薬工)	邑本 俊亮 先生 東北大学 災害科学国際研究所	2017.1.11 (水) 3 限 東北大学 川内北 C301
29	現代青年と心理 (対象：文系、理農)	岡田 有司 先生 東北大学 高度教養教育・学生支援機構	2017.1.12 (木) 3 限 東北大学 川内北 C105
30	基礎中国語Ⅱ (対象：保)	趙 秀敏 先生 東北大学 高度教養教育・学生支援機構	2017.1.16 (月) 1 限 東北大学 川内北 C106

【当日の様子】



授業後のディスカッションの様子



参観者からの質問に答える趙先生

【参加者の声】(抜粋)

- 私はまだ学生に対して授業をしたことがないので、見村先生がどのように授業を組み立てているのかをその準備段階も含めて具体的に知ることができたのは非常に有意義であった。とくに、「まず授業で何を伝えたいかを1つか2つ決め、それを基に授業の幹となる流れを作り、そして肉付けをしていく」という言葉は、授業はもちろんのこと研究会発表や講演でも重要となる非常に汎用性の高い方法だと思う。また、中間試験により学生の理解度を確認することでその後の授業の進度を決め、場合によっては学ぶ事柄の順序を入れ替えることを知り、中間試験の重要性、有用性を知ることができた。とくに中間試験に感想を書かせるのは良いアイデアだと思う。私も授業をするうえで、どのように学生からフィードバックを得るかを常に考えていきたいと思う。特に、まったくフィードバックを得ずにいきなり期末試験をすることが如何に危険な事かを知ることができたのは非常に良かった。見村先生の「教えることで、自分の分野に対する基礎づけを再度固め、多角的な視点が得られることで、分野の理解が深まる」という言葉は、まさに共感する言葉だった。私も、自分の研究分野を分野外の人に話したりすることで、自分の研究分野の理解が却って深まる経験をしたことがあるので、教育というのは学生のためであるのはもちろんのこと、教える教員にも有用であることを改めて知ることができた。また、黒板だと字を大きく書く必要があり、結果として授業の回転が速くなくなってしまうなど、授業をしないと中々気づくことができない点もいろいろと教えて下さり有意義な授業参観であった。(PFFP フル/授業1)
- 参観してみて、分野の違いを超えて自分も取り入れられそうな工夫点がたくさんあることに気づいた。一番参考にしたいと思ったのはスライドの創り方であった。実習と違い、パワーポイントを使う講義形式の授業では、学生が、資料があることに安心してほとんど授業を聞かない、メモを取らない、集中しないというのが、数年来の悩みだった。しかし、平澤先生が取り入れていらっしゃる穴埋め形式のスライド、配布資料では、ほとんどの学生が寝たりしゃべったりスマホをいじったりすることなく、講義に集中し、メモを取り続けていた。先生は1年生の1学期だからでしょうとおっしゃっていたが、授業の後半、復習に入り、穴埋め作業がなくなると、一部の学生が寝始めたことから、やはり学生の手を動かせることの意義は大きいようであった。逆にスライドをプリントに書き写す「作業」になってしまうという弱点もあるように思われたが、1年生を対象とした基礎知識の講義で、学生が自分なりの考えをもつことよりも、むしろ必要な知識を習得することが学習目標になっているこの科目のような場合には、とても有益であると思えた。今の時点で自分自身が担当する科目は、大学院のものが多いこともあり、知識の暗記、習得よりも学生が実体験と結びつけて頭を使う、ということのほうの重要性が高いため、すぐに取り入れる機会はないかもしれないが、科目の目的と照らし合わせながら、ぜひいつか実践してみたいと思う工夫点であった。一方で、知識の暗記が重要となる科目の中でも、ただ知識が身につくさえすればよいというのではなく、学生が自身の将来展望と結びつけながら授業を受けられる工夫をされているということはとても興味深かった。基礎的な話は、具体的に何の役に立つのかわからないと関心も落ちるというのは、高校時代の数学などを思い返すと自身の経験としてもよく理解できた。その中で、目の前の講義内容が、研究または臨床で、どのように活かされるのか、なぜ必要なのかを伝えていくことは、講義をする際に大きな問題となりがち「学生のモチベーションが上がらない」という課題への解決策のひとつとして有効だと思った。心理学の領域は、身近な日常生活とも結びつけやすい内容が多いため、こうした工夫はぜひ取り入れたいと思った。また、人数の多い講義で学生の発言を引き出すことが難しいというのも、数年前に初めて講義を経験したときから課題として感じていることだが、先生がされていた、学生に「これは何でしたっけ?」「これはどういうことでしょうか?」「ここで大切なのは何でしょうか?」と質問を向けて、すこし間をおくというのは、面白い工夫点だと思った。学生の様子を見てみると、実際にその間考えていそうな人、質問を受けて過去のプリントを見返している人などがいて、全員とはいかないまでも、学生に考えさせる時間をもつという意味では役に立っているように見受けられた。また、授業後に先生がおっしゃっていた「答えがわからなければ、わからないということに気づけることが重要」という点が、とても真をついていると思った。1時間半集中力を保つということはそれだけでも大変である。その中で、講義にリズムやメリハリをつけるという意味でも、この方法は有用であるように思えた。大人数の講義ではなかなかこちらから指名して答えさせるということが難しいことも多いため、こうした方法はぜひ参考にしたいと思った。(NFP フル/授業2)
- 今回の講義の最も顕著な特徴は、講義がすべて英語で行われた点である。野地先生の英語は非常に流暢で、話すスピードがやや速く感じられたが、日本人にも聞き取り易い明瞭な発音であるため理解し易かった。日本人学生も留学生も受講しており、先生と学生とのやり取りの様子から、日本人学生も概ね内容を理解しているようであった。専門的な内容を講義を英語で行うことは、教える側の技量や、学ぶ側の理解力など、様々な面で実施が困難であるため敬遠されがちである。しかし、今回の野地先生の講義

では、英語でも内容が理解し易いよういくつか工夫がなされていた。(1) 黒板の図示で視覚的に理解を補助・・・パワーポイントで講義を進める前に、学生とやり取りをしながら、今回の講義内容に深く関連する腸の部位や細胞の構造などを黒板に図示していた。適切に色分けされた、非常に見易く丁寧な図示であった。その後のパワーポイントによる説明の途中で、時折板書済みの図に立ち戻り補足説明してくれたため、今どの器官(細胞)のことを説明していたのか再確認しながら、話題についていくことができた。(2) 平易な語彙で言い換える・・・パワーポイントの中でよく現れる専門用語や難しい表現を、平易な語彙で言い換えている場面が何度かあった。一例を挙げると、例えばスライド上の possess the homology to・・・ という表現について、They are very similar to・・・ という意味ですよ、と言い換えて説明している場面があった。このような言い換えを伴うパラフレーズやリキャストなどの手法は、外国語教育で広く認知され実践されている指導スキルであるが、やはり聞き手に分かり易く効果的な手法であることを再認識することができた。(3) 学生とのインタラクションがある・・・一方的な英語の講義ではなく、適切なタイミングで学生に複数回質問を投げかけたり、理解の度合いを確認したりしていた。特に参考になったのは、先生が実験の前提や条件について説明したあと、学生を当ててその結果を予測させていた点である。学生の様子を見て、自信がなさそうならヒントや補足説明を与えるなどして、学生に考えさせ英語で何か言わせようとしていた。知識の伝達だけを目的とせず、学生とのコミュニケーションや理解度の確認についても配慮された講義であった。野地先生は、研究室の発展のために、まず受講学生に先生自身の研究分野に興味をもってもらい、将来的に研究室に来て博士課程まで進む学生を育てたいと強く願っていた。講義の構成を基礎的内容から応用へという従来通りの流れでなく、逆に応用的・先端的内容から基礎的内容に戻るといった構成にしているのも、学生を飽きさせないよう、はじめに「こんな面白いことが今研究されている」という話題提供をし興味をもたせる狙いがあったようである。今後講義を計画する際に参考にしたい構成である。(NFP ショート/授業 4)

- まず印象的だったのは、学生とのインタラクションの多さだった。授業の大半が学生とのやりとりによって構成されていた。前回の参観ではグループワークがあったが、今回のインタラクションはグループワークとはまた異なり、教員と学生とのやりとりによって、学生の主体的な参加を促すというものであったと理解している。そのことにより、学生が授業に集中している様子が伺えた。当てられることに対する適度な緊張感のようなものもあっただろう。普段自分が講義をしていても感じるのだが、日本の学生は挙手をするのがほとんどない。そのような集団に対する講義として、今回のようにマイクを向けながら進めるというのは、有効な方法のひとつであると感じた。学生が誤答した際のフィードバックが肯定的で、失敗することへの不安感が軽減されているように感じたのも印象的だった。また、インタラクションの時間以外でも、ほぼ常に先生が教室を歩いて回っていらっしゃるのも印象的だった。講義形式の授業だつとつい教壇に落ち着いてしまうように思うが、巡回することで学生との距離が近くなり、集中力を保つのに役立つようにも思った。一方で、インタラクションを積極的に取り入れることにより、いわゆる講義に避ける時間は相対的に短くなる。全学の講義など、学生に身につけてもらうことが必須の知識が多くなれば、そちらの分量に合わせて調整することが必要になるため、ここでもやはり授業の目的を踏まえての「方法」の選択が重要であると感じた。(NFP フル/授業 28)
- 授業開始のベルが鳴ったら、すぐ本文に入るのではないかと思います。趙先生がまず今日の勉強の概要をみなさんと一緒に閲覧したり読んだりしました。これによって、学生たちはこれから勉強する内容に対して、まだあまり理解できていないかもしれませんが、大体のイメージを付けることができるようになり、大変役に立つと考えられます。授業に入り、趙先生が積極的に中国語でみなさんに話かけたり、質問したりして、巧みに学生たちとの交流を取っていました。私は普段初級学習者への配慮もあり、授業をする時には基本的には日本語でしゃべり中国語の使用を控えていました。しかし、趙先生の授業ふりを見ると、多少聞き取れなかったとしても学生たちは実は母語話者の教員の発音を聞き取ったのではないかと思います。始め、母語話者の教員の長所が何にあるかということをもう一度考える必要があると感じました。また、私は自分の専攻の影響で、授業をする時に文法や一つ一つの細かいところに拘り過ぎる傾向があると思いますが、趙先生とのディスカッションを通して、各段階の学習者のニーズに応じて授業を展開していかないといけないということを意識し、今後より豊富多彩な形式を採用し学生たちとコミュニケーションを取りながら授業の内容を修正していきたいと思います。90分の授業は基本的には休憩を設けていませんが、語学の授業は教授の内容が多いということもあり、受ける側は途中で疲れてしまう恐れが考えられます。学生のリフレッシュのために、趙先生の授業は、毎回休憩の時間を設定しています。しかも、単純なお休みではなく、TAを活用しながら、みなさんに中国語の民謡を聞かせたり、中国の事情を紹介したりするように工夫しています。これによって、中国に関する学習者の興味を喚起できるし、中国語の勉強のいい動機づけにもなれます。私も今後このようないい“休憩”を導入したいなあと思います。(PFFP ショート/授業 30)

自分の授業をみつめる「マイクロティーチング」

- 【日時】 2016年11月15日(木) 13:30~17:40
 【会場】 東北大学 川内北キャンパス 講義棟 B棟 B204
 【概要】 参加者は先のワークショップで作成したシラバスから授業1回分を選び、90分の授業計画をたて、その内の7分程度を実際に行った。他の参加者やファシリテーターらからのコメントをもとに、自分の授業のふり返しを行った。また、実践の様子を収録したDVDを作成し、各自で視聴してリフレクションを実施するように求めた。

【タイムテーブル】

13:30~13:50	本日の流れとファシリテーターの紹介 授業リフレクションに関する説明 マイクロティーチングの実践方法に関する説明	岡田有司, 今野文子 (大学教育支援センター) 足立佳菜 (学習支援センター)
13:50~14:00	準備, マイクロティーチングプランの確認 マイクロティーチングセッションスタート	
14:00~14:03 14:03~14:10 14:10~14:15 14:15~14:30	授業設定, 目的, 着目ポイントの説明 (3分) ティーチング (7分) 評価シート記入 (5分) フィードバック (15分)	石原
14:30~14:33 14:33~14:40 14:40~14:45 14:45~15:00	授業設定, 目的, 着目ポイントの説明 (3分) ティーチング (7分) 評価シート記入 (5分) フィードバック (15分)	林
15:00~15:10	10分休憩	
15:10~15:13 15:13~15:20 15:20~15:25 15:25~15:40	授業設定, 目的, 着目ポイントの説明 (3分) ティーチング (7分) 評価シート記入 (5分) フィードバック (15分)	田中
15:40~15:43 15:43~15:50 15:50~15:55 15:55~16:10	授業設定, 目的, 着目ポイントの説明 (3分) ティーチング (7分) 評価シート記入 (5分) フィードバック (15分)	Roots
16:10~16:20	10分休憩	
16:20~16:23 16:23~16:30 16:30~16:35 16:35~16:50	授業設定, 目的, 着目ポイントの説明 (3分) ティーチング (7分) 評価シート記入 (5分) フィードバック (15分)	吉田
16:50~16:53 16:53~17:00 17:00~17:05 17:05~17:20	授業設定, 目的, 着目ポイントの説明 (3分) ティーチング (7分) 評価シート記入 (5分) フィードバック (15分)	王
17:20~17:30	10分休憩	
17:30~17:40	まとめ	

【当日の様子】



板書授業に取り組む参加者



スライド提示による授業



あたたかく見守る担当者

【参加者の声】(抜粋)

- これまでにも講義をしたことはあるので、講義の準備をしたり計画を立てたりという経験ももちろんあるのだが、このように詳細に時間配分を組み立てたり、内容ごとに目的や留意点を整理して書き出したり、学生の反応を丁寧に想像したり、といったことはしてこなかったのが正直なところである。グループワークをするような授業では、大まかな時間配分は決めてはいたが、大抵余白の時間を設けておいて、そこで延びた分を吸収したり、延びなければ雑談で埋めたり、といった対応で、どちらかというところ、大雑把な計画の中で進めてきた。今回丁寧な計画を立てる過程で、その作業により授業の中で自分がどこに時間を使いたいのか、そのためにはどこを削らなければならないのか、といった優先順位づけの作業が発生し、自分の中での授業目標が明確化されたように感じた。授業計画を立てる作業にはかなりの時間を要したため、これから講義が増えてきたときに、毎回必ずできるかとやや自信がないのが正直なところではあるが、その意義は身をもって感じる事ができたので、できるだけ取り入れていきたいと思った。実際に書き出さないまでも、アウトラインを立てる際に、その内容に重み付けをし、取舍選択をするという作業は必ずするように心がけたいと思った。(NFP フル)
- 理系の学部一年生向けを想定しての「力学」のマイクロティーチングを行った。当初の計画ではニュートンの運動の3法則を黒板に書いたまま授業をする計画だったが、実際に板書してみると、黒板の大きさと字の大きさの関係上その計画は難しいことに気づいた。4分割スタイルの黒板だと可能かもしれないが、前もって、黒板の大きさを把握することや、無理な計画は立てないほうが良いと感じた。板書の計画をどのようにあらかじめノートに書いておくかをもっと工夫する必要があるように思った。また、丁寧に書こうとするあまり、板書の速度が遅くなってしまった。字の読みやすさをキープしつつ、板書の速度を上げられるように、訓練していきたい。また、観察者の意見や、動画を見返してみた印象から、板書をするときに話す声小さくなり、また、学生に背を向けて話すことになるので、話すときと板書をするときは分けたほうが良いように思った。また、文字のサイズも若干小さいように感じたので、最適な文字サイズを見つけていきたいと思う。また、授業が淡々としていた印象だったので、「慣性って聞いたことある？」といった学生の呼びかけや、速度の意味に関する問いかけなど、学生に振った方が良かったように思った。レジメの穴埋め式を配るという意見も出たが、個人が自由な配置でノートをとったほうが良いような気もするので、穴埋め式が果たして良いのかも今後考えていきたい。今回はパワーポイントのマイクロティーチングはしなかったが、他の授業者のパワーポイントの講義やその後のリフレクションを聴くことで、パワポ時の立ち位置や、スライドの構成、話すスピードやタイミングなど大いに参考にすることができた。(PFFP フル)
- 録画を見て思ったことは、緊張しているせいもあり、まず無駄な動きが少しあるなど感じました。また、声の大きさについてもマイクを使っているのに、ほとんどの部分は聞き取れるのですが、途中何を言っているのか、正確に分からない部分がありました。実際に講義を行っているときも、少し自信が無い部分は、もごもご話している気がしておりましたが、録画を見るとその自信の無さが思っていたよりも分かるのだと感じました。つまり、生徒から見ると、声が小さくなっている部分については、自信が無いのだと分かってしまうということに気がしました。ですので、講義を行う際には、何度も練習する必要があると改めて感じました。また、フィードバックにもあったとおり、インタラクションを行う際には、考える時間を入れるべきだと思いました。模擬授業を行っているときには、考える時間を入れているつもりでしたが、録画を見ると全くないことに気が付きました。スライド資料を穴埋めで作成していましたが、穴を埋める時間が全然ないと気づきました。このことから、今後講義を行う際には、より短いキーワードに絞っていく必要があると感じました。また、トピックとトピックの間にもう少し、整理する時間が欲しいという、フィードバックがあったように、少し、授業の展開が早かったように感じました。録画でも見ると、その早さが顕著に感じました。メリハリが無い授業だなあと感じました。ですので、今後は、間をはかりながら、生徒の様子にも気を配りながら、授業を行っていききたいと感じました。授業で行う情報量もいっぱいありましたので、少し整理する必要があると感じました。(PFFP フル)
- 「質問をもう少しみくみくだいて答えやすくすることが可能かも(〇〇について知っているか/聞いたことあるか? 〇〇に関するニュースを聞いたこと/見たことあるか (yes/noで答えられるものからスタート))」というコメントについて→ごもっともです。そうです。いつも悩んでいます。質問をしてしまったから、「あ、この質問、めっちゃ答えづらい! しまった!」と思うことが多い。ここは、心掛けていきたい。同じく、学生への質問、次のようなコメント・ご提案もいただいた。「知っていますか?」だと知らないと思われるので「~についてどう考えますか? /考えますか?」のように考えさせる質問もよい。→これも、実施してみる(このような質問こそ、もう少しこちらから基礎知識・基礎情報を提供してから、ペアで話してもらってもいい場合もあると思う。(NFP フル)

比較の目を育てる「国内他大学訪問調査」(フルコース・オプション)

【日時】 2016年10月26日(水)～29日(金)

【引率】 岡田有司, 今野文子

【訪問先】 大阪大学, 立命館大学, 同志社大学

【概要】 国内他大学を訪問し, 授業参観, 施設・設備の見学, 教員・学生とのディスカッションにより, 多様な大学の在り方などについて理解を深めた。フルコース受講生のうち4名が参加した。

【タイムテーブル】

1日目：10月26日(水) 大阪大学訪問

10:30～	授業参観	先端教養科目：現代キャリアデザイン論—複雑化する時代のサバイバル術(豊中キャンパス大講義室) 家島先生
12:00～	昼食	家島先生を囲んで大学生協にて昼食
13:30～	施設見学	ラーニングcommons他施設を見学
14:30～	ディスカッション	家島先生とのディスカッション
15:30	京都へ移動	

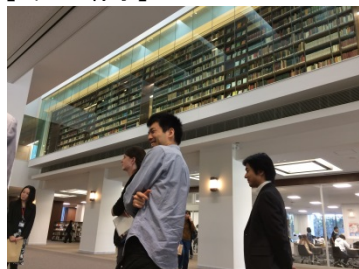
2日目：10月27日(木) 立命館大学訪問

11:45～	集合	
12:10～	ランチタイム FD	立命館大学の教職員によるランチタイム FD に参加
12:50～	休憩	
13:00～	FD 集合研修に参加	立命館大学の新任教員, 大学院生向けの FD 集合研修に参加
14:30～	施設見学	図書館, 究論館などを見学
16:20～	授業参観	大規模講義「現代の教育」を参観
17:50～	ディスカッション	担当教員とのディスカッション

3日目：10月28日(金) 同志社大学訪問

10:00～	ラーニングcommons 見学	[1] 概要 [2] 館内見学
--------	--------------------	--------------------

【当日の様子】



図書館見学の様子



家島先生を囲んでの昼食



参加者集合写真

【参加者の声】(抜粋)

- ロイロノートを使った授業を始めて受講しましたので, 家島先生がどのように工夫されているのかを勉強させていただくことができました。特に印象に残っているのは, 家島先生が90分間生徒に飽きさせず, 集中して取り組むような仕掛けを多く行っていることでした。私自身も研修で模擬授業を行う予定になっておりますので, 家島先生が工夫されている点を少しでも多く実施できればと感じました。また, 積極的に学生の顔と名前を紐づけする等工夫をこらした先生の授業は非常に参考になりました。東北大学でも全学教育で生徒のスマホを利用した授業を行っている場合もありますので, 私自身もスマホなど活用した授業について勉強し, 効果的な授業を展開できるようになりたいと思いました。また, 家島先生の課題で, 人生プランを双六で書くというのは大変興味深い課題でした。学生が, これまで何を実施してきたのかを過去を振り返り, 大学卒業後に何をしたいのかを考え, そのうえで, 大学で何を必要があるのかを考えるというのは非常に重要なことだと思いました。また, 学生にとっても自身で人生プランを考えることは課題を超えて重要なテーマとなり, 有益なものになっているのだと思います。学生が卒業後に役に立つような課題を課すということも大事であると改めて感じました。(PFFP フル)

- 新図書館は、2016年4月に開館されており、学習者や研究者が長時間滞在したくなるように様々な機能・工夫がされておりました。新しい施設ということで、借りたい図書を持ってゲートを通ると自動で認識され、カードをタッチすれば貸出手続きが完了するとのことでした。また、「びあら」と呼ばれる図書館ラーニング・コモンズは、「主体的な学習者としての学びの転換を促すこと」「仲間とともに学ぶ楽しさ、成長する喜びを感じる場であること」というコンセプトを持っておりました。そのため、機能的で開放的な空間デザイン（仕切りにガラスを用いていました）や什器の配色についても工夫されておりました。また、ライブラリースタッフを配置しており、スタッフの方は、配架・書架整理などの図書館の基本業務のほか、びあらカウンターでの機器類の使い方や情報検索の仕方などのサポートに取り組んでいました。また、印象的だったのは、大学の職員の方がこのような最新の施設をどうやったら、効果的に学生に使ってもらえるのかということを考えていた点でした。国立大学でも同じように職員の方が考えているかもしれませんが、私立大学の職員さんの方がより積極的に考えているような印象を受けました。究論館は、大学院生のための施設で、大学院生個々の研究を促進するだけでなく、グループディスカッションや共同研究、研究成果の発信・共有、研究科や課程を超えた大学院生間の交流を促す施設となっていました。素晴らしい施設をもっと多くの先生・学生に使用してもらうために、コミュニティ同士を交流させ、その交流を定着させるための仕掛けを行っていく必要があると職員の方がおっしゃっていたのが印象的でした。(PFFP フル)
- 授業評価を導入するからといって、授業のレベルが高くなることはない、という話が印象的であった。授業評価を通して、ダメなところを指摘されるが、それをどう改善すればよいかを教えてもらうわけではないから、改善しないのも当然である。(その意味でも、家島先生が、学生に授業評価をさせる際に、具体的な改善策の提案もお願いしているのが、すばらしいと思った。) 授業評価の仕方の見直しの必要性を感じた。非常勤で教えている法政大学には、特に新任教員の授業を (but ベテラン教員の授業も対象となる)、同僚が見学し、授業後にフィードバック・セッションを行うという、大変ありがたい仕組みがある。私もこれを経験し、非常に勉強になった。いいところとダメなところを指摘されただけでなく、ダメなところを具体的にどう改善すべきかについて、多くのヒントと提案も受け、非常によかった。(※毎回の授業で、教員から、学生にミニッツ・ペーパーなどで評価してもらう際に使えそうな質問:「今回の授業を理解できましたか? できませんでしたか?」、「疑問点」、「感想」、「話し方」と「板書の仕方」に非常に注意すべきであると改めて分かった。私自身は早口になりがちですので、それに気を付けたい。そして、板書の仕方も、改善したい。できれば、どのようなことを、どのようなレイアウトで黒板に書くかを、授業の前に決めておくことにしたい。理想としては、黒板だけを見れば、授業の一番大事なポイントが分かるような板書の仕方をできるようになりたい。(NFP フル)
- 大阪大学、立命館大学、同志社大学のラーニングコモンズを中心とした施設見学を行った。これらの施設で特徴的だったことは重点的な強化を行っている施設の多くが人文系を対象としていること、ほとんどのケースにおいて施設の利用に関する啓発活動を行っていないことであった。グループでの学びは理科系においては自主ゼミや自主的な輪講という形でほぼ同等に存在するが授業や教育課程においてこのような活動を啓発する機会がほとんどなく、特に学部学生においてはごく一部にとどまっている。一方人文系ではゼミ活動や学部の様々な授業課題によってグループ活動を行う機会がある。そのため、そこまで啓発活動をおこななくてもある程度の利用率を担保できる。そのため、どうしてもこのような施設の活用が人文系に偏ってしまっているのではないかと感じた。ざっと見学した定性的な感想として、多くが実際授業課題を相談しあう場として利用しているように感じ、課外の学習活動は多くないように思えた。例えば東大の場合自主ゼミや輪講を授業として認定して単位をだす仕組みがある。このように学生の自発的な学びをより啓発するやりかたをとることで、より理科系も含めた多彩な活動を支援できるのではないかと感じた。(NFP フル)
- 立命大学の図書館は、自分の参観した図書館の中で設備やスタッフやデザインにおいて最も優れている図書館です。図書館は教育や学術のためにある場所なので、地味でも大丈夫だという私の考え方を一新しました。最新の自動貸出機などの設備はもちろん、三階のデザインはそれぞれの用途に合わせて異なり、使用者の気持ちもそれなりに変わります。いい図書館に入り、自然的に本を手に取りたくて、落ち着いて一冊を読み始めます。あそこで実感しました。同志社大学の図書館は、「会おう」、「話す」、「まとめる」、「やってみる」という四つのコンセプトで四つの空間に分かれています。各空間にデザインが異なり、バーや日本式な座席、ファミリーレストラン風などの大変わかりやすい空間設計です。椅子の種類、ワークショップの大きさ、スタッフや学生との連動、どちらも私のしてなかった大学の施設の在り方でした。つまり、今回参加した施設は、これからの若い世代向けの学習、活動場所です。学生はただ教育を施す対象だけではなく、しいて言えば、顧客にもなります。特に私立大学はそうです。高い授業料を払った以上、もっといいサービスを体験させるのはおかしくはありません。(PFFP フル)

コーチング技術を活用した院生指導

【日時】2016年12月9日（金）13:00～16:10

【会場】東北大学 川内北キャンパス 教育・学生総合支援センター東棟4階 大会議室

【概要】院生に対する研究指導におけるスキルについて、コーチング技術を活用した指導法の観点から、講義とワークショップによって学んだ。

【タイムテーブル】

13:00～13:05	開会挨拶（大学教育支援センター長：羽田貴史教授）
13:05～13:55	講演「コーチングを活用した院生指導」 （東北大学医工学研究科長：出江紳一教授）
13:55～14:05	休憩
14:05～16:05	ワークショップ（株式会社イグニタス：倉重知也氏，出江紳一教授）
16:05～16:10	閉会挨拶（大学教育支援センター長：羽田貴史教授）

【セミナー資料】（抜粋）

<p>講演内容</p> <p>1. コーチングの概略 2. エビデンス スキルの効果に関する若干の考察 3. 大学院生にコーチングを教える</p>	<p>コーチング・スキル</p> <p>1) ゼロポジション 2) ベーシングによる安心感の醸成 3) 接続詞を使う（それで、それから） 4) 承認する 5) フィードバック 6) 提案する</p>	<p>コーチング・スキル</p> <p>7) 要望する 8) 効果的な質問をする 9) 沈黙する 10) メタ・コミュニケーション 11) お互いが同意できたことを確認する</p>
<p>個別対応のツール コミュニケーションスタイルの タイプ分け</p>	<p>コーチングの機能</p> <p>1. 相手に良い感じで話してもらおう 2. 新しい視点に気付かせる 3. 行動を開始させ継続させる</p>	<p>まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ コーチングの概略、エビデンス、大学院授業を紹介しました。 ■ コーチングを使う場合、目的と機能に合った使い方をすることが大切です。 ■ コーチングは、コーチ側とクライアント側双方で個人の心理社会的状態を向上させると考えられます。 ■ 教員が身につけるスキルであるだけでなく、学生が学ぶことにより、教員のコーチングの効果が高まると思われます。

【当日の様子】



講義の様子



ボールのやり取りを例に解説



ワークショップの様子

【参加者の声】（抜粋）

- コーチングという言葉自体は以前から知っていたが、それが具体的にどのようなものかを初めて学ぶことができ、有意義であった。とくに大学院生は、主体的に研究を進め、自分の力で論文を書いたり、発表をしたりする能力を身につける必要があるため、院生指導に当たっては、ティーチングはもちろんのこと、院生が目標を主体的に達成できるようになるためのコーチングが非常に重要であることがよく分かった。とくに、問いを共有するという未来解決型のコーチング(問いかけ)は、今まで考えたこともなかったスタイルなので、将来的な院生指導や後輩指導に対して、意識して用いるようにしたい。また、この未来解決型コーチングを自分自身にたいして用いることも、仕事や日々の生活を前向きに過ごすうえで有益であると思った。また、相槌のレポートリーやOKメッセージなど、適切なコミュニケーションスキルを身につけるには、練習も必要だと実感した。私自身も、相槌のレポートリーが少なかったり、無意識に腕を組んだりするなどの癖があるので、意識的に改善をしていきたい。(PFFP フル)

- 実践的に、コーチングに必要な「聴く技術」を学ぶことができた。最初の問いかけにも見事に引っかかり、話を聴くことの難しさを実感した。また、「好きな食べ物を話してもらおう」という実践では、組んだ相手が台湾人であり、私も台湾に住んでいたため、自分自身の台湾に対する知識が邪魔をして、しっかりと聴くことが不十分になってしまった。大学院生の指導の時も、教員の方が専門分野の知識や経験がある分、院生のお話をしっかりと聴けなくなる恐れがあるので、この経験を生かして、意識的に院生のお話を聴くようにしなければと思った。(PFFP フル)
- 出江先生が、コーチングの目的が、1. クライアント(=院生)の目標を達成することと、2. 主体性を向上させることであると指摘した。これを念頭において将来院生の指導にかかりたい。そして、その前提としてワークショップで学んだ「聞く力」を生かして、具体的な院生の「目標」が何かを、正確かつ丁寧に把握していきたい。出江先生が、院生の目標を達成させるために、「健康」、「金銭管理」と「人脈」も大事な能力・道具であると意識すべきであると指摘した。全くその通りだと思う。この3つのうち「金銭管理」についてももう少し詳しく述べると、特に日本では、高等教育が非常に費用がかかるため、ほとんどの院生が、授業料の支払いに苦しみながら研究を進めているから、教員もそこを意識して、理解を示すべきである。また、科研費等の管理の仕方を指導するのも、学生から見て大変ありがたいと思う。院生の指導に際して、あいつちのレパトリーを増やすのが大事だと指摘もあった。そこで、先生のリストを参考にしたい。ワークショップの最初に、岡田先生が入っていたグループから、留学生の指導の際に特別な配慮・技能が必要である、というご指摘が出た。全くその通りだと思う。研究分野によっても違いがあると思う、「質問攻め」がよくないのは、どの分野でもそうかもしれない。というのは、留学生に対して、その人の母語でない言語で指導する場合(日本人である教員が、日本人でない学生に対して日本語で指導する場合や、英語を母語としない教員が、英語を母語としない学生に対して、英語で指導する場合)、そうでないケースと比べて、そもそも言語のレベルで、誤解が生じやすいし、しかも、その誤解に気付くのが、とても難しいと思う。それこそ、時間をかけて、言われたこと/聞かれたことの内容と意図の確認を繰り返しながら、指導を進めないと、大変なことになるかもしれない。また、特に文系で、例えば日本人でない学生が日本の文化等に係る何かを研究している時に、その日本人でない学生と、日本人学生の、前提知識が違うことに、配慮する必要があり、それこそ「教える」の部分がより重要であると思う。(NFP フル)
- 院生指導の講座に参加し、特に印象に残っているのは、講義いただいた出江先生が、「指導する側(教員)と指導される側(学生)は同じ立場である」という点です。大学院生の研究が、教員よりも高いインパクトファクターのある雑誌に掲載されることもあり、決して、教員が全てにおいて上回っているわけではないということです。しかしながら、コーチングは必要とされます。なぜならば、コーチングはティーチングではなく、クライアント(学生)の望むところに最短の時間で到達するために、必要な能力や道具を自ら備えさせるものであるからです。つまり、対話(コミュニケーション)を通して、学生の望むことは何なのかを考えることが重要になってくるということです。出江先生は、この対話こそが、新たな価値を創造するコミュニケーションであるとおっしゃっていました。このコミュニケーションを実施していくためには、必要なスキルがあることを学びました。特に難しいスキルと感じたのが、ゼロポジションです。ゼロポジションというのは、先入観無しで、話を聞くことです。私は、今まで、修士課程の学生や学部生の論文を見ている時に、何となく、その個人の特性を考えながら、あるいはイメージしながら、アドバイスをしていました。今後は、できるだけ、ゼロポジションのスタンスで、インタラクティブなコーチングを実施していきたいと思いました。特に、一方的にアドバイスをすることないように、常に、相手を承認し、お互いが同意できたことを確認しながら、すすめていくことが重要だと改めて感じました。出江先生は、教授という立場にも関わらず、あいつちのレパトリーを増やしたり、OK メッセージの練習をされたりしているという話を聞きました。豊富な経験がある先生でもこのような練習し、努力されているという話を聞き、今後、大学教員を目指している私としては、絶対に練習しなければならぬと感じました。私は、まだまだ、あいつちのレパトリーが少ないので、レパトリーを印刷して、壁に貼ったりするなどして、意識的に、あいつちレパトリーを活用していきたいと思いました。また、出江先生は、効果的な質問がコミュニケーションをとるうえで、重要だとおっしゃっていました。効果的な質問については、本研修のワークショップでも実施しましたが、傾聴するということが非常に大事だと感じました。あいつちをうつだけでも、相手側が勝手に、解決法を考えるということも改めて感じました。院生指導する際には、自身の考えを一方的に教えるのではなく、学生に考えさせるということが重要であるということ学びました。(PFFP フル)

「自分の授業をみつめる」模擬授業

【日時】2017年2月17日（金）13:00～18:15

【会場】東北大学 川内北キャンパス 講義棟 A 棟 A103

【概要】参加者は先に実施したマイクロティーチングにおける実践結果やリフレクションを踏まえて、17分間の授業実践をおこない、他の参加者や先達教員からのフィードバックを得た。また、実践の様子を収録したDVDを作成し、各自で視聴してリフレクションを実施するように求めた。

【タイムテーブル】

13:00～13:20	本日の流れとファシリテーター、先達の紹介	岡田有司, 今野文子 (大学教育支援センター 今野文子) 足立佳菜 (学習支援センター)
	模擬授業の実践方法に関する説明	
13:15～13:30	準備, 模擬授業プランの確認	
模擬授業セッションスタート		
		佐藤勢紀子先生, 佐藤智子先生, 澤谷先生, 関内先生, トッド先生, 羽田先生, 平澤先生, 邑本先生
13:30～13:33	授業設定, 目的, 着目ポイントの説明 (3分)	吉田
13:33～13:40	ティーチング (17分)	
13:50～13:55	評価シート記入 (5分)	
13:55～14:10	フィードバック (15分)	
14:10～14:13	授業設定, 目的, 着目ポイントの説明 (3分)	王
14:13～14:30	ティーチング (17分)	
14:30～14:35	評価シート記入 (5分)	
14:35～14:50	フィードバック (15分)	
14:50～15:00	10分休憩	
15:00～15:03	授業設定, 目的, 着目ポイントの説明 (3分)	Roots
15:03～15:20	ティーチング (17分)	
15:20～15:25	評価シート記入 (5分)	
15:25～15:40	フィードバック (15分)	
15:40～15:43	授業設定, 目的, 着目ポイントの説明 (3分)	林
15:43～16:00	ティーチング (17分)	
16:00～16:05	評価シート記入 (5分)	
16:05～16:20	フィードバック (15分)	
16:20～16:23	授業設定, 目的, 着目ポイントの説明 (3分)	田中
16:23～16:40	ティーチング (17分)	
16:40～16:45	評価シート記入 (5分)	
16:45～17:00	フィードバック (15分)	
17:10～17:13	授業設定, 目的, 着目ポイントの説明 (3分)	石原
17:13～17:30	ティーチング (17分)	
17:30～17:35	評価シート記入 (5分)	
17:35～17:50	フィードバック (15分)	
17:50～18:15	まとめ	

【当日の様子】



模擬授業の様子



先達からのフィードバック



板書に取り組む参加者

【参加者の声】(抜粋)

- 理系学部一年向けで且つ物理があまり得意ではない学生を対象にした「力学」の模擬授業を行った。前回のマ

マイクロティーチングでは、板書に時間がかかり過ぎたが、今回は適度なスピードで書くことができたと思う。しかし、字が小さくなってしまったので、字の適切な大きさに関しては今後さらに気を付けて行こうと思う。慣性の法則について図を使って説明したが、あとで動画を見ると、水平線が斜めになっている等、欠点が目についた。黒板で図をきちんと描けるように練習をしていきたい。また、描いた図を黒板から消して、次の第二法則の説明に進んだが、図はしばらく残したほうが良いように思った。あるいは、質問タイムを設けて、その時間に学生がノートに図を描けるように配慮すればよかったと思う。ノートを見ながら講義をしたが、先達の教員の方から指摘された通り、ノートは見ないほうが良いように思った。覚えた上で板書するのはなかなか大変だが、ノートに頼らずに講義できるように努めていきたい。また、注意していたものの、講義の音が小さかったり、黒板にむかって話していたりする部分もあったので、後はさらに意識的に改善していきたい。宇宙飛行士のボール投げの動画を見せたほうが良いという意見があったが、たしかに、その部分はプロジェクターで見せたほうが良いように思った。図もパワーポイントの方が良かったかもしれない。板書だけだと学生にとって集中を継続するのが辛いかもしれないので、板書とプロジェクターの併用や、(事前練習をした上での)だるま落としの実演など、学生が飽きることのないような授業を後は考えて行こうと思う。(PFFP フル)

- これは学生からもフィードバック大有り。大人数で大講義室だと、文字をとでも大きくしないと、後ろの方の学生は見づらい。とすると、文字の数を少なく、大きさをできるだけ大きくするしかない。だけど今回のフィードバックの中では、もっと情報があるとよいとのご指摘もあった。個人的には、最近の好みとして、もっとも重要な KW だけスライドに入れるのがいいと思う。そうすると、学生が私の話を聞いてノートをとってくれる。しかもスライドの情報量が多いと、学生も疲れるし、私の存在意義がなくなる。普段は漫画やイラストを入れるように努力している。今回は準備時間が足りなかつただけ。最後に、スライドの数とデザインがそのままよいとのフィードバックと、もっと多くの情報を載せてほしかった・絵などを入れてほしかった、というフィードバックを受けた。そこから分かったこと：人お好みはそれぞれ。今後は私にとってやりやすい(作りやすい+授業のペースメーカーになるような+感じが欠けないという私の一つの短所を補うような)スライドでやっていきたいと思う。(NFP フル)
- 先達の先生方を前に、大学の講義を実際に行うのは初めてで、大変緊張しました。しかしながら、先達の先生方から、様々なアドバイスをいただくということは非常に良い経験だと改めて感じました。今回のマイクロティーチングを実施する際に、家族に生徒役をお願いし実施し、フィードバックをもらってから、本マイクロティーチングに臨みました。専門的な話を初めて聞く人でもきちんと理解できるかを確認するために、生徒役を依頼しました。しかしながら、先達の先生からアドバイスをいっぱいいただいたので(当然ですが)、まだまだ、改善するところは多いのだなと感じました。しかしながら、先達の先生から、「導入として東北大学の写真を用いている点が良い」「驚きを与える工夫もよい」「話し方がハキハキしていてよい」など、良いところも多く、挙げていただき、自信を持つことができました。ほめられることはいいことだなと思いました。大学教員を採用する際には、模擬授業があるということでしたので、今回のマイクロティーチングは非常によい経験になったと思います。また、自身の講義をしている様子の録画を見て振り返るというのも効果があると思いました。昨年の11月のマイクロティーチングのあとに、初めて自身の授業する姿をみたときは、恥ずかしいなという思いが強かったのですが、しかしながら、2回目になると、他の先生方に講義を見てもらうことや、自身で録画を見て振り返るという経験は非常に重要だと、頭の中で理解しておりますので、恥ずかしいという気持ちはほとんどありませんでした。もっと、より良い授業を作っていこうという気持ちが強くなってきました。まず、今回の模擬授業を通してよかったところは、授業を展開しながら、学生に呼びかけができていたという点です。一方的な授業になるのではなく、学生と双方向の授業を展開していければと考えていたので、その点は録画を見てもうまくいっていたのではないかと感じました。しかしながら、市役所で働いているという経験談についてもうまく取り入れて、行く予定だったのですが、自身の経験談を話したいという思いが強くなり、経験談以外のところの話すスピードが速くなっていったと感じました。また、経験談を取り入れるタイミングもあまりよくないところもあったと感じました。一方で、録画を見て思ったことは、緊張しているせいもあり、まず無駄な動きが少しあるなと感じました。そのため、自信がないように見えました。また、声の大きさについてはほとんどよく、ほとんどの部分は聞き取れるのですが、途中スピードが速くなるせいか、正確に話しをしていることが伝わっていない部分がありました。前回同様に、実際に講義を行っているときも、少し自信が無い部分は、もごもご話している気がしておりましたが、録画を見るとその自信の無さが思っていたよりも分かるのだと感じました。つまり、生徒から見ると、声が小さくなっている部分については、自信が無いのだと分かってしまうということに気がきました。ですので、講義を行う際には、何度も練習する必要があると改めて感じました。前回はスライド資料を穴埋めで作成しておりましたが、穴を埋める時間が全然ないとアドバイスをいただきました。このことから、今回の授業を行った際には、より短いキーワードに絞り、うまく対応できたなと思いました。(PFFP フル)

た。この先進事例をモデルとして取り入れる手法のメリットとしては、後発効果による効率的なイノベーションがあります。しかしながら、デメリットとしては、先進事例ばかりに目が行き、模索の努力と方法論が身につかないということがわかりました。羽田先生は、現在の日本は、単に先進事例を真似るだけではなく、独自の大学制度を創出していくことが重要だとおっしゃっておいりました。また、海外の大学を理解することで、これからの日本の大学で起きることを予測することができると羽田先生はおっしゃっていました。具体的には、アメリカの大学の状況をみると、日本では、今後、外国人学生の拡大、発達障害学生、LGBT、宗教・多文化、高額授業による破産などの問題が起こってくるのではないかと、羽田先生はおっしゃっておいりました。現在、私は、障害者理解の研究を行っておりますが、大学における発達障害学生は増えており、その対応を大学でも行っております。東北大学でも特別支援センターなどを設けて発達障害者の対応などをおこなっております。日本の大学だけを知るのではなく、海外の大学の状況を知ることとは大変大切なことだと思いますので、パークレー研修では、Disabled Student's Program がどのように展開されているかを、しっかりと学ぶことが重要だと改めて思いました。羽田先生の授業でもあったように、大学の制度などを、基盤から理解することで、幅広い視野を持つことができ、日本の大学にも貢献することができると考えました。(PFFP フル)

- 中島先生からは、日米の大学の違いについて、「学士課程教育の目的が違う」「入学の仕方が違う」「専攻の決め方が違う」「カリキュラムが違う」「コースの進め方が違う」「学習時間が違う」という6つの観点から授業をおこなっていただきました。その中でも、印象に残っているのは、専攻の決め方がちがうということです。具体的には、日本は組織帰属主義で、自分が所属する学部、学科の科目を履修し、アメリカでは、プログラム主義と呼ばれるもので、専攻要件をみたすように科目を履修することや、複数専攻等の選択肢がある点で異なるという点です。アメリカの大学では、既修条件で統制されるため、単位が厳格に決められており、テスト方法なども明確に示されているような印象を受けました。しかしながら、日本と違い、研究室などは無いようで、専門の教授とも、大学4年間で、面会する機会も無い人もいるということでした。日本の大学では、専門家を育成しているのを目的とし、アメリカの大学では、リベラルアーツを重要としている印象を受けました。アメリカの場合は、専門的な学習というのは、大学院に入学してから行われるということを知りました。また、今回海外研修で訪問するパークレーの教室についても、中島先生から紹介がありましたが、映画館のように非常に大きい部屋で実施されるということがわかりました。また、大規模の授業は、教授が行い、小規模のGSIは大学院生(TA)が実施しているということでした。今回の海外研修では、GSIにも訪問する予定ですので、どのように授業展開をおこなっているかをしっかりと勉強できればと考えております。海外研修では、施設などのちがいのもちろん、勉強になるかと思いますが、大学での生徒の様子などもしっかりと把握していきたいと思えます。(PFFP フル)
- 羽田先生の講義の中で印象的だったのは、相違点がさまざまある一方で、両国の共通点もあるという点であった。今回は比較を通して自分の組織の問題点をクリアにできれば、と考えていたが、それだけでなく、同じような悩みの中から、先生方がこらしている工夫を伺うことも十分できるのだという気づきがあった。特に、アカデミック中心のカリキュラムから職業志向へという話は、コースの教員で会議をするたびに話題にあがる点であった。特に、心理士の国家資格化を控え、この傾向は強まるのが予想されている今、研究大学としての東北大学の心理部門が今後どうあるべきか、ということについては、なかなか結論が出ずにいる。現地では、大学附属のクリニックの先生にお会いし、学内外での臨床研修の体制を伺うとともに、臨床と研究をどのようにバランスを保っているのか、ということについて伺いたいと考えているが、日米では資格取得に至る過程も違えば、資格取得後の社会的地位も異なるため、学んだことをどう持ち帰ることができるか、という点については、正直悩んでいたところだった。しかし、昨日の講義を受け、アメリカでも同様の問題が生じている可能性も十分考えられるということがわかったので、そういった視点でのディスカッションが深められれば、と思った。パークレーは、地域における研究大学ということで、東北地方で心理の博士課程を有する東北大と立場としては共通する部分も多いように思われるため、学んだことを活かせる部分もいろいろとあるのではないかと期待したい。資格取得までの流れについてはある程度勉強したが、まだ不十分な点があるため、残りの時間でさらに情報収集につとめたい。また、日本の心理の国家資格化を含む現状について、きちんと英語で説明ができるよう、準備しておきたいと思う。質問したい部分の議論を深めるためには、日米それぞれで定められる実習時間など、カリキュラムの違いや類似点についても、事前に可能な範囲で整理しておきたいと思った。現在立場上、学部学生に関わるのはゼミ生の指導が中心で、講義を担当する機会はほぼ大学院に限られている。そのため、米国の学部教育についてはあまりきちんと調べていなかったため、中島先生の講義は大変勉強になった。フィールドワーク以外の時間は学部教育に関する内容がほとんどだと思うので、講義で得た知識を自分の中で整理し、授業参観やGSIとのディスカッションに臨みたいと思う。卒論がなく、指導教員という概念もない、というのは正直かなり驚きだった。大学院に進学しても、最初の2年程度はゼミという概念はほぼないので、今の自分の仕事の中心を占めているゼミ生の指導という関わりがD生に限られる状況というのはとても新鮮であった。(NFP フル)

東北大学図書館ツアー（フルコース・オプション）

【日時】2017年2月24日（金）10:00～12:00

【会場】東北大学 川内南キャンパス 図書館

【概要】東北大学図書館の協力のもと、本学の図書館の理念、サービス内容について講義を受けるとともに、ラーニングコモンズ、二号館、狩野文庫などの見学を実施した。フルコース参加者のうち、希望者の他、プログラム修了生、高度教養教育・学生支援機構の教員などの参加もあった。

【タイムテーブル】

10:00～10:30	東北大学の図書館について
10:30～12:00	図書館見学、質疑応答

【当日の様子】



見学の様子

「比較の目を育てる」海外他大学訪問調査（フルコース・オプション）

【日程】2017年2月27日（日）～3月5日（日）

【引率】岡田有司 准教授, 今野文子 講師

【概要】カリフォルニア大学バークレー校にて、キャンパス見学や授業参観を行い、学生の学びを促進するために大学がどのような教育環境を整えているのかについてフィールドワークを行った。また、大学院生で Graduate Student Instructor（いわゆるティーチングアシスタント、GSI）のトレーニングを行っている GSI 教育研究センターの講師陣と共に、バークレーの教育制度や GSI 制度などについて議論を通して学んだ。

【タイムテーブル】

Monday 27 February

09:00-09:30	Welcome and introduction to the program	Linda von Hoene Sabrina Soracco
09:30-10:00	Teaching and Learning at erkeley	Linda von Hoene
10:00-11:30	The Basics of Teaching	Linda von Hoene
11:30-12:30	Lunch	
13:00-14:30	Campus Tour	
15:00-17:00	Fieldwork, meetings with faculty	

Tuesday 28 February

09:00-11:00	Observation: The Politics of Educational Inequality (being finalized)	Lisa Garcia Bedolla
11:00-12:30	Workshop: Fostering Student Participation; Fieldwork, meetings with faculty	Michel Estefan
12:30-13:30	Lunch	
13:30-14:30	Student Learning Center	Cara Stanley
15:30-17:00	Observation: Brain, Mind, and Behavior (Lecture)	Prof. David Presti

Wednesday 1 March

09:00-10:00	Observation: Politics of Educational Inequality (GSI section)	Noah Katznelson
10:00-11:00	Debriefing of Day 2	Linda von Hoene
11:00-12:00	Observation: Brain, Mind, and Behavior (GSI section)	GSI
12:00-13:00	Lunch	
13:00-14:00	Fieldwork, meetings with faculty	
14:00-15:00	Observation: Politics of Educational Inequality (GSI section)	Noah Katznelson
16:00-17:00	Observation: Brain, Mind, and Behavior (GSI section)	GSI
17:30-19:30	Graduate Student Social Event	

Thursday 2 March

9:00-9:30	Overview of Day's Program; Debriefing of Day 3	Linda von Hoene
10:00-11:00	Fieldwork, meetings with faculty	
11:30-13:00	Lunch with GSIs	
13:00-17:00	Observations, fieldwork, meetings with faculty; discussions with GSIs; prep for final projects.	

Friday 3 March

09:00-09:30	Overview of Day's Program	Linda von Hoene
-------------	---------------------------	-----------------

10:00-11:30	Professional Standards and Ethics Workshop	Linda von Hoene
11:30-12:30	Lunch	
12:30-14:00	Preparation for Presentations	
14:30-16:30	Presentations	
16:30-17:00	Completion Ceremony	
17:00-18:00	Closing Reception	GSI Center

【研修の様子】



講義の様子



他己紹介の様子



授業参観の様子



学習支援センターCara センター長



ディスカッションの様子



参加者集合写真



ゲストハウスからの眺め



プレゼンテーションの様子



修了証授与

【活動全体について】

2016年度のパークレーでの研修は、2015年度のプログラムで位置づけの見直しを行い、「海外他大学訪問調査」としてフルコース参加者のオプション項目での実施という形式を継続するかたちをとった。その結果、PFFPフルコース参加者から1名、NFPフルコース参加者から3名、2015年度に参加が叶わなかったPFFPフルコース修了生1名が参加した。内容についても、2015年の内容を引き継いで実施することとし、授業参観の対象については、なるべく文理両分野から1科目ずつ設定できるようにパークレー側に依頼した。

【フィールドワーク（研究者訪問）】

例年通り、参加者には自分の専門分野に関係する研究室などを積極的に訪問するよう呼びかけた。事前に訪問を希望する研究室や大学教員を探し、自分の研究テーマを含めた自己紹介、訪問理由を英文で執筆し、アポイントメントをとった。例年同様、これらのプロセスを通して、他大学の大学教員へのアポイントメントの取り方、英語による自己紹介、訪問理由の書き方の一連の流れを体験してもらうことができた。また、研究室訪問のみにとどまらず、授業参観についても積極的にアポを取って実施するよう促した。

【参加者の声】(抜粋)

- 率直に、海外の教育に触れ学ぶ機会がやってくるなんて想像もしていなかった。UC Berkeley での日々は教育を考えていく上でかけがえのない経験となった。身に飛び込んでくる光景は私にとって何もかも新鮮で、イメージーションを掻き立てるものだった。私は、現在博士課程に在籍しており、まだ教員として働いた経験はない。その「まだ教員として働いた経験はない」や「自分は教員ではない」という少しばかりの思いがとてもナンセンスであることを痛感させられたのは、現地での GSI との出会いからだった。GSI のセミナーやセッションに参加した際に、私は「Faculty の方々ですか？」と質問してしまった。それほど、GSI は Graduate student には見えなかった。なぜか。それは、GSI が楽しそうに、そしてアグレッシブに教育について語り、取り組んでいた姿と、彼らが沢山の時間を授業準備にかけているという語りを、身をもって経験したためである。これほどまでに教育について考えるという環境は、未だ大学にいて経験したことのないものであった。理論的に理解する機会もあった。Bloom's taxonomy や integrated courses など、実践を形式的に表すことも必要である。GSI セッションでは、レポートのテーマを事前に学生同士でディスカッションさせて考えをぶつけていた。学生のキャラクターに合わせて指導案を変えたり、自分の経験を話すことで学生の関心を引き出したりしていた。TA とは何か？ということについては、少なくとも私はこれまで改まった場で教えてもらったこともないし、諸先輩から聞いたこともない。博士課程で東北大学に来て初めて、「TA はね、サポーターじゃないです。自立した教員としてみられます。」と TA のあり方について指導を受けたことが記憶に新しい。TA という名ばかりだけでなく、そもそも TA とは何か、TA 育成のための環境整備が必要だと感じた。学生への指導方法をめぐる GSI セミナー、Linda の倫理セミナー、あんなセミナーを受けてみたかった。比較の目という観点でいえば、これらの事象は、社会的背景の違いによるものであることは言うまでもない。しかし、日本と米国では根本的に違うからといってしまったらもともとももないとも思う。日本は、豊かだ、恵まれている、多民族国家でもないことから国籍が違うということはない。米国では、人種、gender、宗教、国籍など、多様性に満ち溢れており、それらが包摂されている。格差も顕在化している。街を歩けば、多くのホームレス、そして家族で路上生活を送っている姿を目の当たりにする。様々な要素が教育に影響しているし、教育は様々な社会的事象を生成している。そんなダイナミズムに、街を歩いている時間、キャンパス内を歩いている時間、食事をしている時間、日々の生活の中で触れた。日本はそうではないかと言われると、日本にも多様性や格差は存在する。いわゆる方言や特有の食文化が存在するように、人々が暮らすエリアによっていわゆる関西人などのキャラクターがあり、多様である。私は、学位ごとに大学が異なるため、地域による違い、大学による違いを感じるからである。また、最近では、勝ち組、負け組、子ども食堂など食事を家庭でとれない子どもが増えているなど、格差が生じている。Student learning center では、これらの現代社会の色がとも現れているなという印象を受けた。発達障害を抱える学生へのサポート、LGBT の学生、母子・父子家庭の学生、国籍のない学生など、様々な学生のサポートを行っていた。これらは、教育における倫理的側面にも影響するが、多様性を理解し、包摂、対応する力が求められると考えさせられた。教育は社会と表裏一体であることを痛感した。このような背景の中で、どのように community building をしていくかというのも重要なテーマだと感じた。(PFFP フル)
- はじめての海外の大学での研修は、非常に興味深いものでした。その中でも、特に印象に残ったことを下記に記述します。GSI が実施する授業では、20人規模の授業であるが、多くの生徒がディスカッションやディベートに積極的に参加している様子を感じることができた。日本の学生の場合には、恥ずかしがったり、もじもじしたり、と反応があまり、よくないこともあるが、パークレーでは、各々が自分の意見を持ち、身振り手振りをういて、相手に自分の意見を伝えるように授業に参加していたように感じました。また、ディベートの内容も人種に関するような話もあり、これもまた日本とは異なるなと感じました。日本でも、ダイバーシティの重要なテーマとして扱われているが、障害者、最近では、ジェンダーの話は行われている印象であるが、人種については、あまり話す機会が無いように感じています。実際に私もパークレーで授業等を受けるまでは、人種についてはあまり、ピンとは来ておりませんでした。しかしながら、パークレーは、リベラルな地域ということもあり、様々な方が住んでおり、様々なバックグラウンドを持った方々が学校に通っています。そのため、自身の意見を行う際にも、相手側のバックグラウンドを把握していなければ、気づかないうちに傷つけている可能性があります。また、私は、日本の文化や歴史についてしっかりと勉強しておこうと思いました。海外に出た際に、日本の場合はどうだ？などと聞かれる機会は多くなると思います。日本の動向について興味を持っている人も多いと思います。そこで、しっかりと意見を言うことが必要だと考えました。さらに、自身で授業を持つことになった際にも、人種を含めた多様性を意識した授業展開を行っていかなければならないと感じました。実際に、パークレーで受けた倫理の研修では、ダイバーシティに重きをおいた研修を受けました。具体的には、授

業で、グループ分けをする際にも、学生のバックグラウンドを意識してチーム分けをしなければならないと感じました。日本では、ほとんどの学生は同じ人種（日本人）であることが多い為、あまり意識することはありませんが、海外の場合はそうはいきません。今後、日本に学びに来る海外学生は増えてくる可能性もありますので、ダイバーシティについて改めて考えなければならないと考えました。また、今回海外研修で訪問するパークレーの教室についても、中島先生から紹介がありましたが、実際にパークレーに行き、本当に映画館のように非常に大きい部屋で実施されるということがわかりました。そして、パークレーの授業では、数百人の学生を前に、授業を行っていました。私が参加した授業では、多くの学生が質問を教授にしていました。日本では、あまり見られない光景であり、私がイメージしていた通りのアメリカの大学での授業でした。また、質問に対しても先生は的確に、回答していたのが、印象的であった。やはり、日本同様に、授業の準備をしっかりとっているのだと感じました。さらに、クリッカーを使って授業を展開している先生や、途中で、授業に関するテレビ番組やネットの番組を活用することによって、学生が飽きることなく、授業に参加していました。私も実際に授業に参加してみようという間に授業が過ぎたような気がしました。また、ある先生は、授業の時間に5分程度瞑想の時間を取り入れていました。私も実際に瞑想することで、眠気などがとれて、瞑想後はさらに、集中して、授業に取り組むことができました。私も今後授業を持つことになった際には、学生が90分間集中して取り組めるような仕組みを考えていきたいと思えます。驚いたことに、パークレーの授業では、学生のほとんどがMAC pcを持ち込んでおり、先生の提示するスライドはもちろんのこと、先生が話している授業について、的確にメモをしていた。さらに、pcを持ち込んでいない学生については、メモするスピードが日本と比べてかなり、早い印象でした。非常に熱心に授業のメモを取っている印象を受けました。しかしながら、開始時間に遅れてくる学生が多いのは少し驚きました。実際にパークレーには、パークレータイムがあり、授業開始が開始予定時間の10分遅れで開始することが多いとのこと。少し気になったので、デブリーフィングの際に、リンダにどのように改善していくのか、と尋ねたが、明確な反応はありませんでした。日本のビジネス文化では、遅刻はあまり許されることではないのですが、他の国では、寛容である可能性もあるので、他国の文化を知ることは改めて重要だと感じました。単純にパークレータイムが良いということではなく、他の文化を知ることが重要だと感じました。(PFFPフル)本訪問調査において、“The Politics of Educational Inequality”と”Brain, Mind, and Behavior”のいずれも200人程度の大講義を2つ見学した。講義は教員毎の個性もあるため一概に国内と国外の比較が難しいところもあるが、明確に学生の授業姿勢及び教員の授業スタイルについて優位に異なると思った点があった。学生の授業姿勢について大きな違いを感じたことは、それが”多様”であることである。ある学生は一心不乱にノートを取り、ある学生はラップトップPCでSNSに勤しみ、ある学生はとにかく質問などの発言に力をいれていた。この背景には教員の授業スタイルについての国内外の違いが大きいと感じた。相対的に国内の授業ではできるだけ標準的な授業の受け方を提示し、それに沿うケースが多いと感じている。例えば授業参観をした常微分方程式入門でもそうだったが、多くの理科系の授業において、ノートに書いてほしいことはそれとほぼ同じフォーマットで黒板に書くことが普通になっている。私も高校でも模擬授業などをすると「生徒にノートにかいてほしいことが正確に同じフォーマットで黒板にかかれているか」を重要視されて評価された。また、仮にスライドを用いて授業をする場合は、そのスライドを学生がメモしやすいか、もしくは配布しているかということをよく一つの観点にされている。これはできるだけ多くの学生が授業についていけるような形にする上で、ある一定の形をつくることでできるだけ授業にのぞむ姿勢にとらわれない理解度を目指しているからだと考えられる。今回見学した授業はいずれもスライドを用いた授業だったが、どちらの授業のスライドもキーワードのみを羅列したもので、目的としては学生にそのスライドを読んだり確認してもらうというよりは、教員がその都度何の話をするかを忘れないためのメモ書きのようなものを感じた。そのため学生がその授業の内容を確認するためには何らかの形で記録に残す必要があり、その結果かなり多様な授業を聞くスタイルになっていると感じた。例えば近年東大で105分授業を導入しそれを皮切りに複数の大学が90分を超える授業時間を採用するようになってきているが、その背景に大学設置基準だけでなく授業内に復習をする時間（10分程度のミニテスト）を設けるという動機がよくきかれるようになってきている。これもある意味では授業における学生の最低限の理解度を担保しようという取り組みであるが、Berkeleyにおいてはこのような細やかな教育的配慮についてはGSIシステムにゆだねて、その分授業は自由な思想で取り組んでいると感じる事ができた。また、学生の姿勢として「積極的な質問」というのも印象的だった。これは今回BerkeleyでGSIの学生や教員等に聞いた限りでは授業の構成や運営が適切であるからと説明されていたが、国内において同程度以上に授業が上手く回されている先生の授業でさえその限りではないと感じており、Berkeleyに入学時点での学生の特徴があるとしか考えられなかった。一つの仮説として考えられるのは国内外における中等教育の学生違いである。例えば日本でも小学校の授業を参観してみると、差はあれど一定数積極的に授業内で質問などの反応を行う学生がいるが、中学、高校と上がった段階でその数は一気に減ると感じている。その背景には初等教育から中等教育への学びの転換としてできるだけパッシブな授業が増える（小学校では調べ学習やディベート等が相対的

に多い) ことが考えられる。一方以前オーストラリアにおける中学校教育に触れたときはかなり自由度の高いレポート課題等が多く、その学びの転換がまた異なる形であると感じることができた。Berkeley も多様な文化圏から学生を受け入れているが、その結果一部の生徒について非常にアクティブな授業の受け方が背景となる中等教育からあるのではないかと感じた。(NFP フル)

- 研修が始まるまで、海外での研修に対する強い抵抗や不安があった。しかし、初日に行われた最初のワークショップで Linda から、英語力を気にせず積極的に参加を、とのお話があり、かなりハードルが下がったように感じた。また同時に、同期メンバーたちが常に主体的に質問や発言を述べたり、空き時間に積極的に会話を持ちかけたりする様子は、何よりの刺激になった。初日に英語に対する抵抗が取り払われたおかげで、聞きたいことを聞き、言いたいことを言い、ほぼ何も我慢することなく過ごすことができ、この 5 日間をむだにせず済んだように感じている。ここでの体験が本当に楽しく充実して、自分にとって肯定的なものとなったということは、おそらく今後のいろいろな機会での自分の姿勢を変えてくれるものと考えている。少なくとも、今の時点で、今年の夏にある国際学会を楽しみにできていることは、研修前には想像もできなかったことである。また、「聞きたいこと／伝えたいことがある」ことの大切さも実感するところだった。自分自身の関心が高まることで、聞きたいあるいは伝えたいという気持ち、うまく伝えられるかという不安を上回っていたように思う。今回、事前にパークレーや GSI について調べたり、オンラインで公開されているパークレーの心理学の講義動画を見たりすることに極力時間を割くようにしていた。フィールドワークについては正直なところ準備の時間が足りず、毎回前夜に行う自転車操業のようなかたちになってしまったが、質問したいことを英語で整理したり、日本の状況を説明する練習をしたり、web 上で調べられることは調べて質問の時間を省けるようにしたりと準備をしていった。事前に丁寧に準備をすることで、自分の中で知りたいことが整理されたり、焦点がしぼられたりし、その結果、限られたワークショップの中で特に知りたいことに優先順位をつけて質問したり、ディスカッション自体が構造化されて相手との疎通がよくなったりし、ストレスの少ないコミュニケーションをとることができていたように思う。Dr. Sheri を尋ねた際には、事前に質問事項を送っていたことで、聞きたいと思っていたことの大半の回答になる資料を用意していただいた。そのため、事前に用意した質問はほぼ役に立たなかったのだが、準備の過程で関心が高まっていたおかげで、追加の質問やディスカッションも自然と発展させることができた。アポ取りを開始する頃から、事前準備の必要性を強く説明してくださった先生に大変感謝している。また、おそらくこれは英語に限ったことではないと思うので、今後もこうした姿勢を継続していきたいと感じた。最後に、研修期間を通じて、同期たちと一緒に過ごした時間は、本当にかげがえのないものだった。各自が明確な目標や問題意識、そして高いモチベーションをもち、今回の研修に望んでいた同期の姿は、研修期間中常に刺激を与えてくれた。年齢や職位を超えておそらく互いにライバル視も牽制もしあっていたらうと感じている。それでいて、互いの話をいつも本当に一生懸命聞き、もらさず吸収しようとし、全く異なる互いの個性を認め合い、ほめ合うこともできていたと思う。尊敬できる相手だからこそ、そうした関係はとても自分の支えになるものだった。毎夜同じ部屋で、なぜか離れた席で、それぞれの仕事をしながら、それでも途中で途中で教育や研究の話をしあった時間は、いつも新しい世界を見せてくれた。違う領域、違う立ち場であるだけでなく、今に至るまでに大学以外の場で多様な経験を重ねて来ている同期たちの経験は、自分の世界や辞書になかった様々な知識や考え方や文化を教えてくれた。自分が当たり前だと思っていたことを話すとおどろかれ、その逆もまたそうだった。何時間話しても飽きることはなく、知りたいことはどんどん増えていった。また、日中同じものを見て、同じものを体験しているはずなのに、そこから得たものや気づいたことは、人によって様々に異なっており、1 日の振り返りを共有することで、互いにまた新たな気づきを得ることができていたようにも思う。他人の目を入れること、人と話すこと、ひとりで考えたり決めたりしないこと、自分の知っているものを当たり前だと思わないこと、そうしたことの大切さを、改めて実感する機会にもなっていた。そしてそんな話をする彼らがいつも本当に楽しそうだったこともまた、この 1 週間の間、自分の支えになっていたし、今後やりたいことや希望もたくさん増やしてくれた。彼らがしている、あるいはしたいと考えている様々な教育のあり方は、自分自身もまた真似してみたいと思うものだった。決して必要以上に近づくことはなかったが、これだけ短い期間で、これだけ強い影響を与えてくれた関係性はおそらくこれまでの人生で初めてで、いわゆる「仲良し」とは少し違うものの、とても大切な同志、仲間を得ることができたように感じている。おそらく修了すればもう全員が集まることはないだろうと思うので、このメンバーで過ごす期間も残りわずかだが、残りの期間、同期たちとの関わりも今まで以上に大切にしていきたいと感じている。(NFP フル)

先達コンサルテーション

【日時】2017年3月14日（水）13:30～16:30

【会場】東北大学 川内北キャンパス 合同研究棟 A303, A304, A305, A306

【概要】先達教員による個人コンサルテーションを実施した。先達教員一人につき4名の参加者と30分ずつ面談する構成とした。先達教員には、事前に担当する参加者名を通知した。また、参加者のプロフィールとリフレクティブジャーナルからの抜粋を掲載した「カルテ」を配布し、参加者が置かれている状況や課題意識について先達が簡便に情報を得られるようにした。

【タイムテーブル】

13:30～13:40	はじめに
13:40～14:10	コンサルテーション①
14:10～14:40	コンサルテーション②
14:40～14:50	休憩
14:50～15:20	コンサルテーション③
15:20～15:50	コンサルテーション④
15:50～16:30	全体ディスカッションとまとめ

【当日の様子】



コンサルの様子



コンサルの様子



休憩中の参加者

【参加者の声】（抜粋）

- 次のような疑問を旨に、先達コンサルテーションに臨みました。第一に、高校と大学との講義のギャップ及び重複に対して、先達の先生方はどのように対処をしているのかということ、第二に、学生の理解度のフィードバックをどのように得、成績評価をどのようにしているのか、ということです。第一の疑問に関しては、ギャップに関しては、例えば薬学の授業では高校で生物学をそもそも履修していない学生もいるので、そのような学生にも配慮して基礎から教えるということでした。また、高校と授業内容が重複している場合では、大学の授業では、高校ではあまりお目にかかれない実物の写真を用いた授業をすることなどにより、大学ならではの講義をすることで学生の興味を惹くような工夫をすることでした。高校と同じような授業内容でも、資料や講義方法を変えることで、大学で学ぶ面白さを伝える余地が多くあることを実感しました。第二の疑問に関しては、学生の理解度を測るうえで、中間試験が重要であることを改めて感じました。また、成績評価に関しては、出席を評価すると、授業の終わり間際に参加して、出席したことにするなど不届きな学生も現れるのでなかなか評価が難しいとの意見を聞くことができました。また、レポート課題だと同じような文章のレポートが提出されるので、テスト評価とレポート課題の選択制に変更したとの意見もありました。このように、現場を経験している先達の先生方からリアルなコメントが聞けたことは、大変勉強になり、非常に有意義な時間となりました。（PFFP フル）

- 3月14日の先達コンサルテーションでは、4名の先達の先生方々に魅力的な授業を展開していくうえで、様々なアドバイスをいただきました。4名の先生方に共通していたのは、自身の授業に対して、学生の評価をしっかりと把握するという点でした。アンケートなどを通じて、学生の反応を把握することはもちろんのことですが、実際の授業している際に、学生の様子をしっかりと把握している点でした。学生の意欲を継続させるために、常に工夫している先生もおられ、その先生は、いつも工夫していることが成功するわけではないとおっしゃっていました。しかしながら、全員が満足する授業を目指しておりました。私も、今後、授業をする機会がありましたら、下準備をしっかりと行い、学生の意欲を継続させることができるような授業を展開していきたいと思いました。また、パワーポイントが主流になりつつある中、板書で授業を行っている先生がおりました。板書の場合は、進むペースはパワーポイントと比較すると、速くはないが、図を書く際に、説明しながら進めることができ、また、先生が書くスピードに合わせて学生も板書できるという点で、学生の理解度が高まるとおっしゃっていました。私もPFFP研修の模擬授業で、板書にチャレンジしようかと考えておりましたが、実際に準備していると非常

に難しいと感じました。特に、板書での授業での経験がないために、板書している間に教室が静かになることが耐えられないと考えておりました。その先生に板書する際の工夫を聞いたところ、長年実施してきた経験があるために、特に問題ないとおっしゃっておりました。改めて、経験を積むことが大事なことだなと感じました。私は、現在、社会人学生として、博士課程後期に通学しておりますが、今後、機会があれば社会人をしてながら非常勤での授業の実施や、1コマでもいいので、授業を行う機会を作っていかなければならないと感じました。なぜならば、これまで PFFP で学んだことを実践していくことが経験となり、自分の力を伸ばせるのではないかと考えているからです。実際に、コンサルテーションしていただいた先達の先生方に、社会人をしてながら、非常勤をするケースはあるかと聞いたところ、そういった事例は聞いたことがあるとおっしゃっておりました。また、非常勤の募集については、基本的には公になっているが、人間関係なども重要だとおっしゃっておりました。そのため、自身の指導教官にも相談しようと思いました。今回のコンサルテーションでは、4名の先生方が年度末のお忙しい時間中、時間を作っていただいたにも関わらず、非常に親身になって、相談を聞いてくれました。また、4名の先生方は、どのようにしたら、良い授業を展開することができるのかを常に考えているような印象を受けました。私もこのような貴重な機会に参加し、アドバイスを受けたところを実践していくことはもちろんのこと、将来的には、後輩育成できるように日々精進していきたいと思っております。指導教官以外の先生方にコンサルしてもらうということは非常に良い機会となりました。改めて PFFP に参加することで自身の視野を広げることができました。(NFP フル)

- もうすぐ新学期が始まるということで、焦っている私なので、先達方には、授業の具体的な運営に関する質問と悩みばかり投げかけてみた。非常勤先の私立大の学生から、授業でもっとディスカッションをしたかったというご要望があった。But、ディスカッションをどうセットアップすればいいか、盛り上がらなかったらどのように盛り上げればいいのか、そして、評価をどうすればいいかなど、分からないことばかりの私である。そこで、先生方から多くの具体的ご助言をいただいた。トッド先生からは、3-4人のグループが、人数的にいいという助言。そして、グループの中で、それぞれの学生の役割を決めるとよい (leader, note-taker, pace-maker など)。これまでの授業で、グループ・ワークやペア・ディスカッションをさせたら、全く関係ない話 (部活や飲み会・・・) で盛り上がるグループもあったが、どうすればそういうのが防げるかと聞いてみたら、mixing students up (同じ学部・学年の学生をできるだけ一緒のグループにしない、毎回、前回とかぶらないように、あらかじめグループを決めておくなど) が効果的なものかもしれないという助言をいただいた (また、邑本先生は、男性が多いクラスだったら、女性をリーダーとすると、うまくいく、という大変興味深いことを言ってくださった)。(NFP フル)
- 7月からの NFP での様々な体験と、この1年間の教員としての体験を通し、先達の先生方に伺ってみたいと思っていたのが、教員としての基本的なスタンスとして、「平等であること」と「個々の学生に合わせること」との間でどのようにバランスをとるのがよいのか、ということであった。この点について、個別の学生指導と講義という2つの場面それぞれについて、1年を通して考えてきたものの、自分の中ではなかなか答えが見出せず、ぜひいろいろな人の観点からこのテーマを考えてみたいと思っていた。まずこのことについて、個別の学生指導という視点から話を伺った。現在のポジションでは、学部生を対象とした講義は業務の中に占める割合がかなり少なく、大学院における少人数の講義と、個別の学生指導が業務の中心になっている。そのため、個別の学生指導は自分にとってもっとも優先度の高い課題でもある。具体的に、この1年の中で特に悩んだのは「私何をやらいいですか？」と尋ねてくる学生への対応だった。卒論や修論のテーマを考える段階で、自分なりの案を持たず、教員に丸投げされたとき、どう答えるのが良いのか、迷い続けてきた。できるだけ学生に主体的に考えてもらえるよう、質問を重ねて学生自身の興味関心を洗い出す作業と一緒に重ねたり、ヒントになりそうな文献を紹介したりするよう心がけてはいた。ここではコーチングのワークショップで習った質問のスキルなどを取り入れてみるなどの工夫もしてみたつもりだった。しかし、卒論や修論というものの特性上、時間的な制約があり、最終的にこちらからテーマを提案するような場合も出てきてしまっていた。学生の能力やモチベーションに合わせた個別対応という捉え方もできるだろうが、一方で、学生同士が受けた指導について情報交換をすれば、人によって結果的に要求水準や対応が異なっていることがわかってしまう、というところで平等な指導ができていないということにもなるのではないかと、という葛藤を抱えながら指導にあたってきた。この疑問や葛藤を、今回先達の先生方に伺ってみた。まず、先生方が口を揃えておっしゃったのは「それは本当に難しい課題だ」ということだった。豊富な経験をおもりの先生方がそうおっしゃるのを聞き、このことについて今後も継続して、またケースバイケースで考えていきたいと感じた。同時に、具体的な助言もたくさん得ることができた。先生方が共通して助言してくださったこととしては、基本的にはやはり学生の主体性を引き出す関わりをすることが望ましいということだった。(NFP フル)

成果報告会／修了証授与式

【日時】2017年3月23日(木) 13:00～16:00

【会場】東北大学 川内北キャンパス 川北合同研究棟 101 CAHE ラウンジ

【概要】PFFP, NFP 各参加者によるプレゼンテーションの後、プログラム OB や先達らとの質疑応答を行った。これまでの活動の様子や報告の内容に関して、先達教員からのコメントを受け、全ての活動の修了とした。その後、羽田貴史大学教育支援センター長より修了証が授与された。

【タイムテーブル】

13:00～13:05	はじめに (羽田貴史 大学教育支援センター長)
13:05～13:15	これまでのプログラムのあゆみ
13:15～14:00	PFFP 参加者によるプログラム成果報告 (各 15 分 : 10 分報告 3 分質疑応答)
14:00～14:15	休憩
14:15～14:45	NFP 参加者によるプログラム成果報告 (各 10 分 : 7 分報告 3 分質疑応答)
14:45～15:30	先達, OB/OG, 列席者からのコメント
15:30～16:00	修了証授与式, 写真撮影

【当日の様子】



成果発表の様子



発表を聴く先達教員



集合写真

各発表の資料は、資料編 A-23, A-24 を参照のこと。

参加者最終課題レポート

フルコースプログラムの参加者には、例年同様、最終課題レポートの提出を義務付けた。レポート課題はプログラム応募の際に設定した課題と同じ内容とし、参加者にはプログラム参加期間中、課題を念頭に置いてリフレクティブ・ジャーナルを作成し、本課題レポートの執筆に役立てるように促した。従って、参加者は同じ課題のレポートに、プログラム応募時と全セミナー終了後の2回取り組んだこととなる。これには、自分が記述した内容を比較、省察することで、成長を実感してもらおうと同時に、自らの価値観を理解、表現してもらおうという意図がある。レポート課題は、大学院生向け、新任教員向けにそれぞれ以下のように設定した。

PFFP（大学院生向け）：「学生にとって、大学でのよい学習経験とはどのようなものだと考えますか。また、そういった学習経験を実現するために、大学や大学教員は何をするべきだと考えますか。」

NFP（新任教員向け）：「自分の授業や学生指導において、その質を高める（よりよいものにする）ための課題は何だと思えますか。また、教員個人の立場から、自大学の教育はどうあるべきだと思えますか。」

提出された最終課題レポートは、資料編 A-25 に掲載した。